
まずはリリカルでハーレムだったり。

17インチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まずはリリカルでハーレムだったり。

【Nコード】

N2292P

【作者名】

17インチ

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの世界に転生するチートオリ主の物語。

オリジナル主人公は想像以上の変態であり読み手を選ぶかもわかりません。

変態に翻弄されながらも周りの美女、美少女、美幼女に好かれて楽しく生きていく世界の不条理を楽しんでください。

prologue (前書き)

当作品に興味を持って頂き、ありがとうございます。
初作品なので至らない点もあるかも知れませんがよろしく願います。

prologue

死んだ

僕は一度限りのはずの生を終えてそのまま消えるのか天国や地獄へ行くのか

生きているものにとって確かめようのない死後の世界を体験する立場になった訳だ

死んだあと意識が戻ったときそこは真っ白な空間だった

そんな一面真っ白な空間でなお存在感のある白い光る球体があり

それは神と名乗った

なるほどテンプレか・・・幼女じゃないのが残念だが

神に人が死ぬと皆さん僕のように転生するのですか？と尋ねると
どうやらそういう訳でもないらしい、それどころかここ二千年位は
1人もいなかったらしい

二千年前というイエス・キリストなんか思い浮かぶがあえて
何も聞かなかった。

僕は神の子供でもなければ処刑された後に生き返ったりはしないのだ
キリストが死んだ世界にもう一度転生してキリストとして生きたな

ら生き返ったというふうには歴史書に残されてるのに筋が通るがあくまで筋が通るだけなので、気にしないったら気にしないのだ

そんなどうでもいいことを考えていると神が話しかけてきた

神はいつている。君はここで死ぬ運命ではないと

つまり転生である

テンプレ通りなら神に誤って殺され転生の流れだが今回は違うとのことだ

神いわく稀に内に秘める器が規格外の者が生まれることがあるそう。僕はその二千年前の人物よりかなり器が大きいらしく元の世界に転生することはできないとか

僕は自他共に認める変態という名の紳士だと思っていたがただの変態では無かったようだ

5歳年下で高校一年生の実の妹が可愛くてしかたない僕は大学生でありながら一緒にお風呂に入っては母親に汚物でも見るような目でみられたが慣れればどうということはない（・ω・）キリッ
という感じの僕である。それより器が小さいとは人類はここ二千年以上なにをやっていたんだか

他の同年代の娘たちより成長の遅い妹が小さなタオルを持って顔を赤らめて風呂に入ってきた時は最高に可愛かったただけは言っておく

そんな道德の反逆者たる僕が実の妹に手を出す前に死んだのは僥倖と言えるが

僕のシスコンぶりも凄かったが妹のブラコンも相当だったように思う

僕が死んでしまっただ丈夫だろうか？と心配したが、そこは流石に神といったところか。どうにかこうにか上手くやったらしい

そうなる今度気になるのは自分のこれからの待遇である

転生するのはいいとして、転生先や僕の受けられる特典などだ

神の下手際で死んだ訳じゃないので色々心配だったが転生先は僕の器に見合った世界を見繕うということまでその自由は無いが特典はかなり貰えるそう

器の大きさに見合った力がないと困るので逆に特典を与えない方が問題なんだとか

僕は考えた

考えて考えてなんかオリジナリティのある特典を考えて

思いついたのがまずはラッキーマンのラッキーである。しかも∞大吉状態のもの、あれだけの幸運があれば生活に困ることも無ければ戦闘になっても負けることはないはずだ。ずっと幸運というのも面白くないのでONとOFFをできるようにしてもらおう。

その特典を神に伝えたとあっさりOKがでて次はなにがいいか聞いてきた

どうやらまだまだいけるらしい流石器が大きいだけある

なので次にもらう特典を決める。常識を操る力というものを貰うことにした

この力は特に元ネタとかは無いのだがかなり常識はずれの力だと言える

たとえば僕を認識することができないという常識を作れば女子更衣室だって覗き放題だ

正直変態で済まないと思っている。恐らく未来の猫型ロボットの道具でできることはこの力で大体できるはずだ

その力にも許可が出て狂喜乱舞してる僕だったが、まだ特典の最低ラインを越えてないとか

幸運な人生を送れて自分の欲望に忠実に生きれるのだから正直これ以上どうでもいいのだが、ここまでよくしてくれた神に悪いので最低ラインを越えるまで適当に増やすことにした

まずは転生したら別荘が欲しい

次にどの世界に行くか知らんが魔力とか気とかを規格外の多さで

ついでに身体能力も規格外のチートで

あらゆるものを取得する才能が欲しい

かわいい妹が欲しい

人間の性別は男として転生する↑かなり重要なのであわてて追加

相手を不快にさせない程度の容姿にして欲しい

フラグをたててラブラブしたり、ハーレムしたい

ぶっちゃけ色んな世界にいつてみたい

色々追加してやっとOKがでた。最後のが効いたのだろうか？ぶっちゃけ常識を書き換えればできそうなことも多かったが

注意事項として元いた僕の死んだ世界には移動できないが他の世界なら大体移動できるらしい

ありがたいことである、器に見合った力を持ちそれを受け止められる世界で個人として認められれば世界の移動はそんなに難しく無いんだとか

しかも原作改変とかなんでもあり、現実に変態に優しくできてるよ
うだ

神にありがとう、第二の人生を楽しませてもらうよ。と告げて僕の意識は薄れていった

prologue (後書き)

今回は会話っぽい会話がありませんでした。次話からはヒロインも出てくる予定なのでよろしくお願いします。

第1話 僕の妹がこんなに可愛いわけがある（妹を桐乃に修正）

神に転生させてもらって最初に待っていたのは二度目の赤ん坊生活だった

幸い美人な母親の元に生まれた僕は楽しい赤ん坊生活を送らせてもらった。

父親においでおいでとかされたが応えるふりして母親の胸に飛び込んだりしたものだ、となりで父親はずっこけていたが

そんな両親にこの世界に来てからもらった名前は楓【かえで】であつた。

苗字が野原なので僕は野原 楓と名乗ることになる

野原とか春日部に住む5歳児と同じ苗字だが特に親戚にそれらしい人物はいないようだ

それに残念ながらここは日本の海鳴市といい皆さんご存知魔法少女リリカルなのはの舞台となっている場所だ

特典として貰った力は問題なく働いているようでラッキーマンのラッキーで母親の趣味のロトくじに数字を選ばせてもらったら見事に一等を当てかなり生活は裕福になったといえるだろう

父親も若いながらに管理職に付きメキメキ稼いでいる

そして僕は生まれつき魔力や気を感じることができ、その使い方もデバイスもないのになんとなくで一流以上に使いこなしてみせた

一番のびっくりは別荘である

うん、確かに神に別荘欲しいとは頼んだんだけど、いくつもある中の一つが、あの『アルハザード』だったんだ

プレシアとかまだ影もない時期にお先にお邪魔しちゃった時は少し申し訳なくなった

それ以前にどうやってアルハザードまで行くんだって話なんだが

僕の家系の先祖に魔法によるランダム転移で無人のいい場所に転移できたら勝手に転移座標の印をつけて自分の土地にしちゃう変人がいたらしく、そのなごりだそうだ

神もムチャクチャな設定を考えたものだランダム転移とか

確かにこれだけ色んな次元世界があるのだから無人の土地など腐る程あるだろうが100を超える別荘はいらねーよ。

ご先祖様、調子に乗りすぎである

そんな訳で転移魔法を使ったことで両親が魔法を使えることがわかった

どちらもデバイスを所持しており。アルハザードには無駄に高性能なデバイスが沢山あったので5歳の誕生日にひとつプレゼントして貰ったのはいい思い出

ここで特典でも一番重要と言っても過言ではない妹の件だが

僕の2歳年下で桐乃【きりの】という、イケメンな親父と美人な母親から生まれただけありマジで可愛い。思わず桐乃ちゃんマジ天使！と叫んでしまう程に

母親ゆずりで茶髪の僕と同じく生まれつき茶髪の桐乃は可愛いという言葉がかすむ程圧倒的可愛いさだ

しかも妹の桐乃が初めて喋った言葉がしゃがんだ僕の服を掴みながら上目使いで

「にい・・ちゃ」

(＊、A、＊) ハアハア

だっだめだぜ、もう一人の僕。手をだしたら駄目なんだぜ

あまりのことに3歳児にして息子が反応しそうになったくらいだ、可愛さ無限大である

父親はそれを見て涙を流して悔しがり、母親は微笑みを浮かべながら僕らを抱きしめてくれた

そんなエピソードもあり幸せな生活は続き、僕は7歳になりました。

7歳と言えば小学校に入学する年である。

学校は近くて学力も高い私立聖祥大学付属小学校だ。

入学式には母親とカメラを構えた父親が参列していて、周りの小学生や保護者たちが美男美女でお似合いの二人を噂していた。僕も小学生らしく二人に手をふって目立ってしまったが

校長や教師や一年生代表の金髪幼女などの話を聞きながらこれからの小学生生活に思いを馳せる。

ふう・・・・・・・・桐乃に会いたい

第1話 僕の妹がこんなに可愛いわけがある（妹を桐乃に修正）（後書き）

本当に申し訳ない！この娘を楓の妹にしたい衝動が抑えられなかった。

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』の桐乃ちゃんです。
読者のみなさんどうかお許しくだされ〜>|_|<

第2話 ラッキー、クッキー、お絵かきー（前書き）

正直今回の話は書いていてかなり楽しかったです。
読者の皆さんにもこの話で楽しんでもらえたら幸いです。

※注意

確認ですが主人公が変態です。それを踏また上でお読みください。

第2話 ラッキー、クッキー、お絵かきー

入学式は少し騒がしいことを除けばなんの問題もなく終わった

一年一組に選ばれた僕らはこれから担任になるであろう女の人に引率されながらこれから一年間使うことになるであろう教室に案内される

「ふむ、ここが僕のテリトリーになるわけか。いい場所だ、お先に失礼するよ」

そういつて教室に入る。流石は私立ということもあって冷暖房完備である

周りの生徒達にテリトリーってなにー？テリトリーってなんのことー？と聞かれたので自分の場所のことだよと優しく教えてあげた

小学生は素直で可愛いものだ、相手が中学生以上だったらさっきのセリフも

なんだこいつきめえWWって反応だったに違いない。

先生が一人一人名前を呼んで決められた席に生徒を座らせていく

かなりの人数の生徒が席に座る時に

「ここが私のテリトリーなんだね。」

とか

「この席は私のテリトリーなの」

とか

「ふんっ、ここが私のテリトリーよ」

なんて声がそこかしこで聞こえてきた。

なるほど、今年の流行語はテリトリーで決まりだな。

「野原 楓くん」

どうやら呼ばれたようだ。小学生モードの僕は素直に先生の指定する席に近づく

なんの因果かラッキーか隣りの席にはどこか期待したような、それなのに不機嫌な顔をしたツンデレアリサお嬢様が座っておられた

これは神のフラグをたてろという御告げに違いない

そう思った僕は席に座りながら人当たりのいい笑顔を浮かべて話しかけた

「僕は野原 楓っていうんだ、呼ぶときは楓でいいよ。よろしく」

完璧だな、これでアリサは俺の嫁状態に違いない

「うるさい」プイッ

『うるさい』×1頂きました。これはいい駆け出しだ、もっと仲良くなればそのうちあの有名な『うるさい』×3も夢ではない

満足げな顔で席に座る僕を見て不思議そうな顔をしたお嬢様がいたようだが僕は気づいていなかった

一年一組の生徒が全員座り終えたのを確認すると、担任の先生が前で自己紹介を始めた

ふむ、年齢は22歳か大学出たての新米教師らしい。子供が大好きで、生徒に真剣に向き合ってくれるだろう熱意も感じるいい先生だな

名前は『成瀬川 なる』先生か、美人な人だしスタイルも抜群だ。可愛い生徒として可愛がって貰おう。呼び方は『なる先生』でいいかな

先生の自己紹介が終わり次は生徒一人一人の自己紹介が始まった

重要人物は顔も名前も知っているので暇を持て余した僕は絵を書くことにした

誰にも気づかれないうちに自分の愛用デバイス『チルノ』からスケッチブックを取り出す

うん、モデルは近くにいるしアリサにしよう。

アリサの方をじっと見ながら鉛筆でスケッチブックに絵を書き始める

ここに影をつけて立体感を出してと、表情はツンデレっぽく照れ笑いでいこう。

さっきからチラチラこちらを見ているアリサ。流石に一分程じっと

見ていたら気になったようだ

顔を描き終わったのでアリサにも見せてやろう。絵の方はなかなかのできた、うん。いきいきしていて今にも飛び出してきそうだ

隣りに座っているアリサの肩を軽く叩いてこっちを向かせる。なによ、といった感じでこっちを見たアリサにスケッチブックの絵を見せてみた

おー、驚いてる驚いてる。色々なことを人並み以上にこなす僕の絵は小学生レベルじゃないからな、そりゃ驚くか

スケッチブックの空きスペースに顔以外もかいていい？と書いてこちらの意志を伝えると顔を赤くしながらそっぽを向いて自己紹介に集中するふりを始めた

すこし・・・というか、さっきよりかなり背筋を伸ばして描きやすいように膝に両手を置いてじっとしていた

なるほど、声で応えるのは恥ずかしいから態度で示すというわけか。
全身から描いていいよオーラがでている、可愛い幼女だ

無言の許可を貰ったことで僕も本気でいくことにする

ポケットから出すふりをしながらデバイスから一つの黒縁のメガネ
を取り出す

視力のいい僕が出したこのメガネは伊達メガネというわけではない

なんとこれは僕の方で常識を書き換えられた。男の夢の結晶『すけ
すけメガネ』なのだ

見た目は普通のメガネなので装着してみる以外に気付く術はない。
しかも魔法で内部のダイヤルをいじらないと透けずにただの伊達メ
ガネのままという親切設計

ふふっ、準備はいいですかなアリサお嬢様。僕はできてる

そんなわけで本気になった僕は描き始めた。

ふむふむ、流石小学生一年生ここは残念な感じだな。将来に期待しよう

椅子に座って潰れたお尻か、可愛いらしいな
なるほど、こんなところにホクロが・・・チョンチョンっと。常に完璧を目指す、ふっ僕の悪いクセだな

所要時間二分ほど、絵は完成していた。

スケッチブックを改めて見るとそこには照れ笑いをしてこっちを見たアリサが裸で椅子に座った姿が描かれていた。下着一枚着けず真っ裸である。

一言いいだろうか。『これはいいものだ』それが僕の今の気持ちだった

これをアリサに見せてしまってもいいものだろうか？

多分怒られるだろう。でも、モデルに対しての最低限のマナーとして見せるのが礼儀だろう。

うん、見せよう。

そう思い。メガネのおかげで裸に見えているアリサの肩を叩く

すると、もうできたの？といった感じの表情でこっちを見てきた。その顔には期待の色が色濃くあらわれている。

アリサ・・・、君は喜んでくれるだろうかこの絵を

スケッチブックをひっくり返しアリサに見えるようにする

時が止まった。

そう感じるほどにアリサの顔はそのままだ。期待がこもったその表情のまま止まっている。

それからどれ程の時間がたっただろうか、生徒の自己紹介が二人その間に終わったように思う

そして時が動き出した

「なんてもん描いてんのよあんたは！」

そう叫ぶと、顔を真っ赤にしてウガーと立ち上がって掴みかかってくるアリサ

やめるんだアリサ、モロ見えだモロ見え。立つんじゃない

騒ぎに気づいた。というか叫んだりしてるので気づかないはずなのだが、なる先生が近づいてきたので目立たないようにスケッチブックをデバイスに収納する

「どうしたの、バニングスさんそんなに大声だして」

たしなめるように言うなる先生。

はっきりいつてなる先生の体は目に毒だ。世界の女性が羨むようなスタイル、アイドル顔負けの整った顔。

それらを生で！透かして！直接！近くで！

ここが天国か・・・

う・・・ん？

どうやら、意識のとんでいた間に状況は進んでいるようだ

「だって、先生！こいつあんな絵を描いて！」

そういつて僕の机の上を指すアリサ

残念ながら、もうそこにはさっきのスケッチブックはないのだよア

リサくん。あるのはへのへのもへじが描かれたお絵かき帳だけだ

それを聞いたなる先生は確認するために僕の目の前に来て、なんと絵を確認するために前屈みになったのだ。

前屈みになったのだ。重要なことなので二回言わせてもらった

もうダメぽ。大胆なる先生を前に僕もいっぱいおっぱ・・・。失礼、噛みまみた

とにかく大変なことになったものだ。

「野原くん、みんなが一生懸命に自己紹介してるのにお絵かきしてちゃだめでしょ」

おっぱいを揺らしながら怒られてしまった。これは反省せざるおえない

「……ごめんなさいなる先生。僕お絵かき好きだからつい」

おっぱいの中心を見つめながら謝る。変態でごめんなさい

「もう……、これからはちゃんと話を聞くこと。いい？」

「うん、なる先生」

「よろしい」

そういつて前屈みのままより近づいてきて僕の頭を優しく撫でてくれる

のちにこの時のことを楓はこう語る。正直そのときはおっぱいを吸いそうになったと

なる先生が前に戻っていった。その時にやっとアリサは机の上のものがさっきのスケッチブックでないことに気づいたようだ

こっちをキッと睨んできたアリサに不敵に笑って見せる

何かまた文句をいつてきそうだったのでそれを手で制して、アリサの耳元であの絵は僕以外は見ないから安心していいよ。ということを小声で伝えると、なる先生から見えないようにレバーを殴られた

いいパンチを持ってるじゃないかアリサ・・・

机の上で気絶していて自己紹介を聞いていなかった僕が、なる先生にもう一度説教され、それを見たアリサがざまーみろといった顔で見ていたのはまた別の話である

第2話 ラッキー、クッキー、お絵かきー（後書き）

今回の主人公にはやりたい放題やらせました。作者自身書いていてこれはひどいwwと何度も思いました。

そんな訳で今回のお話には教師役としてラブひなの成瀬川 なるさんを出させてもらいました。今のところ一応楓くんハーレムに入れる予定です。ぶっちゃけ作者の好きなキャラがじゃんじゃん出ちゃってる訳ですね。

読者の皆さんも登場させてみたいキャラがいたらどうぞ感想のところにご意見お願いします。

では最後に、次話ではなのはに接触してみようかなと思ってますのでお楽しみに。

第3話 楓、準備をすること（前書き）

第3話と第4話を同時に投稿させて頂きます。

最初は2つ合わせて1話分にするつもりでしたが主人公の楓くんが突然変態行為を始めたので分けざるおえませんでした。

読者のみなさんも読んでいて第3話と第4話の楓くんの落差にビックリすることでしょう。

では、お先に第3話をお楽しみ下さい。

※注意

第3話の後半、またしても楓くんは変態行為にはしります。ご注意ください。

第3話 楓、準備をすること

なる先生から問題児指定された入学式から1ヶ月近くがたった

1ヶ月も経つとクラス内も落ち着き始める……。こともなく、
流石小学一年生だ。好奇心が半端ない

そんな中で一番変わった奴がいる。アリサだ

どう変わったかと言うとまずクラスを纏める委員長的なことをやっている

あれ？この娘、原作では一年生の最初はクラスで浮いた感じの設定じゃなかったっけ？まあ、別に悪いことじゃないんだけど

そして何よりコイツむっちゃ僕に絡んでくるようになった、テストの点数がどうか、姿勢が良くないだとか、私はツンデレじゃないとか、『うるちゃい！うるちゃい！！うるちゃーい！！』とか、挙げればきりが無い。最後のは僕の妄想だが

そんなこんなで、楽しい小学生生活を送らせてもらっている

そして今日は体育がある、種目はリレーだ。運動神経抜群の僕からしたらスーパードリフト主タイムなのだが、そんな中一人の少女が俯いているのに僕は気づいていた

体育の時間になった

私立ということで小学一年生なのに着替えは男女別になっている。女子が今いる一年一組の教室で着替えて、男子は隣の一年二組の教室での着替えだ。

それを僕は1ヶ月でよく学んだつもりだ。だが、今は調子が悪い。

なぜなら、突発的に足が吊ってしまったのだ。これは仕方がないね。
ん？何見てるの？僕のことは気にしないで！みんなに迷惑かけない
ように小さくなってるから！

なに？この前も同じようなことやってたって？違うよ！この前は机
に服が引っかかってとれなくなっちゃったんだ！だからね今回もど
うしようもないわけで、えーつまり・・・

「いいから出てけー！」

アリサに追い出されました。アリサの奴めちよつとクラスで発言力
があるからってクラスの奴らを使うとは侮れないぜ

その後、僕は校庭にのんびりと向かいながら人の見てない所でデバ
イスに登録してある体操服のバリアジャケットに着替える。

無駄に高性能なアルハサード製デバイス『チルノ』にはバリアジャケットが百以上登録してあり、これはその内の一つだ。洗濯要らずだしね。

男子の体操服は上が白の半袖、下が紺のハーフパンツだ。そして女子が白の半袖に紺の『ブルマ』だ。

ずいぶん前に体操服についての常識を弄ったような気もするが記憶にない。どうだったかなー？

着替える時間を短縮しているので校庭には一番乗りだ。校庭では我らが担任なる先生がジャージ姿でリレーの準備をしてくれていた。その少し離れたところに一年二組の担任ゴリ先生がいるが本名は知らん、とりあえず動物園に帰れとだけは言っておく。

「なる先生！今日もこの不肖楓、あなたの為に一番乗りです！」

上目づかいでなる先生に褒めてアピールをしてみた。なる先生もこの1ヶ月で慣れたものでいつも通り屈んで頭をナデナデしてくれたが見える。

くそっ、なる先生は渡さんぞー、ゴリラ野郎！手を出したら僕の手でミンチにしてくれるわ！

しかし、逆の発想であの目線が僕の頭をナデナデしたいという子供好きな視線だったら怖いな。あの顔で小学校教師になるくらいだありえるかもしれん

そんな恐怖から準備をするなる先生のお尻を親鳥を追いかけるひよこのようにあっちへフラフラこっちへフラフラ追いかける。

そして、とうとう我慢できずに後ろから抱きつく。こちらをチラッと振り返った先生は気にしたふうもなくリレーの準備を終えて生徒達を待っている

今なにが起きたのかという。抱きつく直前に一時的に僕はなる先生とその周りの常識を操ったのだ

具体的にいうとなる先生に対しては『僕のするセクハラ的なことを全く気にしない』というもので、それを認識した周りに対しては『なる先生が僕になにをされていても気にならない』という感じだ

そういう訳で後ろから抱きついてもある先生は平然としている訳だ

だから、こんなことをしても大丈夫。

僕はなる先生の後ろでしゃがんでジャージの上からお尻を両手でワシッと掴み中心の割れ目をグイッと割開く。

そこまでしても平然としているなる先生を確認してから、僕は開かれたお尻の割れ目に鼻先を埋める。この状態で一分間深呼吸だ。今日の体育はリレーだからね、エネルギー補給しとかないと体力がもたないんだ。なる先生僕先生の為にもがんばるよ！

だが、やはり楽しい時間はすぐ過ぎてしまう。校舎の方から生徒達の声が近づいてくるのがわかる。

丁度一分ほど経ったので名残惜しいが顔を離す。エネルギーを補給させてくれたお礼になる先生のお尻を優しく一撫でしてから常識を操り全部元にもどす。

さてさて、補給も済ませたことだし、いっちょ頑張りますか。

そう意気込んだ僕は、生徒の集合場所で体育座りをして、のんびり授業開始を待つことにした

第3話 楓、準備をすること（後書き）

またしてもなる先生が被害にWW

可哀想ですが主人公は変態がまんしてね。

では第4話もお楽しみ下さい。楓くんのイケメンっぷりがヤバいですWW

第4話 走るのは良いが、別に一位になってしまっても構わんのだろ？（前書き）

こちらが第4話になっています。

第3話との楓くんのギャップが凄い。そんなところも楽しんでくれたら幸いです。

楓くんが覚醒する第4話をどうぞお楽しみ下さい。

※注意

《》で囲まれた言葉は念話だとお考え下さい。

第4話 走るのは良いが、別に一位になってしまっても構わんのだろう？

補給を終えた僕は今絶好調だ。

あんなことをされた後なのに、何事もなかったように僕のクラスメイト達の前に立ち、リレーのチーム分けをしているなる先生を見て思わず興奮してしまうのは致し方ないことだろう

僕がぼーっとしているうちにチームは決まっていた。クラスが6チームに分けられ、僕はDチーム

メンバーはモブキャラ三人に僕、そしてなのはの合わせて5人だ

相変わらずなのはの表情は晴れないけれど、僕は気づかないふりをする。こういうのはタイミングが大事なのだ。

よし！みんな、集まってー！スーパーオリ主タイム始まるよし！

分けられた6チームを1レース目と2レース目に割り振られ、AからCチームが1レース目、DからFチームは2レース目となった。そこに一年二組のチームを3チームずつ割り振れば6チームのレースを二回することになる

アリサはAチームなので2レース目の僕とは違い1レース目だ。それを知ってアリサは

「楓をこてんぱんに負かして、見返してやろうと思ってたのに！逃げてんじゃないわよ！」

と言って絡んできた。なんという理不尽WWW

「ははっ、あんまツンツンすんなよ。1レース目頑張れよ、応援してるからな」

そういつて笑顔で頭を撫でてから背中を押してやる。

なる先生からエネルギーを補給した僕は今賢者モードだからな。大抵のことは気にしないのだ

僕に撫でられた頭を片手で押さえながら真っ赤な顔をこっちに向けるアリサ。そんなアリサに親指を立ててやる。

それを見てアリサは僕から顔を背けて小さな声で

「・・・あんたも負けんじゃないわよ」

といっってから、恥ずかしそうにコースに向かっていった。

さーてと！美少女の応援を無碍にするわけにはいかないよね。これは負けられない戦いになりそうだ

そんなこんなで始まった第1レース、アリサはアンカーだ。流石にいいところ押さえている。

そしてアリサにバトンが渡った。バトンが渡った時点では三位だ、アンカーは他の走者の二倍の距離を走るのでまだ挽回の余地はあるが他のアンカーもなかなか速い。結構厳しそうだ

僕もアリサを大声で応援するが、あと少し及ばずに二位でゴールした。一人抜かしたし大健闘したと思う、だがやっぱりアリサはどこか悔しそうだ。しかも一位は一年二組のチーム、向こうのクラスは大盛り上がりだ

・・・おいおい、僕を差し置いて大騒ぎとはいい度胸だ格の違いを教えてくださいわヒューマン！！

「・・・負けたわ」

「そんな日もあるさ」

「あんたは勝ちなさいよ」

「主人公の僕が負けるはずないだろ」

「ふふ、何よそれ。二組をギャフンと言わせてきなさい、これは命令よ」

「ギャフンと言わせたなら、僕と今度デートしてくれ。これは約束だ」

「う・・・、ふんっ。あんたの努力次第では考えないこともないわ」

「まかせとけ！」

アリサに向けて拳を掲げ満面の笑顔を向ける僕がいた

会話を終えてアリサと別れてコースに向かう僕。

・・・さっきのカッコいいの誰？やべーだろ！のりでデートの約束までしちゃったよ！思い出しても鳥肌ものだねあれは、『主人公の僕が負けるはずないだろ』とか、なに暴露しちゃってんのよww

ふー、落ち着け。さっきの僕よくやった！やっと僕も主人公が板についてきたわけだ。有言実行にも程がある。

気分も高揚して、用意された最高の舞台に到着する。見事アンカーとなった僕、その僕にバトンを渡す第4走者のなのは。死角はない

そして、第2レースが始まった。

みんな一斉に走り出す。僕のDチームもけっして遅くはなかった。まあ、速くも無いが

第4走者のなのはにバトンが渡った時、僕のチームは四位。

なのはは確かに走るのが速くはなかったが半分あたりまでその順位を守っていた

しかし、事件は起きる。僕まであと10メートルというところで何かに躓くように転んでしまったのだ

それを他のチームが見逃す筈もなく、後ろにいた2チームが転んだのは横を追い抜かしていく

なんとか立ち上がったのはは涙目になりながら一生懸命こちらに走ってくる。怪我した膝から血が出ているのが痛々しい

おいおい、泣くなよ。後で僕が膝をなめなめしてやるから泣き止めなのは！

そして泣きながら僕に近づいて来るのはが言った言葉が

「ごめんなさい。みんなに迷惑かけてごめんなさい」

それを聞いた僕は思わず叫んでいた

「バツカじゃねーの！来いよなのは僕がお前を一位にしてやるよ！」

なのはのボタンを持った腕ごと掴んで、逆の手で膝を抱え上げる。
所謂お姫様抱っこというやつだ

「ふえー、の、野原くん。どういふことなの？」

顔を真っ赤にして涙目で見上げてくるなのは。もともと負けるつもりは無かった、約束があったから。

でも、もうひとつ理由が出来てしまった。涙を流す美少女が笑顔になるなら、男ならやるしかないっしょ！

「僕が一位でゴールするから、なのはは特等席で見てくださいよ！」

そういつてなのはを抱えたまま走り出す。一位の奴とは70メートル程離れてる。そいつが残り50メートル走る間に追いつかなければならない。普通に走っても何とか一位になれるだろう。でも、僕は主人公だ。やるなら派手にいかなきゃ！

《『チルノ』頼んだ！》

《サイキョーの、あたいに任せなさい！》

返ってきたのは心強い言葉。それと同時に僕の足が水色の魔力光を帯び、有り得ない速度を生み出す

車でも出せないようなスピードを出す僕。その僕の顔を泣くことも忘れて呆然と見つめるのは。笑いかけてやると真っ赤になって微笑み返してきた。

最愛の妹の為に姫様抱っこの練習はしまくったからな。乗り心地は良いはずだ

どんどん他のチームのアンカーを抜かしていく。先頭を走っている紫色の髪をした少女も追い抜き、僕は見事一位を勝ち取った！

二位でゴールしたのは一組のチームだったが勝負の世界は厳しいのだよ。

およそ120メートルをたった三秒たらずで走りきった僕。速すぎですね、わかります。

同じクラスの奴らに凄い歓迎を受けた僕は足が速い秘密を聞かれまくった。それに対しては足が速くなりたい奴は後で僕のところに来なさい！といってやった

周りの興奮も覚めやらぬ中、僕はなのはを地面に下ろす。僕の方を無言で見つめてくるのは

「なのは、お前さっき迷惑かけてごめんなさいとか言ってただろ？」

「・・・うん」

「迷惑かける何が悪いんだ？」

「え？」

「いいじゃん迷惑かけて、僕たちはチームだ。出来ないことは助け合えばいいじゃん。」

「でも・・・、私なにもできないし」

「僕がなのはの助けになってやる。取り柄が無いなら見つけてやる。だからさ、折角なのはは可愛いんだからさ。泣いたりしないで僕をメロメロにするような最高の笑顔を見せてくれよ」

「うん、う……ん。わかったの……。野原くんがメロメロになるような最高な……。うえゝん」

そう言って泣きついてくるなのは。優しく頭を撫でてやる僕は最高にイケメンに違いない。

そういう訳で一位を勝ち取り、なのはを慰め、二組をギャフンと言わせ、アリサとデートの約束をして。こういうのを最高のハッピーエンドっていうんだね。ちゃんと主人公できてたかな僕は……

怪我をしているのはの膝をなめなめする為に保健室に連れて行く
うと思ったら。なる先生に掠めとられてしまった。アリスにデート
の約束を取り付けにいったら殴られたがなんとかOKをもらった。
なる先生に放課後呼び出された。

なんでやねん

第4話 走るのは良いが、別に一位になってしまっても構わんのだろ？（後書き）

どうでしたでしょうか、楽しんで頂けましたでしょうか？

第4話の楓くんに対して、すこしでもこいつ主人公だったのか・・・。

と再確認してもらえたなら幸いです。

最後に、次話はすずかのお話にしようかなと思っています。

ではでは、どうぞ次話をお楽しみに。

第5話 不吉を届けに来たぜ（前書き）

読者の皆さん申し訳ない！

第1話を見てもらえば理解してもらえますと思いますが妹のモデルと名前を変更させて頂きました。理由は兄にデレデレの桐乃がみたいというだけです。

というわけで妹の名前は桐乃になりましたが間違いじゃないのでご了承ください。

では、第5話をお楽しみ下さい。

第5話 不吉を届けに来たぜ

あの僕が大活躍したりレーから一週間が経過した

その間になのはとは友達になって家にも招待された。何故かアリサも一緒だったが

出会い頭になのはの母親の桃子さんに抱きついて胸に頭をグリグリしてみたり

お姉さんの美由希さんがメガネをしているのを見てお揃いですね。と言いながら『すけすけメガネ』を装着しておっぱいや下半身を眺めてみたり

この通り特筆するようなこともなかった。父親の士郎さんやお兄さんの恭也さんも子供のやることなのでそこまで気にしてはいなかったようだし

アリサにはローキックをいれられ、なのはには腕を抓られたけれど

それくらいだ

僕とアリサとなのはは翠屋^{みどりや}で出しているというシュークリームを食べさせてもらった

美味かったので、なのはに是非とも作れるようになって僕に食べさせてくれとお願いしてみたら

凄いアタフタしてから桃子さんの方を見るなのは、それに対して桃子さんは優しく笑って一回頷いた。

パアツと表情が明るくなったなのは絶対作るから食べてね、最高に美味しくなるまで何回も作るから全部食べてね

そう言いながら僕の手を両手でブンブン振り回すなのは。それを見て蹴りをいれまくってくるアリサ。相変わらず元気な奴だ

帰りには妹の桐乃と両親の為にシュークリームをお土産にくれたので、有り難く頂戴した。

これが初めて高町なのは家を訪れた時の一幕である。

そして今日、意外に近所だったのはと登校している。バス停での待ち時間になんとなくなのはのトレードマークのツインテールを弄りまわす。

それに満足すると、後ろからなのはを抱きしめながら左胸をサワサワグリグリ。

それには流石に許容範囲を超したのか真っ赤になって暴れ出したが

「もぉー！聞いてよ、聞いてよアリサちゃん！かっくんてば本当にどうしようもない変態さんなの！」

もう大事件だと言わんばかりにバスの中でアリサに訴えるのは

余談だがかつくんとは僕のことである。もう幼なじみフラグ立ちまくりだ。『かつちゃん私を甲子園に連れてって』とかね。あれは良い幼なじみだ、僕はかつくんだけでも

「また、こいつなにかやらかしたのね。この間も私のスカートの中に頭突っ込んできて、日差しがまぶしくて日差し除けのためについとか意味わかんないこと言うし」

わかるわかると言わんばかりに、深く頷きながら僕をゲシゲシ足蹴にしてくる。ほどほどにしとけよアリサ。可愛いパンツが見えちゃうぞ

「いやいや、落ち着けアリサなのは。確かに理解できないこともあるだろうが一言言わせてくれ」

僕は一呼吸おいて

「愛ゆえにだよ、ふたりとも！」

言い放つ。ふたりを抱きしめて愛で誤魔化す。愛なら仕方ないというやつだ

・・・ダメでした。二人とも真っ赤になってたけどダメでした。

「ふたりともって、どんだけ変態なのよこいつは！」ゲシゲシ

「で、でもでもアリサちゃんとならいいかも・・・」

アリサはいつも通りだがなのはは大丈夫か？将来のハーレム王たる僕は問題ないが

「なっ、なのはー！間違ってるわよ絶対！法律的に無理だからね、一夫多妻とか！」

おいしい、アリサ。既に結婚まで視野に入れているとは、お前も乗り気だな

「そこは問題ないよアリサ！僕は魔法使いだ。この世界を一夫多妻にするのも不可能じゃない」

「魔法使いってどんだけ万能なのよ！」

「とっても凄いの！」

実は僕が魔法使いであることは、アリサとなのはとなる先生に教えてある。リレーの時僕の足が魔力で光ってたからね。誤魔化すのも特に意味を感じないし教えたのだ

そこでふと視線を感じたのでそちらを見るとバスの前の方にクラスメートのすずかがいて、こちらを見ていた

美少女発見！条件反射的に笑顔で手を振る。それに対して恥ずかしそうに顔を赤らめながら控えめに手を振り返してくれた

ジー

それをジト目でみる二人の目線が痛い。その目は次はあの娘なの？と訴えてきてる。まあ間違いではないけど殴るなアリサ、抓るなののは

そこでやっと学校に最寄りのバス停に着いたようで前の方に座っていたすが先にバスを降りる。僕らは一番後ろの席に座っていたので少し遅れてバスから降りる

「よし、今日も元気になる先生の授業受けるぞ！」

ぐっと伸びをしながら授業頑張る発言。そこにけたたましい音が響く

キキー！（車が止まる音）バン！（扉が開く音）バツ！（すずかが拘束される音）バンバン！（何故か僕が銃で撃たれる音）バタン！（扉を閉める音）ブロロロ（車が去っていく音）

要約すると黒塗りの車から変な男が出てきてすずかを攫っていった。近くにいた僕が撃たれた。気を覆った手で銃弾を弾き落とした。呆然とする周辺一般人↑今ココ

僕から一つだけいいだろうか、・・・何で撃たれたしWWW

第5話 不吉を届けに来たぜ（後書き）

主人公が撃たれましたww。

きつと普段の行動に対する天誅ですね。銃弾は弾き落としましたが

最後に次回予告的な何か

『銃弾を受けなお立ち上がる楓！攫われたすずかに襲いかかる魔の手（主人公の）！すずかは無事家に帰れるのか！』

多分こんな感じです。では次回をお楽しみに

第6話 生きているのなら、神様だって愛してみせる（前書き）

最近早くフェイトをだしたくて仕方ない作者です。

戦闘中に脱ぎ出すフェイトと、戦闘中も変態行為を止めない楓くん。きっと相性は抜群だと思うんだ。

早くフェイトのお尻に頬擦りしたいお！

では、フェイトのことはともかく第6話をどうぞ

第6話 生きているのなら、神様だって愛してみせる

姉さん事件です。目の前で誘拐事件が起きました。姉さんはいないけどね

とにかくデバイスを起動してと

《『チルノ』さっきの車の追跡頼む》

《OK、もうサーチャーで追跡中よ》

すぐにサーチャーから情報が送られてくる。ふむふみ、方角からしてあの廃墟かな？昔一度近くに行ったただだが場所はわかる

「って訳だ。アリサになのは、僕はすずかを追うからなる先生に遅刻するって伝えといてくれ」

「なにが、という訳なのかわからないけどとにかくあの娘を助けてくるのね？」

「そゆこと」

「私たちにもなにかできないの？」

「そうだな、急いで学校に行つてなる先生に事情を伝えてくれ。きつと適切な対応をしてくれるから」

「わかったわ」

「わかったの」

「じゃあさっさと助けてきなさいよ。」

「学校で待ってるからね、怪我とかしちゃ駄目だよ」

「うん、二人とも心配してくれてありがとう。行ってくる」

認識阻害の魔法を発動させてから。僕は全身に水色の魔力を纏い浮きあがり、その場から高速で移動する。目標はこんな時の定番。寂れた廃墟だ

廃墟に着いた。魔法で中を探りながら潜入する。1人だけ離れた場所にいるが他の奴ら合計9人が一室に集まっている。そのサーチャード様子を伺うと9人の方にすずかがいるようだ

ほうほう、成るほどね。すずかが椅子に縛り付けられて目隠しをしている。それを取り囲むように8人の男達がいる。なんというか犯罪の香りがするね、それ意外のなものでもないけど

すずかが捕らえられている部屋の前でデバイスを構える。

音を立てずに空中に非殺傷設定のスフィアを8つ浮かべて狙いを定めて撃ち出す。

目で追うことさえ不可能なスピードで男達の頭を撃ち抜いて気絶させてから部屋の中を覗く

そこには椅子に縛り付けられて椅子に座っているすずかが1人、周りの男達はきちんと全員気絶しているようだ

足音を殺してすずかに近づき全身を眺めてみる

すずかは木製の椅子に座っていて、お腹より上の部分を腕ごと縛り付けられていた。両腕は後ろで一緒に縛られている。足は自由に動くようだが椅子が大きいので地面に足がつかずに逃げることはできないのようだ

椅子に縛られて身動きできない小学生。嫌いじゃないぜ

そつとしゃがんで至近距離からすずかのデルタゾーンを覗く。可愛いクリーム色のパンツが見えた

僕はさっきの男達にすずかが怪我をさせられてないか確かめることにした。

まずは両側の太ももを掴んで脚を広げさせる。うん、ここが怪しいねあの男達変態っぽかったからなここを念入りに調べねば

広げられた脚の間に頭を入れるとそこは魅力的な香りと僅かな熱気を感じた。視界に広がるのは肌色の肌とクリーム色のパンツだけ。そうここはすずかのスカートの中だ。

すずかの足がなんとか閉じようと力が籠められるがそうはいかない。手で太ももをしっかりと固定して患部を眺める。この食い込みとか怪しいな、いやこの割れ目も気になるぜ。

目の前には足を限界まで開かれたすずか、その足と足の間を数センチの近さで眺める僕。はたから見たら変態かもしれないが違うからね。これは診察的なにかだから、いわば僕はお医者さんだからすずかのためであって私利私欲ではないのだよ

パンツの上から触ってその下に怪我がないか確かめる。おお、な

んかここプニプニして気持ちいいぞ。味なんかはどうか？布の舌触りを感じながらその下にある確かな柔らかさと温もりをたしかめる

「の……は……らく」

うん？ペロペロ

「野原くう……あひっ……んだよね？」

なん……だど。思わず変なところに舌が当たってしまった。ビクンッビクンッと体を痙攣させるすずか

「な、なんでわかったし」

「私は人の力とか匂いに敏感だから。この感じは野原くんかなって」

すずかのスカートに頭を突っ込みながら話を聞く。なるほど、夜の一族は敏感つと、試しに割れ目を舌先でツンツンしてみる

「あふっ！？そこ・・・ダメ」

ここは駄目か、ならどこがいいのだろうか？

「お前、そこで何をしている！俺の部下達に何をした！」

なんか来た。でも僕はスカートから出る気はないがな

「何をしてるって、見りゃわかんだろ！友達を助けてんだよ！」

「わかるか！全然見えねーよ！襲ってるようにしか見えねーよ！」

突っ込みのうるさい誘拐犯だ。スカートに頭突っ込んでる奴には言われたくないだろうが、仕方ないからスカートから顔を出す

「うるさい！ 僕はお前ら誘拐犯を倒して友達のスズカを助けるんだ！ その為に僕は今ここにいます！」

それを聞いた男は驚いた顔をしてから愉快そうに顔を歪める

「そいつが友達だと？ 笑わせるなよ、お前は知らないだろうが。そいつはな・・・」

「やめて！」

スズカは叫ぶが男の口はそれを嘲笑うかのように止まらない

「そいつは、夜の一族と呼ばれる吸血鬼！ 人の血を吸って生きる人

間とは根本的に違う化け物なんだよ!」

「やめてー!」

目隠しをしているというのにすずかの頬に涙が伝う。叫びは知られ
たくなかったという思いが飛び出した形

「どうだ? お前はこんな人の血を吸うような化け物をまだ友達とよ
べるのか?」

男はあんに呼べないだろと言ってくる。実に不愉快だ

「まあ、友達はまだ無理かもな」

「え・・・」

「だろうよ」

すずかの悲しい声と男の得意気な声が聞こえる。すずか、僕は君の心に踏み込むよ

「そんな乙女の秘密を知ったんだ。もう親友か恋人にでもなるしかねえだろうが！」

「えっ!？」

「なんだと!」

何を驚いてるんだ？フラグはもう目の前にあるんださっさと始めようぜ魔法使い！

これから始まる俺カッコイイを見てもらうためにすずかの目隠しを外す。涙目のすずかのおでこに軽い口付けをする

「可愛いは正義！」

僕は叫ぶ

「吸血鬼？夜の一族？なんの問題があるっていうんだ。つまりエッチな女の子の集まりだろ！」

「えーと」

「違くね？」

「うっさい。愛に国境も人種もないんだよ！すずかは可愛い、やさしい、キスしたい、イチヤイチヤしたい！こんなに魅力的なのに、僕が愛さないはずないだろ！」

これが僕の本音だ。どんな相手だろうと魅力的なら愛してみせよう

「みんな違ってみんないい！女の子が実は吸血鬼とか萌えるだけだろーが！エロゲーやれやバカ野郎！」

男として素養が足りない誘拐犯を殴り飛ばす。うちの桐乃だって5歳でエロゲーやるのにいい大人の癖にお前は本当に駄目な奴だ

もうね、気とか魔力とか使ってないけど結構本気で殴ったもんだから男の左頬は陥没してた。男を叩きつけたコンクリートの壁も陥没してた。

でも生きてるから問題ないよね

うるさい男がいなくなったので静寂が訪れる。すずかは僕の言葉を待っているようだ。拘束されている縄などを全部取っ払ってから話しかける

「すずか愛してる。夜の一族であることも体も性格も全部愛してるよ」

「・・・うん、私も前から野原くんのこと気になってた。多分好きだったんだと思う。何にも縛られない自由なこととか少しエッチなこととか全部」

「うん」

「それで今日助けられてやっぱり間違ってたよ。私は野原くんが好き。そして私も愛してるよ・・・んっ・・・」

頬を染めて花の咲いたような笑顔を浮かべる。そしてすずかの顔が近づいてきて僕らの距離は0になった。子供らしい触れるだけのキス。でも、これ以上ないほど気持ちがいっぱいだった。

やっぱり夜の一族ってエッチな女の子の集団のことだと思うんだけど違うのかな？

む？男達が大勢気絶しているという謎の空間ですずかと二人イチヤイチヤしていると廃墟の中に数人の気配が入りこんでくるのを感じた。どうやらタイムオーバーだ。

「すずか、なんか助けが来たみたいだ」

「お姉ちゃん達かな？多分」

「うーむ、ここで鉢合わせしても構わないんだけど。色々聞かれるの面倒だし帰るわ」

「帰っちゃうの？」

そんなウルウルした目で見んな。魔性の少女だなこれは

「まあね、また明日なすずか。あと、僕のことは楓でいいから」

「うん、また明日ね。楓くん」

「ああ」

「高町さんとバニングスさんに負けないように魅力的になるからちやんと私”も”愛してね？」

「了解」

うん、自分からハーレム入り希望とは、やるねずか。僕もみんなに相応しいように自分をより磨かないとね！まずは家に帰ってエロゲーだ

魔法を使って窓から外に飛びたつ。

そしてすずかに振り返り、唇に人差し指を添える

「僕が魔法使えるのはお姉さん達には内緒だぜ、あくまで僕はすずかを愛してるだけ。見たこともないすずかのお姉さんにまで協力するつもりはないから。じゃあな、すずか」

「わかった。みんなには秘密だね」

「そゆこと、じゃ頼んだすずか」

そう言って家に飛んでいこうと思ったが、今はまだ小学校は午前の授業中。アリサとなのはにすずかがどうなったか先に伝えとかなないと後でうるさそうだ

そういう訳で学校に行き先を変えて飛ぶ。なる先生には人助けってことで遅刻を許してもらえた。アリサとなのははきちんと事情を説明してくれたみたいだ

許してくれたどころか、えらいえらいと頭を撫でてくれたくらいだ。

うん、いい先生だよねなる先生って。

そして、アリサとなのはにすずかを無事助けられたことと、すずかもこのグループに入るだろうことを伝える

「あんた、また何かやったんでしょ？」

「にやはは、仕方ないんじゃないかなアリサちゃん。だって月村さん可愛いもん」

「うんうん、可愛い女の子は好きだからね。是非ともあと20人は欲しいところだね」

「調子にのるな！」

「調子にのるなの！」

机の上に座っていた僕は二人に押されて教室の床に転げ落ちるのだ
った。二人の愛が痛いね・・・

第6話 生きているのなら、神様だって愛してみせる（後書き）

無印が近いです、たぶん。

プロットとか無いんで断定は出来ませんが。

最後に、次回予告的ななにか

『神秘のベールに包まれていた野原兄妹の生活がいま解き明かされる！妹からの人生相談？エッチな相談なら大歓迎だぜ！』

予定ではこんな感じ。では次回をお楽しみに

第7話 兄のみぞ知るセカイ（前書き）

今回はあらゆる意味で妹回です。

今流行りのside○○を使ってみました。うまく使えたかは読んでみてください。

では第7話をどうぞ

第7話 兄のみぞ知るセカイ

side 桐乃

私のお兄ちゃんはすごい。勉強もスポーツも家事も、なんでも大人以上にこなしてしまう。

何より短く切りそろえられた私と同じ茶色い髪と見惚れるほど整った顔立ち、そんなお兄ちゃんを自慢するなという方が難しいに決まっている

それだけ聞いても完璧超人だというのに、お兄ちゃんはとっても優しくてどんな状況でも周りを自然と笑顔に変えてくれるのだ。それなのに真剣な顔をしているお兄ちゃんはどこまでも頼りにできるんだから反則だ

物心ついた時から、というより生まれた時からずっとそばに居たからこそわかる。

私は5歳にして実の兄に心を奪われてしまったことを確信する。何よりも大事で何よりもそばに在りたい、そんな存在を得てしまった。心の奥底に居座るお兄ちゃんはどこまでも私に愛しさを与えてくれる

いつだったか私がお兄ちゃんのベッドに初めて潜り込んだときは優しく抱きしめてくれた。幸せとはここにあるんだと実感させてもらい、それからは毎日一緒のベッドで寝ている

家に親友の『あやせ』と『かなこ』を連れてきた時は大変だった。手作りのタルトを笑顔で振る舞うお兄ちゃん。すごい美味しくて興奮しながらお礼を言う2人をお兄ちゃんは食べたかったらまたおいでと言って優しく頭をなでる

すると2人ははしゃいでいたのが嘘のように静かになって頬を染める。トロンとした眼差しでお兄ちゃんを見つめて何度も頷いていた。私は人が恋に落ちる瞬間を初めて見たかもしれない。

ニコポとナデポを取得済みとは流石はお兄ちゃんだ。その上二人ともとっても可愛いねと言いながら抱きしめるのだからもう駄目だろう。完璧に落ちてるよ私の親友達は

背中に腕を回しながら2人に見えないように悪どい顔をしている。その顔からは『計画どおり』って感じが伝わってきた。そんな表情にもかかわらずドキッとしてしまう。本当にどんな顔しててもカッコいいんだからお兄ちゃんは

お兄ちゃんはモテる。きっと小学校でも大人気なのだろう。私の通っている幼稚園でもあやせとかなが色々言いふらして会ったこともないのに多くの女の子が憧れていたりするのだ

そういうことを知って私が嫉妬するかというと実はそうでもない。全く無いとはいわないが、多くの人にカッコいいお兄ちゃんを知ってもらうことが誇らしいのだ。他の人の口からお兄ちゃんのほめ言葉が出てくると本当にうれしくなる

そして私はそんなお兄ちゃんに相応しくなれるように勉強を始めた。先生はもちろんお兄ちゃん、他の人は知らないけど私にとってはわかりやすく最高先生となっている。

どんどん新しい知識を覚えて正解を言い当てる私にお兄ちゃんは本当に嬉しそうにする。だから私も嬉しくてもっと頑張った

だから、『流石は僕の自慢の妹だ』その言葉をお兄ちゃんの口から聞いたときは涙を流して喜んだ。その後私の大好きな優しい笑顔で頭をなでられて嬉しさを頭の中が真っ白になった。

その後のことは恥ずかしいのだけど私は『好き』という言葉を連呼しながらお兄ちゃんに抱きついてキスをしまくったらしい。

らしい、と言うのはその時私はほとんど無意識で本能の赴くままに行動したといってもいい状態だったのだ。後にお兄ちゃんに聞いてみれば、そういえばあの時の私の口内はやけに幸せな感触が残っていたように思う。

間違いなく深い方のキスもしてたのだろう。気づいたらお兄ちゃんのベッドの上だったのだけど、起きていたお兄ちゃんの両手はちゃっかり私を前から抱きしめながらお尻を揉んでいた。

お兄ちゃんはエッチだ。その妹の私がエッチじゃないはずかない。その時は自分から進んでお兄ちゃんの唇に私の唇を重ねた。唾液を交換しながら舌をからめる。胸が痛いほど脈打ち、でもそれは幸せの鼓動。なによりも大事な私のキモチ。足を絡ませてもっともっとと体を密着させる。お兄ちゃんも私のお尻を鷺掴みながら抱き寄せる。・・・相変わらずエッチなお兄ちゃんだ

一番ほしいものはもう私の腕の中にある。幸せな気持ちのまま私た

ちは抱きしめあいながら眠った。

それから3日、今日は日曜日。お兄ちゃんに最近始めた魔法を教え
てもらおう日だ。となりで先に起きていて私の顔をニコニコしながら
見つめてくるお兄ちゃん。私は笑顔でその唇にキスをした。

今日も私は幸せだ。

s i d e 楓

目覚めは最高だった。同じベッドで眠る桐乃、その可愛い寝顔を眺
められるとは。決定打は桐乃からのおはようのキス。僕は今なら世
界だって敵に回せるほど絶好調だ！ いずれ仮面を着けて『ゼロ』を
名乗る日も近いだろう

「お兄ちゃん、おはよう」

顔を離して恥ずかしそうにこっちを見てくる。

・・・我が妹がなんという破壊力。僕意外の例えば親父とかなら出血大量で死んでいたことだろう。それほどの破壊力だ

余談だが僕のことを兄と呼ぶ人数が4人に増えた。

まずはもちろん最愛の実の妹こと桐乃は『お兄ちゃん』とよぶ。

そしてその親友の黒髪ストレートが似合うあやせは『お兄さん』と呼び。

もう一人の親友、赤毛でツインテールの加奈子は『兄ちゃん』と呼ぶ。

最後の一人はネットで出会った『黒猫』と名乗る少女にして厨二病を患っている娘だ。最初はどこの痛い野郎だと思ったが桐乃と同一年の少女だとして。認識を改めた

厨二病の妹・・・アリだな！ということでチャットを放り出す。そ

して魔法で転移して黒猫の部屋に侵入。ラッキーマンのラッキーとランダム転移を同時に使うと行きたい場所にピンポイントで跳べるのだ。チート万歳ww

音もなくパソコンの画面を覗き込む少女の背後に降り立つ僕。

僕の返事を待ってるのだろうか残念ながらもうそのパソコンの先には僕はいない。リアルでメリーさん状態である。

「今・・・あなたの後ろにいるの！」

「えっ！？ヒイヤッ・・・イタッ！」

ちょっと驚かせてみた。黒猫はこっちを振り返った瞬間にびっくりして奇声をあげて椅子から転げ落ち尻餅をついていた。あっパンツ

黒と紺の間のような色を基本としたゴスロリ衣装を身にまとっている美少女。とても可愛い顔が驚きに染まっている。パンツは純

白で黒いスカートを履いているので白が凄く目立つ。いいパンチラだ写真撮っていいだろうか

「はじめまして、可愛い女の子がいると聞いて文字通り跳んできたぜ」

「・・・あなたは？」

「さっきのチャットで君と話してたの僕なんだ。ハンドルネームは『ハーレム王』だ。黒猫さん」

「なるほどね、ハンドルネームからして若くはないと思っていたのだけどこんな子供だとはね」

お前が言うなWWなんかカッコつけながら立ち上がった

「あなた、私も子供だと思っているようだけど。残念ながら外見だけよ悠久の時を生きる私に姿形など飾りでしかないのよ。千年前も

つい昨日のことのように感じるわ」

どこのイーノックだWW

「まあ、実年齢は横に置いて。魔法を使ってみたくない？」

黒猫は表情を変え年相応の期待する顔になる。相手は厨二病を患っているのだ。求めるものはわかつている

「私が魔法を？」

「そうだよ、ここに来たのも転移の魔法を使ったんだ。他にも沢山ある。興味ない？」

「お、教えてちょうだい！」

「わかった、僕のことを『にーにー』と呼ぶなら教えてやろう！」

「にーにー！魔法を教えて！」

大体こんな感じで僕を黒猫はにーにーと呼ぶようになった。黒猫の家は遠見市で海鳴市に結構近かったことだけは述べておく。

そんなわけで一人の実妹とは別に三人の妹分ができたので僕は満足だ。

長くなったが桐乃との魔法の訓練にいこう。剣による接近戦も砲撃などの遠距離もこなすオールラウンドタイプのように教えることも多くて楽しい。

ある程度基礎はできていたので僕の必殺魔法を教えようと思う。最近創ったのだがこれがまた超強力なものができたのだ。

もともになったのはどこぞの料理の下手な女守護騎士の魔法のひとつ『旅の鏡』だ。

あれは空間と空間を繋げて、そこに手を突っ込み魔力の蒐集をする変わった転移魔法の一種だったはずだ。便利ではあるが相手に知られてしまえば避けられる確率も高く取り寄せ専用という欠点もある

バリアジャケットを無視したあれはかなり興味があった。だからチートの頭脳にアルハザードの知識を叩き込み、自分用に作り替えた。それがこれ『旅の鏡 v e r s i o n 楓カスタム』である。

これは相手や対象物自体を転移の座標として細部にわたるまでアルハザード製デバイスで認識し好きな場所に旅の鏡を使うことができるのだ

対象物自身を座標にすることでどんなにその場から逃げても一度座標をつけられてはしまえば決して逃げることはできない。

例をあげるなら相手のお腹の中に旅の鏡を使い繋げればそこにスターライトブレイカーを撃つこともできるわけだ。流石に体の中まで障壁をはる奴はいないだろうし恐ろしい話だ

よし、これをノハラ家だけの魔法の一つということにしよう。危険だから門外不出というやつだ。

ちよいと計算とか面倒くさいけど僕と同じアルハザード製のデバイスのお陰で無事に桐乃も取得することに成功した

実験として僕の障壁で大きめの石を球状に覆い浮かせる。それを結構速いペースで飛ばしていると空中の障壁内でオレンジ色の魔力光が炸裂する。確認すると標的の石は粉々になっていた

うん、成功だ。ちゃんと使いこなせているようで安心した。成功したのが嬉しいのか桐乃は笑顔で抱きついてくる。

「できたー！ねえねえ凄いでしょ」

「ああ、結構難しいんだけどよく頑張ったな」

本当によくものにしたと思う。可愛くて頭もよくて運動もできて魔

法も凄い。本当にスペック高いな僕の妹は

「じゃあさ、ここに褒美ちょうだい？んー・・・」

僕を見上げて目を瞑りながら唇を突き出す桐乃。

やべえ、むっちゃ可愛い……。そんなポーズで頬そめないでくれよ、興奮するじゃないか（ヒソカっぽく）

ふたりでチュッチュする。唇があゝ、とろけるぜコレが本物のキスカ！圧倒的な感触に頭は超桃色状態だ

口を離すと二人の唾液が混じり合ったアーチができる。・・・なんか桐乃が上唇を自分の舌でなめてるんだが本当に5歳かと疑いたくなるエロスを感じる

お互い満足して、さっきの魔法の反復練習を始める。魔法を使いこなすのに反復練習は重要だからね。僕も戦闘を想定しながら練習する

「ねえ、お兄ちゃんは何の練習してるの？」

「ああ、フェイトって娘が来る予定だから。その娘との戦闘で使う動きをちよつとな」

僕は両手を組み、両手の人差し指だけを突き出す所謂カンチョウの構えだ。それを勢い良く突き刺す動きを繰り返す

「でも、それ凄く強力かもしれないけど。ただのカンチョウだよね？」

「ふんっ！ふんっ！その通りだ敵には容赦しない。強力なのを突き刺してやるさ防御不可能なこの一撃をフェイトの後ろの穴にな、ふんっ！」

一回と言わずに十回はやる予定だがな。改造版旅の鏡をフェイトのお尻の穴に繋げてのカンチョウ。これは避けられない、もちろんバ

リアジャケットなんて無視して直接指を突っ込む予定だ

戦いの厳しさを僕が教えてあげるのだ。いずれは自分からしてくだ
さいと頼むようになるくらい教え込んでやる予定だ。ふふっ、楽し
みだぜ

「誰だか知らないけど。そのフェイトって娘もかわいそうに・・・」

小声で桐乃が何かいってるとけど気にしない

その時、愛する母の為に魔法の訓練をする金髪で赤い瞳の少女に悪
寒がはしかったのはきつと気のせいではないだろう

第7話 兄のみぞ知るセカイ（後書き）

一応これで無印前を一段落とさせてもらいます。予定では次回ヒロイン達からみた主人公を書くつもりでしたが、早く無印に入りたくて勝手ながら省略させてもらう予定です。要望があれば書いてみますがとりあえず次回から無印ということでは

今回は多くの他作品のキャラを出しましたが桐乃以外は特に今後出てくる予定はないです。あくまで出したい気分だっただけで深い意味とか無いので。（↑おいww）こちらも要望があれば出すかもという認識でお願いします。

あと、桐乃の性格や口調の違和感はオリジナルだと思って割り切ってもらおうと助かります。容姿はそのままですけどね

プロットないと自由過ぎて怖いwwでも思いつきで書きたいのでこのスタイルでいきます。

では最後に次回予告的ななにか

『そらから降ってくる21個の青い宝石。少女が見つけた気絶した小さい動物の姿。基本動物は好きだ、たがフェレットお前はダメだ！』

予定ではこんな感じ。では次回をお楽しみに

第8話 許せユーノ・・・これで最後だww（前書き）

感想に書かれていた。リニスを使い魔にという提案を取り入れてみました。

作者的には盲点だったのでうまく書けていればいいのですが。実は原作は劇場版しか知らないっていうww

では、第8話をどうぞ

※用語解説（Wiki調べ）

恥丘・・・女性の○○○上部の緩やかな盛り上りを指す。

第8話 許せユーノ・・・これで最後だww

side 楓

小学三年生になりました。周りの美少女達が美少女達に変貌する大事な時期だ。

胸がお尻が太ももが恥丘が女らしく成長する過程を眺めるのは僕にとって至高の楽しみだ。

誰かが言っていた『恥丘^{ちきゅう}は青かった』と、まさに彼女達のそこはまだ青く熟れていない果実のように違いない。全くもって昔の偉人は良いことを言った、そう唸らずにはいられない

一度この時期を逃せば二度と見ることはできない。故に人は、いや男なら追い求めずにはいられない。例え傷つき倒れようとも諦めることなどできようはずがない！！

「わかるか？この気持ちが。溢れ出したこの抑えきれない気持ちが
お前らにわかるか？みんな僕に裸を見せてくれ！」

「見せるか！」

アリサの蹴りがとんできたのでヒラリとかわす。さながら闘牛士のようにアリサのスカートの裾を持ち上げながら。スカートの下からはオレンジと白のストライプ柄が顔をだす。ありがたやありがたや

「スカート捲るな変態楓！」

スカートを押さえて後ろに飛び退くアリサ

「そのその、かつくんはどうしても見たいの？ 私たちの・・・裸」

「・・・」

「どうしても見たい！」

顔を赤くして質問するなのはに僕は気持ちのいい返事をする。すずかは無言でうつむいている

どうしてこうなったのかは少しだけ時間をさかのぼる

さっきまで屋上でお弁当を食べていた四人組。僕、なのは、アリサ、すずか。最初はなる先生が言っていた将来の夢について話し合っていたはずだがどうしてこうなったのだろうか。まあ、間違いなく原因の大部分は僕だが

なのはが、なかなか将来の夢が思い浮かばずにいたので。僕が『将来のこともいいけど、今しか出来ないことも考えようぜ。』と助け船を出したのが始まりだったように思う

みんなが、うーん。と悩んでいたので僕はちよつとした演説を始めたのだ。『みんな、僕らの体は日々変化していることに気づいているかい？』とかそんな感じである。

そして今に戻る。ダメなのか、見せて貰えないのか。今を逃したら二度と拝めないというのに。

そう思うと自然と僕の表情も真剣なものへと変わる。とても見たい、その気持ちを目の前の美少女達にぶつける

「うっ・・・」

「にゃっ!？」

「はう」

みんなの顔が私たちときめきました。といった感じに頬をそめ顔を逸らす

「見せてくれ!僕のも見せるから!」

むしろ見てくれ!

「お・・・、お風呂でなら・・・」

「すずか!?!」

「すずかちゃん!?!」

すずかの思いがけないアプローチに驚きの声をあげるなのはにアリサ。さすが夜の一族、一番奥ゆかしく見えてここぞというところで大胆だ

「よっしゃー! すずか大好きだ!! キスさせてくれキス!」

「えっ、んむ!?! んん~~~~!!」

モジモジしていたすずかを抱きしめてそのままキスをする。唇どうしのキスが終わると、柔らかいすずかの下唇を僕の唇でハムハムと挟む。

「あうあう」

「マシユマロのような、なんて表現があるけどあれって美少女の唇を表現するには役不足だと思うんだ」

真っ赤になって恥ずかしそうな顔でうめいているすずかを見ながら、思ったことを言ってみる

「言いたいことはそれだけ？」

「他に言い残すことはないのかな？」

アリサとなのは怖い顔してどうした。

「いや、まだあるぞ。アリサになのは、今晚はすずかの家でお泊まり会だ！ 広いお風呂で流しっことか見せ合いっことかしよう！！」

お湯で体を濡らした、水も滴る美少女達に囲まれてのお風呂。メイドさん達も巻き込んだのお風呂。想像しただけで胸が熱くなる。

でも忍さんはいや、恭也さんがいるからね。置物みたいにお風呂の端にでもいてくれればいい。桃子さんのように人妻ならまだ大人の包みこむような魅力で思うところもあるけど。恋人がいるとかはね、一気に僕の熱が冷めてしまうのだ。

「な、なに勝手に決めてんのよ! すすかに許可もとらずに」

「いいよね、すすか。おねがい泊めて（うるうる）」

「・・・うん、うん。・・・任せて楓くん。だから泣かないで、ね？」

目を潤ませながら頼み込む。すると、すすかが私に任せてと抱きしめてくれた

「ありがとう」

抱きかえす。後ろにいるアリサとなのはにピースサインを送る

「わかったわよ！全くすずかは楓に甘いんだから。今晚すずかの家ね、なのははどうする？」

「お泊まりする！仲間はずれは嫌なの。一応お母さんに確認してみるね」

そういつて家に携帯で電話するなのは、少し会話した後に電話をきり、こっちに向かってOKサインをしてくる。

よし、今晚は楽しくなりそうだ。

アリサがこれでいいんでしょ！とこっちを見返してくる。ツンデレ

かわゆす W W

「アリサもなのはもありがとな、二人とも大好きだぜ」

そう言って二人の唇に触れるだけのキスをする。

「ふんっ」

「にゃ」

二人は正反対の反応をするが頬をゆるめて赤くなっているところは同じだ

「・・・わ、わたしももう一回」

そんなすずかの要望にも僕は喜んで応えた

有意義な昼休みだったな。午後のなる先生の授業をうけて家に帰っ

てお泊まりの準備をしないとね。すずかの家は猫屋敷だし僕の使い魔も連れて行こうかな

s i d e リニス

「ただいまー」

どうやら私のマスターが帰宅したようだ。猫の姿で玄関に行き出迎える

「にゃー」 《お帰りなさいマスター》

「おお、いつも出迎えありがとうリニス。」

そういつて私に笑顔を向けてくれる。可愛くて人懐っこいその笑顔は見た人を夢中にさせるなにかがあるのかも知れない。そういう私

はこの笑顔を見れるだけでどこまでも満たされる。

私の命の恩人、野原 楓様。役目を終えたただ消えるのを待つ身だった私を救い。その上家族の一員として迎え入れてくれた。

初めは不思議で運命的な出会いだった。満天の星空の下ただ立っていた美少年。死に場所を探して誰もいない場所を選んだはずだったのに。

力なく見上げる私に『君がリニスかそろそろくる頃だと思ってたよ』、ありえないのにまるで私が来るのを知っていたかのような口振りで話しかけてきた。

《あなたは？》

「ん？野原 楓っていうんだ。しがない魔法使いなんかをしているただの子供だよ。」

・・・たぶんフェイトと同じ位の歳だろうか。ただの子供、あの娘もそうだったらどれだけ幸せだったか。

アリシアの代用品として創り出された少女。その母親のはずのプレシアはその少女に愛情を注ぐことをやめ嫌悪さえし始める。見てられなかった、娘のように想い教え導いたフェイトが、事情も知らずに母親に嫌われるなんて酷すぎる

でも、私はただの使い魔だ。プレシアの命令に従うことしか出来ない。そしてフェイトに魔法を教えた後、私は契約を終え最後の力を振り絞り誰にも迷惑のかからない場所に転移した。はずだった・・・

「なにを後悔しているのか知らないけど、死んだら何もできない。残せない。目的が無いなら僕の為に生きろリス。契約しよう」

《けい・・・やく?》

私と少年の足元に水色の魔力光を帯びた魔法陣が浮かび上がる。これは使い魔の契約の魔法陣、少年の顔を見つめる。そこには心が温かくなる笑顔があった。私がこれから好きになる笑顔だ

「契約内容は『僕と一緒に死ぬまで精一杯生きよう』。それさえ守れば、あとはリニスの好きにすればいい。どうかな？」

それを聞いて私の目に心に力がともる。何より生きたいという渴望が溢れ出す。

《おねがいします！》

「了解、人生なにごおこるかわからない。終わる前に諦めるなんてもったいない。物語はまだ続くよりニス、僕と共に生きよう！」

二人を繋ぐパスが確かにできたのを感じた。体から溢れる魔力に驚愕する。あまりの多さに体が勝手に人間形態に戻ってしまった程だ。

「マスター、この魔力はいい」

「ああ、いいねマスターって呼ばれるのも。どうかな？足りないってことはないと思うんだけど」

「凄いです！これなら前より何倍もの力を出せます」

「リアル猫耳最高だね、触っていい？抱きついていい？」

なんか話が成立してないような……。でも、マスターにならどっちもさりたい

「どうぞ、マスター」

両腕を広げて待ち構える。するとすぐに抱きついてきた。

「いい抱き心地だね。尻尾はないの尻尾は？」

そう言って私のお尻を撫で回すマスター。

あつ、そんなところにはないですよ。あるのはもっと上の方で、ダメですスカート捲らないでください。あうゝそんなところグリグリしないで、ああ！？だからって舐めないでゝ。

うっ、わかりました舐めていいですからそんな泣きそうな目で見ないで！？えっ、スカートを自分で捲って？そ、それは・・・わかりましたからそんな目でみないでゝ。ど、どうぞ好きにして下さいマスター・・・ああゝ

・・・20分後

「リニス、これからよろしく頼む！僕たちはパートナーだ」

「はい、ご主人様。末永く可愛がって下さい。何でもします！」

私はもうご主人様無しじゃ生きられない。ご主人様を想うだけで体が熱くなる。

「こらこらリニス。普段はマスターと呼んでくれよ。これから家族を紹介するんだから」

「わかりましたマスター。」

「よくできました」

マスターが軽く頬にキスをしてくれた。それだけで天にも昇りそうな気分になる、幸せでおかしくなりそうだ

「じゃあ行こうか、僕の家族のところに、そしてこれからリニスの家族になる人たちのところに」

「はい、マスター。ありがとうございます」

手を引かれて私は歩き出す。未来は見えないけれどこの方と一緒にあらどんなことだって笑顔で乗り越えられる。幸せになれる。私はそ

んな予感がしていた

side 楓

「パンツにパジャマに桐乃の写真に。うん、荷物はこんなもんでいいかな」

一泊分の荷物をカバンに詰め込む

「大丈夫だと思いますよ、マスター。そういえばさっきマスターの魔力反応を感知しましたが、昨日の落下してきた複数の魔力反応となにか関係あるのですか」

「そういえば言ってなかったね、昨日の魔力反応はロストログアのジュエルシードといって21個あるんだ。さっきこの近くの奴を2個回収してきたから残りは19個だね」

「そうでしたか。わかりました、今度は私も連れて行って下さいね」

「もちろん、リニスには期待してるよ」

今晚はお風呂でウハウハなのだ、その途中でジュエルシードが暴走して『助けて！』なんて念話が来たらいくら温厚な僕でもぶちぎれるからね。あらかじめ封印しといたのだ

あと、今日の下校時に一緒にいたなのはが怪我をして倒れているフレットを見つけてしまった。

何か助けようとしていたので非殺傷設定のスフィアをフレットにしこたま撃ち込んでやった。『なにしてんのよ！』と言った意見もあったが、非殺傷設定だ、問題ない。

僕は三人にこのフレットについて説明する。

『近づくな！こいつの名前はユーノ・スクライアといってS級次元犯罪者だ！超危険だ、触れただけで妊娠する。無害な動物に擬態してターゲットに近づいては奴隷として売りさばく恐ろしい犯罪者だ』
といった感じに

原作通りとは限らない。もしかしたらがあるかもしれないので少し大袈裟に伝えた。それを聞いて三人は顔を青くしてフェレットから離れる。

「なんでそんな危険な犯罪者がこんなところに」

「恐らくここが管理局の目の届かない管理外世界だからだろう、この世界には魔法に対しての抑止力がないからね。人をさらう放題だと考えたんだろう」

「怖いよ、かつくん」

「大丈夫だなのはみんなは僕が守る。でも、たぶんこいつ昨日すでにロストログアという危険な物をばらまいてるみたいなんだ。それはきっと人を襲い始める・・・」

「そんな!?!」

「僕が回収して被害を最小限にするつもりだけど、絶対にとは言えない。ゴメン」

「なに謝ってんのよ！悪いのは全部コイツでしょ。楓が居なきゃもつと大変なことになるんだから」

「そうだね、ありがとうアリサ。よし、なのはにこれあげるよ。魔法の適性があるみたいだし自分の身を守る位ならできると思うんだ」

フェレットの首にかかっていたデバイス『レイジングハート』を渡す。

「私が魔法を・・・、かつくんとお揃い」

なのはの魔力に反応するようにレイジングハートが光を帯びる。

「僕の後には繰り返して」

「我、使命を受けし者なり」
「我、使命を受けし者なり」

「契約の下、その力を解き放て」
「契約の下、その力を解き放て」

「風は空に星は天に」
「風は空に星は天に」

「そして、不屈の心はこの胸に」
「そして、不屈の心はこの胸に」

「この手に魔法を」
「この手に魔法を」

「レイジングハート・・・セットアップ」
「レイジングハート・・・セットアップ！」

《stand by ready》

《set up》

ピンク色の魔力光に包まれていくのはを、外から凝視する。すると、なのはの服が弾け飛んでいく……。カメラで撮りたいとこだが今晚好きだけ見れるので今は自重する。

ピンク色の魔力光が消えたところには元々着ていた制服に似ているバリアジャケットを纏ったのがいた。

「よし、成功だなのは。かわいいぞ」

「にやはは。照れるの」

「そのデバイスにはAIが搭載されているからわからないことがあれば聞けばいいよ。他にもわからないことがあれば僕に聞いてもいいし」

「うん、わかったの。レイジングハートこれからお願いね」

《了解しました。マイマスター》

うんうん、流石だ。いい関係が築けそうだね

「で、この犯罪者はどうするの？」

アリサがユーノを指差しながらこっちを見る

「この世界の警察につきだしたところで魔法で逃げるのは目に見えてるからね。僕が責任をもって拘束しといて、時期をみてロストロギアと一緒に管理局に届けるよ」

「ふーん、なら安心ね」

「お！僕も信頼されたもんだね」

「ふんっ、頼りになる好きな人を信じないで他に誰を信じるのよ」

ちよっ！？デレんなwwどんだけツボを押さえてるんだ。可愛いじゃないか

「と、とにかく、この周辺のロストログアは回収しとくから安心してくれ。今日のお泊まり楽しみにしてるからな」

「すずかの家には私の家の車で行きましょう。なのはの家と楓の家には迎えに行くから用意しときなさいよ」

「うん、楽しみだな～お泊まり会。」

「僕は特にお風呂が楽しみだけどね」

「まあ、あんたはそうでしょうね」

「ふふっ、ノエルとファリンが今準備してくれてるから期待していいよ」

「じゃあ、僕はこいつを拘束してから行くからみんなは先に帰ってくれ」

「わかったわ」

「かつくんまたね」

「またあとでね」

みんなが帰ったのを確認してから。ユーノをバインドで雁字搦めにして、常識を操りユーノが僕の命令なしでは目を覚まさないようにする。そのままアルハザードの地下の研究室に転移で送りお終いだ。

アリシアのように生体ポットに入れたので食事をしなくても勝手に生き長らえることだろう。アースラが来たら起こしてやるつもりだ。

「許せユーノ・・・これで最後だ」

どこぞの弟大好きな忍者のセリフを言ってみる W W

楽しみだなお風呂。みんなの裸を眺めては愛でて舐めては洗って。
夢が広がるね。

第8話 許せユーノ・・・これで最後だww（後書き）

許せユーノwwww。出番は他の作者さんにもらってくれ

予定では次回がお風呂でキャッキヤ、ウフフのシーン盛りだくさんでその次回がフェイト登場の予定。あくまで予定です。次回はお風呂だけなのでそんなに長くないはず。

作者的にはこの小説はフェイトが出てきてからが本番だとおもっています。

最後に次回予告的ななにか

『うっほ！ペタペタ、ボインボイン。ツルツル、ムニムニ。ペロペロ、サワサワ。ゴシゴシ、ニギニギ。』

予定ではこんな感じ。↑なにがだww

では次回をお楽しみに

第9話 不平等は悪ではない。平等こそが悪なのだ。（前書き）

執筆は携帯で投稿はパソコンという謎の行動をとってみたWWWなのでなにかおかしいことがあったら指摘してもらえると助かります。

一応今回のタイトルはコードギアスのシャルルという皇帝の台詞です。タイトルとかネットで探せるのでパソコンって便利ですね。

今回はお風呂に入れません。なんか文章が長くなっちゃったものででは第9話をお楽しみください。

第9話 不平等は悪ではない。平等こそが悪なのだ。

side すずか

私の気持ちはかつてないほど舞い上がっている。

今晚楓くんが泊まりにくる、それだけのことだけど私にとっては大事件だ。何度か遊びに来たことはあったけれど泊まっていたことはなかった

あの楓くんのことだ、もしかしたら同じベッドでお休みなんてこともありえる。というかそうなることが容易に想像できてしまう。

これで舞い上がらない訳がない。す、す、好きな人と並んで寝るなんて想像しただけで顔が熱くなってしまう。でも決して嫌じゃないのはご愛嬌だろう

そんな挙動不審な私を見てお姉ちゃんが面白そうにニヤニヤしながら話しかけてくる

「あの引っ込み思案なすずかがここまで惚れちゃうなんてね。楓君はいったいどうやって攻略したんだか」

「もー、からかわないでよお姉ちゃん！ 他にもアリサちゃんとなのはちゃんも来るんだからあんまり変なことしないでよ」

「しませんよー、でも美少年の楓君にはちょっかいだしちゃうかもね？」

悪戯っぽくそういうが多分大丈夫だろう

「楓くんお姉ちゃんのこと避けてるから多分なにもないと思うけど変なことしないでよ？」

「そうそう！ 何でかわからないけど初めて会った時から露骨に避けられてるのよね。ノエルやファリンには凄いアプローチしてるのに、すずかはなんでかわかる？」

「私も気になって聞いてみたんだけど、お姉ちゃんには恭也さんが

いるからって言ってたけど」

「なるほど、彼氏がいるから近づかないようにしてるってことかしら？ 変なところで律儀な子ね、別に私も恭也も気にしないのに」

お姉ちゃんはそういうけれどおそらく楓くんの考えは違うように思う。あれは気を使っているというより、自分に近づくなという意志の方が強いように思う

「そうだね、楓くんは変わってるから」

でも、笑顔で肯定しておく。私と楓くんにとって変わっていることはきっかけであり大事な繋がりだから

魔法使いと吸血鬼。変わり者同士が出会った始まりの物語が私の中で思い起こされる

そう・・・、あれは小学一年生で初めてリレーがあった日のこと。

私がアンカーに決まり待機場所に向かおうとしていたとき、途中でみたのは金髪の女の子と向き合っている茶髪の男の子。つまりは、アリサちゃんと話している楓くんだった

どうやら一位をとる約束をしているようで力強い笑顔を浮かべる男の子。それに恥ずかしそうにはにかみながら応える女の子。そこには羨ましい位に思いが通じ合った二人がいた

私はその二人を眩しそうに眺めながら、どの程度の力で走れば変に見られないで済むか。あの運動神経のいい男の子が前の順位にいたら抜かさないようにしよう。そんなことばかりを考えていた

そして、リレーが始まる。私のチームは速かった。一位をキープしたまま二位と大きな差をつけて私にバトンが渡る

これだけ後ろと離れていれば、ある程度ゆっくり走っても抜かれずに一位になれる。そう考えて二位との距離をそのままに走り続ける

ある程度走ったところで後ろの様子を見ると女の子が転んでいるのが視界に入る。彼女のチームはさっきの男の子と同じ筈だ

つまり、彼はまだ走りだしてもいない。彼が一位になれるのは残念だが、私がこの周りに合わせたスピードで走っていれば一位になれる。そう確信していた

でも、あとゴールまで40メートルをきったあたりで後ろからとてつもない力を感じた。それを感じて振り返ろうとした時に私の横を何かが走り抜ける。夜の一族として備わっている動体視力でそれを捉える

それを見て私が最初に思ったのは『ありえない!?!』だった。

そこには、女の子一人を抱えてとんでもないスピードでゴールに飛び込む男の子がいた。さっきまで彼はスタート地点にいたはずだ、それなのに私を追い抜かしすでにゴールしてしまっている。

彼の足は水色の光を帯びている。まず、それがありえない。人を一人抱えてあんなスピードを出せるのもありえない。私が本気をだしても絶対に追いつけないスピードだったのもありえない。

ありえないことだらけだ。そんなありえないことだらけの彼を迎えたのは大歓声だった

まるで英雄が帰ってきたような大歓声。まさにクラスメイト達からしたらその通りなのだろう。彼は『変わり者』だ、絶対に変だ。

でも、どこまでも自分を偽らずにそこにある姿に私は憧れた。夜の一族であることを隠す為にできるだけ人と関わらないようにしていた自分が馬鹿らしかった。

だから思い切って放課後に話しかけてみた。人と関わらないようにしていた私にとっては大きな第一歩だった

「あ、あの、野原くん」

「ん？おお、すずかどうした」

野原くんは何故かクラスメート全員を名前でよぶ。決して嫌では無いが、そんな遠慮がないところも変わっている

「今日のリレー凄く速かったね、私ビックリしちゃった」

「すずかも見てたのか、どうだった？マジ惚れちゃうでしょ、僕が女の子だったらきっと告白しちゃうね。いいよ、可愛い女の子ならいつでもウエルカムだ！」

「ちがうよ！？確にかっこよかったけど、そうじゃなくて。人を一人抱えてあんなスピードで走れるなんて普通じゃないよね？」

「何を言いたいのかわからないんだけど？」

「だって、他の人と違うって怖くない？変な目で見られたりとか、イジメられたりしないかとか」

私は何をいつているんだろうか、こんなことを聞いて。絶対変な女の子だと思われてる。でも、野原くんは真剣に応えてくれた

「普通ってそんなにいいかな？僕はいつだってみんなの特別でありたいとおもってるけど。他の人と違うから今すぐかは僕に話しかけてくれた、そうでしょ？」

それを聞いて私は首を縦にふり肯定する。

「でしょ？それだけでも僕は他の人と違ってよかったと思ってる。確かに今の世の中、人を好きになるのもなんとなく理由もなくなることでも沢山ありそうだけど。僕は特別な人を好きになりたいし、沢山いる中から僕を見つけてもらう為に特別でありたいと思ってる」

他の人と違っていい。それは今まで、夜の一族であることを隠さなければならぬと言ひ聞かされてきた私にとって一番欲しかった言葉だった

「いいのかな違って？私はまだ怖いよ」

「なにが怖いんだか、僕だって他の人と違う秘密が沢山あるんだ。
『変わり者』どうし仲良くしようぜ、すずか」

そういつて野原くんは私の頭を優しく撫でてくれた。心が満たされる、そんな初めての感情に戸惑いながらも決して抵抗はしない、安心感からか思わず涙がながれてしまう

「ちよっ！？泣くなよ、なのはに続いてどんだけ女の子を泣かせる日なんだ今日は」

「うう・・・、気にしないで、これは嬉し泣きだから」

「気にするわ！ まあ、楽しくやろうぜ。挨拶とかからでいいから人と関わるようにしてだな」

「ふふっ、じゃあまずは野原くんに挨拶しようかな。」

「どうぞどうぞ、過激でエッチな挨拶をたのむよ」

「じゃあ、また明日ね。野原くん」

そういつて彼に数秒ハグをしてから離れ、相手の反応を確認せずに小走りで帰り道に向かう。

絶対、顔真っ赤だ私。恥ずかしかったけれど自分の素直な気持ちに従ったら、自然とあぁしてしまった。

絶対変だと思われたよね私。彼を『変わり者』なんて言ったけれど、私もたいがい『変わり者』みたいだ。でも、彼とお揃いというだけで嬉しくなってしまう。もうこれはどうしようもないようだ

それから一週間後、私は誘拐されてしまう。そこに颯爽と登場した野原くん、私たちはそこで気持ちを伝えあったのだった。

これが魔法使いと吸血鬼。そんな変わり者同士が出会った物語。

「まうた、ニヤニヤして。すずかっば変な方向に変わったわよね」

楓くんとお姉ちゃんとの馴れ初めを思い出していると、お姉ちゃんがあきれたような口調で話しかけてきた。

「恋は女を変えるってことだね」キリッ

「ナマイキ言っちゃってこの娘は、誰に似たんだか」

「はあ、楓くん早く来ないかな・・・」

「やれやれ、駄目だこりゃ」

そこでノエルから内通電話で来客の報告が来る。楓くん達が来たみたいだ

私はみんなを出迎える為に急いで玄関に向かった

第9話 不平等は悪ではない。平等こそが悪なのだ。（後書き）

次回こそは間違いなくお風呂の回です。もうほとんど書き終わっているので流石にそれが変わることはないと思われます・・・

あと数時間で今年も終わりですね、みなさんはやり残したことはありませんか？ 作者は『うみねこの鳴く頃に散 e p 7』というゲームを最後までできなかったのが心残りですかね。

では、最後の次回予告的な何かは前回やってしまったので一言だけ

『お風呂は裸の付き合いだ。あとはわかるな・・・？』

そんな感じだと思います。では来年になりますが次回をお楽しみにみなさん、ではよいお年を

第10話 濡れるッ！（前書き）

やっとお風呂回です。

なんかここまで来たらどこからアウトなのか気になるところ、とにかくハーレムならこれくらいやろうぜって感じで書きました。

なので、少し自重を忘れていますWW

では、10話をどうぞお楽しみください。

第10話 濡れるッ！

side 楓

手ぬぐいを肩に掛けて、左手にはお風呂セットの入った木の桶を携えている。死角はどこにもない

どこからどう見てもお風呂小僧だ。ポケモンのトレーナーとして登場しそうなくらい完璧なスタイルである。

背負ったリュックの隙間から顔を出す猫のリニスと共に道行く女性達の視線を集めるはずだったが、残念ながら行きはアリサの用意した車に乗っていたのでそういうイベントはなかった

「相変わらずデカイ家だな、金持ちは形から入るから困るよね」

「あんたも、たいがい形から入ってると思うんだけど。何よその格好、恥ずかしいわね」

ナイス突っ込みだアリサ、まさにその言葉をまっていた。でも、恥

ずかしいとは失敬な。昭和の人たちに謝れ

「まあまあ、確かに恥ずかしいけどすずかちゃんも待ってるし早く行こ」

「あつ、なのは裏切ったな！このやろつ、普通の格好で来やがって相変わらず美少女だな〜お前は。こうしてやる！」

「にゃ〜、やーめーてー。そんな手ぬぐい頭に巻いてたら変態さんなの、かつくんと同類に見られちゃうの〜」

本当に失礼な奴だな、尻揉むぞ

「はいはい、すずかの家は目の前なんだからイチヤイチヤしてんじやないわよ。早く行くわよ」

アリサは呆れながら僕たちの腕を掴んで歩き出した

「お待ちしておりました。アリサ様、なのは様、楓様。すずかお嬢様がお待ちです」

玄関の扉が開くとそこにはメイド服姿のノエルさんがいた。メイド服以外を着ているのを見たこともない訳だが

「お待たせしました、ノエルさん。僕もあなたに会えることを心待ちにしていました」

僕は決め顔で言ってみる

「ありがとうございます。では、皆さんこちらです。」

相変わらずクールっぷり。だがそこがいい、ドジっ娘メイドはまだかww

「待ってたよみんな。こっちにお菓子とか用意してあるから付いて来て」

走ってきたさすががノエルと一緒に僕らを案内する

お菓子も良いがお風呂はまだか、僕の格好となのはの頭を見てくれ。早くお風呂に連れていかないと不審者みたいじゃないか、なのはなんてツインテールに手ぬぐいの鉢巻きだぞ意味分からん

「じゃあみんな入って」

すずかに促されて部屋に入ると忍さんとファリンさんがいた

「みんないらっしやい、どうぞ座って」

そんな忍さんの言葉に僕ははおのおので挨拶をする。僕は最低限の挨拶だけだね。どうも、そのくらいだ

「楓君、すずかから聞いたわよう。恭也とのことなら二人とも気にしないから仲良くしましょ？」

「なんのことですか？」

「なんだか彼氏のいる私と距離をとってるみたいだからさ。気にしなくてもいいわよってこと」

「ああ、そういうことですか。勘違いしてるみたいですけど、彼氏がいる人は僕にとって興味の対象外ってだけで別にわざと避けてるわけじゃないですよ」

「え？」

「いえ、美少女と戯れるのは好きですけど彼氏のいる忍さんは僕にとって対象外ってことなんですけど。だから避けてるように感じるかもしれません。が気にしないでください」

「ちょっと、つまり私たちが恋人だから気をつかって避けてたんじやないってこと？」

「はい、興味がないので自然と扱いがぞんざいになるかもしれませんが、んがお気になさらず。ぜひ恭也さんと小作りに励んでください」

「はあ、なるほど。やっと楓君を少し理解できたかもしれないわ。こういう子なのね」

そうまわりのみんなに問いかける忍さんに三人娘が深く頷いていた

「楓は昔から本能に忠実な奴ですから」

「楓くんはいつもこんなだよね」

「かつくんは、いつも変態さんなの」

好き勝手いいやがって、僕がお菓子を貪り食っていると横からティ
ーポットが差し出され紅茶がそそがれる

「ファリンさんありがとう。今日も一段と可愛らしいね」

「あ、ありがとうございます。楓君」

顔を赤くするドジっ娘メイドファリンさん。いいね、ノエルさんと
違って隙だらけなところがまたよしだ。僕のファリンさんを見る目
は情熱に溢れていた

「でも、この温度差は理不尽だわ」

「まあまあ、お姉ちゃんも落ち着いて」

雑談をしながらノエルさんやファリンさん、ついでに忍さんも交えてゲームをして楽しんだり、リニスや沢山いた猫と戯れる。その後、豪華な晩御飯にみんなで舌鼓をうった

やっとだ。やっとお風呂だ！待ちわびたぜ、お風呂セットを何度手放せといわれたことか。そんだけ入りたかったんだよ察してくれよ！

「諸君メインイベントだ、みんなの体を洗うのは僕がやろう。だから、僕の体を洗うのはみんなにまかせる」

「なによ、そのギブアンドテイクでいこうぜ。みたいな乗りは。全然なっていないわよ」

「深くかんがえるなアリサ、体で感じるんだ。そして、なのははそろそろ頭に巻いてる手ぬぐい外そうぜ」

「そうね、おかしいわよなのは」

「わたしも外した方がいいと思うよ、なのはちゃん」

「ええ〜！早く言ってよみんな。何も言わないから外さない方がいいのかと思っちゃったの。というかかくくんが巻いたのに何その淡泊な反応、失礼しちゃうの！」

プリプリと怒るなのは。いや、流石にずっと着けてると思わないし。女の子の装飾品としてはおかしいでしょ手ぬぐいとか、どこのお祭り娘だよ

そんなこんなで脱衣所に入る。いやはや、お風呂も大きいけど脱衣場もでかいね。そこらの銭湯より大きそうだ

そういえば言っていなかったけどみんなで入ることになりました。今ここにはノエルさんもファリンさんも忍さんもいる。

僕はノエルさんとファリンさんをお願いして服を脱がせてもらった。

いや、なんか傍でメイドさんが控えてたもんだから。おもわずお願いしてみたら快く了承してくれたのだ。いつもクールなノエルさんが嬉しそうに見えたのは気のせいだと思いたい

僕がタオル一枚を腰に巻いて突っ立っていると、なんかびっくりする程素早く服を脱いでタオルを巻いて目の前に立っているノエルさんがいた。

何事！？と思ったときには後ろから抱きかかえられてお風呂場に連れて行かれた。ねえねえ、息荒いよノエルさん。僕は後頭部にあたる胸の感触に満足だけでも

常識を操って『お風呂場では僕に裸を見せたくない』と『裸を見られると嬉しくなる』というふうにした。

すると真っ先に後ろにいたノエルさんが体を隠していたタオルを外

す。

「楓様、体を洗わせていただきますね」

「ありがとうございます、ノエルさん」

僕をお風呂場のイスに座らせて僕の体を洗い始めた

すっげー近いんだけど。目の前に色白の肌がある、ノエルさんは手でボディソープを泡立ててそのまま僕の体を擦り始めた

生の胸が顔に当たってるんですけど、ノエルさんが手を動かすたびにムニユッと形を変えるそれは至高の感触と言える。これだよ！これが欲しかったんだ！

「痒いところは御座いませんか？楓様」

イスに座った体の小さい僕の頭をゴシゴシと洗ってくれているのだ。ノエルさんは正面から立ち上がったまま僕の頭を洗ってくれているので、目の前に素晴らしい景色が広がっていた

そこは一番隠さなきゃいけないところだよ！？そのはずなのにノエルさんはまるで見せびらかすように僕の頭を自分のそこに寄せるのだ。思わず唇が当たってしまった時は嬉しそうな艶声をあげていた

絶対この人、クールな顔して元からエロいですよ。お返しということでノエルさんの体を隅々まで洗ってあげたら大層喜んでいた、僕のことはお気に入りの方である

満足げなノエルさんに抱えられながら最初に湯船につかって他のみんなが体を洗い終わるのを待つ

意外にも最初に湯船につかりに来たのはファリンさんだった。そして、体に巻いていたタオルを外してからこちらに近づいてくる。

するとドジっ娘属性を発揮したファリンさんが、目の前で足を滑ら

せてこちらに倒れてきたので抱き止めてあげた

「大丈夫ですか、ファリンさん」

「ううー、ごめんなさい楓君」

「いえ、ファリンさんのこと好きなので僕は抱きつけて嬉しいですよ」

いや、マジで。後ろにノエルさん前にファリンさんという姉妹サン
ドイッチ状態だ。なにこれラッキーマン効果ですかねこれ？しかも
二人とも一糸纏わぬ姿でとか。まじ御馳走様である

「そ、そ、そんな私なんて、おねーさまに比べれば全然未熟だし。
どんくさくて皆さんに迷惑かけちゃうし・・・」

「とっても可愛らしいと思います。誰にも渡したくないくらい」

そう言っ僕はギュッと抱きしめた。ファリンさんの胸が僕の胸により押し付けられて形を変える。僕の顔を見つめるファリンさんが目を潤ませてこちらを見ていた

「こんなに可愛いのかっこいいなんて反則だよ」

「ファリンさんこうしてられるなら反則だってしちゃいますよ」

そう笑顔で言う。

「ううゝ、無理です。我慢出来ませんよゝ。んゝちゅっ」

僕の背中に回されたファリンさんの腕に力が籠もったかと思うと目を閉じた顔が近づいて来る。数秒間唇を重ねてから離れる

「えへへ、ファリンのファーストキスは楓くんでした」

嬉しそうに体をくねくねしているけど色々僕の体にこすれてヤバイ

「楓様・・・んっ」

後ろからの声に僕は見上げるようにノエルさんの顔を見ると、顔を手で固定されてまでも唇を奪われた。すげーよ、キスがバーゲンセール状態ですよ

「私のファーストキスも楓様に捧げさせてもらいました」

おいおい、いつもクールなノエルさんが恥ずかしそうにしてるよ。
今日は凄いね、本当に泊まりに来てよかったよ

今の状態を漢字で表すなら『女男女』といった感じだ。お風呂に入るスタイルの一つの完成系だと僕は思っている

「二人もメイドを侍らせていい御身分ね、楓」

アリスが見たわよ！って雰囲気でこちらに話しかけてきた。横にはなのはとりニスを抱えたすずかもいる。裸で

「あつ、皆さんどうぞどうぞお風呂を人肌で温めておきました」

「あら、気がきくわね・・・って、おかしいでしょ！？人肌でお風呂を温めるって、普通逆じゃない。それに言葉使いもおかしいし」

突っ込み担当はアリスで決まりだな。

「まあ、いいじゃん。仲良く入ろうぜ」

そう促すと三人は湯船に入ってきた。よしよし、苦しゅうないちこ

う寄れ

「ノエルとファリンはどうして楓くんを抱きついてるの」

「そうなの、びっくり仰天なの」

「気にするな、仕様だ」

「楓くんには聞いてないよ」

すずかコワ！

「すずかお嬢様、私共は楓様を好ましく思っているのです。体を触れさせたいと思うほどに」

「好きになってしまったんですよ。すずかお嬢様と同じように」

それを聞いてすぐかはため息をついた後に仕方ないといったふう
に微笑む

「楓くんの魅力は知ってるから。驚きはしないけど二人ともなんて
ね」

「はい、素晴らしいお方ですから」

「かっこいいですね」

あんま誉めないでくれよ。照れるじゃないか

「私達のこと忘れてないでしょうね」

アリスが近づいてきて僕の頭をポンポンと叩く。お返しと言っては
何だがお尻を揉んでやったら頭をはたかれました

「もちろん、ほら来いよアリサ。んでこっちになのはですすかはこと」

アリサを右側に抱き寄せ、なのはを左側に抱き寄せ、すずかをファリンの隣に抱き寄せる。なんかもう、これをハーレムと言わずなにをいうのかって光景だ。後ろにはノエルさんが、頭の上にはリニスがいるしね

お湯は透明なのでかなり鮮明にみんなの裸を至近距離でみることができる。僕の息子はすずかとファリンの間あたりに配置されていて注目の的となっている。

美少女たちの視線を独り占めにして羨ましいやつだww

「ねえねえ、私のこと忘れてない？」

少し離れたところにポツーンと忍さんがいた。他の人はみんな僕の周りだからね

「あつ、どうも忍さん。のぼせない内にあがったらどうですか？」

「まだ、そんなに入っていないんだけど。くつ、これが疎外感というものなのね」

「すみませんね、恭也さんにでも慰めてもらってください。忍さんは僕の管轄外なので」

「恭也、楓君が冷たいよ」

忍さんは寂しそうにお風呂場から退場していった

邪魔者がいなくなったところで今日の目的通りみんなの裸を比べさせてもらった

常識を操ったことで僕に裸を見られることが嬉しくなっているように、みんな進んで見せてくれた

小学生組のツルツルなそれや、少し成長して毛が生え始めたファリンさんのそこ、女として成熟したノエルさんの恥ずかしい所。なるほど、このぷっくりした所が恥丘か。いやはや、いいものを見せて頂きました。

指で開いて見せて？って言ったらなんの躊躇もなく見せてくれたからね。本当にありがとうございますだ。

だけど、興味津々なのはいいけど僕のアソコをあまり弄らないでいただきたい。決して嫌じゃないんだけど、さすがにキスをしながら弄ってきたときは少しびっくりした

そんなお互いの関係をより深めることができたイベントでした。

夜は忍さんを除いた全員で同じベッドでねむった。キングサイズのベッドがある客室があったのでみんなで寝ることができたのだ。小

学生が多いからスペースは問題なしだ。それどころかみんな僕の傍にいるからスペースは余裕でした。

そんなみんなの位置はというと

敷き布団役のノエルさんのおっぱい枕は絶品

掛け布団役のすずかとアリサの小さな胸が体に押し付けられ呼吸で上下するのにはドキドキした

右腕はなのはに抱えられて手のひらはなのはのパジャマのズボンの中に i n

左腕はなのはと同じようにファリンさんに抱えられながら手をファリンさんのパジャマのズボンの中に i n

猫型リニスは僕の股間に身を寄せて丸くなる。変態従者だね

もう女の子達の感触に包まれた僕は完徹覚悟で感触を味わい続けた。
幸せ過ぎて怖いWWW

次の日、自棄酒をして二日酔いになっている忍さんがいた。あれ、
忍さんって未成年じゃ……。まあ、いいや。全ては恭也さんに任せよう！

第10話 濡れるッ！（後書き）

この作品はきつと17禁くらい、きつと何の問題もないです。

次回はフェイトが登場するので作者がやりすぎることが予想されます。みなさん気をつけてくださいww

初のバトルもある予定。次回で作者の書きたいことは大体一区切りなのでそこまで頑張る。サイト様から警告来たら他の作品を書こうと思うww

最後に次回予告的な何か

『ジュエルシードを求めて一人の男の子に近づく魔法少女。その男の子が自分の大事なもの（後ろの穴）を狙っているとも知らずに・・・、そして戦いが始まる！』

予定ではこんな感じ、では次回をお楽しみに

第11話 ホントの自分を始めるために、今までの自分を、終わらせよう。

(前)

今回の話ですが、フェイトファンが読んだら憤死するレベルです。
みなさん耐えてください、きっと耐えた先に新しい世界が広がって
います W W W

では第11話をお楽しみください。

※公式にはないと思われるこの作品の独自設定

非殺傷設定の魔法では相手を肉体的に傷つけることはできません。
つまり、どんなに乱暴なカンチョウをしたとしても非殺傷設定の魔法をまもっていれば相手の肛門には傷一つつかないです。そのかわり、快感はとんでもなく強烈。

第11話 ホントの自分を始めるために、今までの自分を、終わらせよう。

side フェイト

ここに母さんの求めるジュエルシードがある。

私は使い魔のアルフと一緒にここ数日寝る間も惜しんで探索を続けたが成果はゼロ、これでは母さんに失望されてしまう。

今は効率をあげるために別々に探索しているがやはり結果は芳しくない。挫けそうになる自分を奮い立たせて私は顔を上げて周りを見渡す。

彼を見つけたのはそんな時だった。一瞬なにかの見間違いかと思った。何故ならその見つけた男の子の首に3つの青い宝石がぶら下がっていたのだ。

あれは間違いなくジュエルシード、しかも3つも!? 未だに一つも見つけられていない私にとってそれは喉から手がでるほど欲しいものだった。

私は彼に駆け寄り、話しかけようとする。でも、何と話しかければよいのかしり込みしているうちにその男の子はコンビニに入っているってしまった。私もそのあとを追う

男の子は雑誌を手にとり立ち読みを始めたのでチャンスと思い話しかける。

「あ、あの・・・」

声が小さかったのか、黙々と雑誌を読み続けている。なので、もう一度話しかけようとする。

「あっ」

その時、ただ立っているだけの私が邪魔だったのかサラリーマン風の男の人に背中を押されて目の前の男の子に体がぶつかってしまう

「す、すいません」

「いや、怪我がなくてよかったよ。今度は気をつけてね」

そう言って私の頭を撫でてから、その男の子は読んでいた雑誌を持ってレジに向かってしまった

悪い子じゃないみたいだ。それに優しい笑顔だったな・・・、まるで昔の母さんみたいだった。いや、私はその笑顔を取り戻す為にも彼にジュエルシードを譲ってもらわないと。そう決意をする

コンビニから出て行く男の子の後について行く。

追っていくと男の子は駅の改札を通って中に入って行ってしまった。何とか自分で切符を買って追いかける。

「よかった、まだ電車は来てないみたいだ」

さっきの雑誌を読みながら男の子はホームに並んでいた。私はその後ろに並んでから彼の肩を軽く叩いてみたが無反応

もう一度、今度は声をかけようとする。と電車が来て声をかき消されてしまった。自分のタイミングの悪さを恨みながらも彼から離れないように一緒に電車に乗り込む

電車内は混み合っていた。幸か不幸か男の子と向き合う形で落ち着く、身長が同じ位なので目の前に顔が来る。少し恥ずかしいがこれで話しかければ流石に気づいてもらえるはずだ

「あの、すみません」

「・・・？」

男の子は顔をあげた後に首を傾ける。可愛らしい動作に少し胸が高鳴る

「話をきいてっひゃ!？」

変な声が出そうになるのを自分の手で押さえる。

突然の感覚にびっくりしてしまつて変な声がでるところだった。その感覚の元を辿ると私の股間に目の前の男の子の手の甲が当たっていた。それが電車の揺れで擦れた感覚だったようだ

男の子の手はわざとかはわからないけれど、スカートの中に入ってしまったって下着の上から触れてしまう形になっている

男の子の顔を見ると、『どうしたの?』といった表情でこちらを見返していた。その純粹な顔からわざとではないことを確信する。

私は顔を赤く染めながら体を少し離れさせようとする。しかし、後ろにいた人が揺れで体勢を崩したことで背中を押され、より男の子と密着することになってしまった

顔に男の子の吐息を感じる。唇を少し突き出すだけで触れてしまうような距離で向き合うことになり一層鼓動が速くなる

電車の揺れが彼の手を伝ってダイレクトで私の大事な所に伝わる。自然と息は荒くなってしまい顔を逸らそうとするけど、どこまでも透き通ったその目から目が離せない

「大丈夫？」

「う……ん、大丈夫。ごめんね電車がこん……んっ……混んで……はあはあ」

「いや、辛いようならこっちに体重預けてもいいよ。こう見えてもちからはある方だからね」

「そうだね……、じゃあ少しだけ」

体重を少し男の子の方に預ける不思議な安心感に包まれた。誰かに頼るってこんなに安心するものだったのかな・・・。

そんな心地よい感覚と同時に体を甘い刺激が襲う。股間に触れている手がモゾモゾと動き始めたのだ、男の子は優しい目で私を見ている。

私も見返す。

「あ・・・りがとう、楽になりました」

「よかった」

男の子の嬉しそうな顔をみて私の顔も綻ぶ。相変わらず手は動かされているけれど、男の子が電車を降りるまでは確かに幸せを感じていた

何駅か乗ったあとに私たちは一緒に降りる。改札を通る時、私だけ切符の料金が足りずに引っかけり恥ずかしかった

いつのまにか私たちは手を繋いで歩きまわっていた。彼に手を引かれながらお店を覗いたりしながら話す男の子は私からみても楽しそうで一緒にいる私も嬉しくなる

しばらく歩き回ったあと行き着いたのは一つの公園だった

私はそこでさっきから言いたかったことを言う

「私の名前は、フェイト。フェイト・テストロッサっています。名前ですんで下さい」

「わかったよフェイト。僕の名前は野原 楓、楓って呼んでくれ」

「わかった、カエデだね。ひとつお願いがあるんだ、その首にかかっている宝石を譲ってほしい」

「いいよ」

一つ返事で当然のように了承してくれたことに嬉しくなる

「ただ、僕のお願ひも聞いて欲しいんだけど？」

「うん、なんでも言ってカエデ」

こちらを見つめてくるカエデは少し間をおいた後

『僕と戦って欲しい』

カエデはそう言い放った

side 楓

宣戦布告させていただきました。

ジュエルシードを首から下げて、フェイトホイホイと化した僕。案の定フェイトから近づいてきたので楽しませてもらいました。痴漢行為美味しいです（＾ω＾）

そんな状態から一転しての発言にフェイトはポカーンとしている

「どういうこと？」

「大丈夫、別に勝ち負け関係無しにこの宝石は渡すよ。でもね、あの人との約束だから」

「約束？」

「・・・リニスとのね」

「リニスを知ってるの！」

「よく知ってるよ。彼女の頼みでね、私の代わりにフェイトの成長を確かめて欲しいって」

「リニスは・・・」

僕はその言葉に無言で首を横に振る。別にリニスは生きてるけども
wwww

「そっか・・・、わかった。戦おうカエデ！」

「ありがとう。行くよ」

手を右に振って公園を外と隔離する結界をはる

「『バルディッシュ』セットアップ！」

「『チルノ』セットアップ！」

フェイトは黒色のレオタードみたいなものにマントを羽織ったようなバリアジャケットに身を包む、エロいね

僕は白いYシャツに黒いスーツ。首には黒いネクタイを巻いて、手には白い手袋を纏う。

所謂、執事服である。桐乃との主従ごっこは鉄板だからね。僕が主人役の時のメイド服の桐乃はやばいのだ

「か、かっこいい。」

「ありがとう。そういうフェイトも素晴らしいチョイスだ、あとでローションプレイしようぜ」

お互い素直な感想を言い合いながら、フェイトは斧を僕は槍を構える。

「行くよ！カエデ」

「本気で来い。フェイト！」

「はああああ！」

「ほいっ」と

高速で近づき切りかかってきたフェイトの斧を槍で受け流しながら反撃する。

フェイトは飛び退くことでそれを避けて、複数の魔力弾を打ち込んでくる。それも、魔法を使うことなく身体能力だけで避けていく

「強い！」

「可愛いお尻！」

空中を飛び交いながら、お互いの力を確かめ合うように武器で打ち合い。魔法が飛んでくると避けるか槍で風払う。おふざけは無しだ

すまん、嘘ついた。少しだけフェイトのお尻を触ったりしたんだ、別にわざとじゃないのは間違いないよ

数分間そんなやりとりが続いた後にお互い距離をとる。

「はぁ、はぁ。どうかな、私はカエデから見て」

「強いよ、僕から見ても素晴らしいと思う。良く訓練したんだね、リニスがフェイトに期待していたのもわかる」

「よかった。次は私の最高の魔法を受けてみて！」

右腕を横に一振りする。すると、フェイトの足元に金色の魔法陣が現れ何十というスフィアが空中に出現していく

動こうとすると設置型のバインドで両腕を固定され身動きを封じられる

「フアランクス・・・、撃ち・・・碎けー!!」

沢山のスフィアからいくつもの砲撃が撃ち出され視界が金一色で埋め尽くされる。これは凄いな・・・、しかしそれだけでは飽きたらずフェイトの空に掲げた手のひらに一本の金色の槍を模したものが形成される

ツインテールにした髪を揺らしながら、真剣な顔をこちらに向け言い放った

「スパーク・・・」

そして彼女の手からそれは離れる

「エンド」

飛んできた必殺の一撃、僕はそれに撃ち抜かれた

強いなく、これは練習していたあれを出さざる負えない。

バレないようにフェイトの体に『旅の鏡』を繋げ。その後バインドで手足を固定して身動きできないようにする

準備を整ったのを確認してから、僕は久しぶりに自分の本気的一端を解き放った

「行けるよ、『チルノ』」

溢れ出す魔力は解放されたことに歓喜の声をあげながら本来の役割を思い出したかのように全身を駆け巡る。

体を包み込む圧倒的な全能感、何者にも屈さない絶対の力がそこに

顕現する。

魔力の多さに大気が震え、地面が軋み始める。

僕の足元から発生した魔法陣が1つ2つと増え、10、20ともつと増えていき一面が水色に染まっていく

直径一キロに達しようというところで拡大はやつと止まり完成する。まるで、周りが水色の海になってしまったかのように視界一杯を占める

あまりの大きさに公園に張っていた結界が壊れてしまったけどもWW

《海鳴一の技師と言われた『コピー魔導師カエデ』が使う唯一のオリジナル魔法。魔力の収束する様子が星が集まるようであったからということで付いた名前は『スターライトアヌスブレイカー』》

チルノのナイス解説に僕のボルテージはマックスだ

散りばめられた星の光を集めるように指先に魔力が収束していく。
フェイトが目の前にバリアを張るが無駄だ

魔力の収束が完成するのと同時に僕が手に身につけていた手袋が弾け飛ぶ。魔力に耐えきれずに弾け飛んだと見せかけてこういう仕様だったりする。やっぱり感触は生で味わうのが一番なんだよ

「これが僕の全力全開！スターライトアヌスブレイカーー！！！」

合わさった人差し指が目の前のゲートを通り、ズブズブと温かい肉壁を掻き分けていく

「あああああ！！！」

フェイトがエビぞりになりながら悲鳴を上げる。完璧に僕の指は深々とフェイトのお尻の穴に突き刺さっている。だが、まだまだ行くぜ

「くらえー！」

異物に反応して指をきつく締め付けるお尻の穴を気にせずに、回転を加えながら出し入れをする

「ああっ！？うっ！ひゃあああー！やめっああ！？」

フェイトは叫びながら身をよじり逃げようとするがバインドで固定され逃げる事ができない。

バインドがなくても逃げられない反則魔法だと思ったらフェイトはどんな顔をするだろうか。いつでも手を伸ばせばフェイトのお尻がある、こんなに嬉しいことはないww

「だめ？」

「変になっちゃうよ、んむっ！？んあゝふむうゝゝ」

フェイトにキスをして口を塞いでから指を動かしまくる。

数分後僕は満足して指を引き抜いたが目の前にはフェイトが唇の端から涎をたらし息を荒らげながら体をビクンビクンさせて気絶している姿があった

ちょっと初めて使った魔法だったんで手加減を間違えたかな。まあ、非殺傷設定だし大丈夫だろうwwww

「恥ずかしくてカエデの顔みれない・・・」

目を覚ましたフェイトは顔を真っ赤にして顔を押しさえる

「可愛かったよフェイト」

「ううー、キスも初めてだったし。あ、あんなところ触られちゃうなんて」

イヤンイヤンと顔を振る。可愛いなく、こんな娘の初めてを貰えるなんて光栄だ

「もちろん、責任はとるよ。フェイト結婚しよう!」

僕のこととは今日から『カエデ・T・ノハラ』と呼んでいただきたい
ww

もちろんTはテストロッサのTだ。日本人なのにミドルネームとかっこいいよね

「えええ〜！本気なの？」

「勿論だ！こんな可愛い娘と結婚できるなんて最高じゃないか」

「嬉しい！カエデ、んっ」

駆け寄ってきたフェイトが僕に抱きついてきて唇を合わせてくる。バリアジャケットの上からお尻の穴を撫でるとお返しとばかりに舌を絡めてきた

「フェイトはエッチだな〜」

「こんなふうにした責任はカエデがとってね」

逆に僕以外に責任はとらせん！

約束通り3つのジュエルシードを渡すとうとうとまた抱きついてきた。

「フェイト、今度母親に会うとき僕も連れて行ってくれないか」

「は、早くないかな。私はうれしいけど・・・」

「幸せになろうぜフェイト！」

「そうだね、カエデ！」

とりあえず挨拶してアルハザードにプレシア連れてって、アリシア生き返らせて、プレシアの病気を治して。やることはこんなもんかな

行動を思い浮かべてから僕は思った。余裕スグル
WWW

第11話 ホントの自分を始めるために、今までの自分を、終わらせよう。(後

楓のオリジナル魔法の名前がどこかで見たことがある件について W
W

この世界では、なのはがスターライトブレイカーを作る前にこの魔法を使用しています。なので理不尽にも楓の魔法を参考にしてスターライトブレイカーが生まれたといった感じになります W W

今回はとうとうフェイトのお尻を手中におさめましたね。これからどうなるか楽しみにしてみてください。

次回ははやてを登場させようと思います。

／、
／ r || ||、ノ
— ” i ノハ从X)
ミ、i リ。ノリ／ミ
へと「ヌ」承「つへ
、
「ミ」へ／ヲ「式」へミ
「ミ」>／(ノJ<ミ

— || || —

最後に次回予告的ななにか

『目の前には『八神』の表札、ここが噂の関西弁美少女のいる家か・

・・ゴクリ。ベテランホームヘルパー楓が行く。添い寝もお風呂もお任せください。介護とは心なのです!』

予定ではこんな感じ、では次回をお楽しみに。

第12話 世界のエロは今この僕に集まっている。それが・・・エロレクイエム

風邪引きました・・・

軽い風邪だと思って放置していたら悪化してしまい熱を計ったら38度9分でした。もう39度でいいだろwwっていう

間違いなく成人式の後にあった同窓会ではしゃぎ過ぎたせいだと思われる。みんな美人になってましたね。劣化してる人もいましたがww

まあ、そんな状態で書いたのでまともな内容かわかりませんが第12話をお楽しみください。短いですけどね

※宣伝的ななにか

余談ですが風邪の変なテンションでネギま！の新作を書いてアップしてしまいました。興味のある方はそちらもよろしく。

第12話 世界のエロは今この僕に集まっている。それが・・・エロレクイエム

side 楓

フェイトとの死闘（笑）を終えた次の日。

リニスいわくあの戦いで使った『スターライトアヌスブレイカー』
によって軽い次元震が起きたらしいです。

なんてこったい／（＾Ｏ＾）＼

まさかのアースラフラグがこんなところでたつとはな・・・こんな事態になるなんて、たとえ神でも予想できなかったに違いない。全くもって仕方がないね、これは誰のせいでもないのは間違いないだろう。なので流れにまかせることにした、僕にはラッキーがついてる！

まあ、そんなどうでもいいことは横に置いてくとして。僕は目覚めと同時に自分の左手の人差し指のある場所を眺める。

そこには旅の鏡によってどこかに繋がって指先が無いのが確認できた。消失した人差し指から適度な締め付けと温もりが伝わってくる。指先を少し動かしてみるとキューっと締め付けが強くなる

《カエデ起きたの？》

《うん、おはようフェイト。》

拠点のマンションにいたと思われるフェイトが念話で話しかけてきた。そう、僕の指先はフェイトのお尻の穴に繋がっているのだ。しかも一晩中っていうww

いつでも繋がっていたという僕の無垢な要望がフェイトに聞き入れられた結果だ。朝なのでフェイトにも色々あるだろうということ
で指を抜く

《あっ・・・抜いちゃうの？》

《うん、またお願いすると思うけどいいかな?》

名残惜しそうな声をあげたフェイトにもう一度お願いする

《カエデならいつでもいいよ》

《ありがとう、フェイトって可愛いだけじゃなくて優しいんだね》

《そ、そんなことないよ。カエデの方がカッコよくて優しいよ》

《ふうん、つまりはお似合いの2人ってことだね》

《うん! カエデが好きでいてくれることが何より嬉しいんだ》

《そっか、フェイト大好きだ》

《私も好きだよ・・・カエデ》

その後も他愛もない会話をする。結構な時間会話していたので『またね』と言って念話を切ろうとするとフェイトが『もうちょっとお願い・・・』と引き止めてきた。本当に可愛いなフェイトは

さて、今日は休日で学校ないけどどうするかね。フェイトの母親に会って無印終わらせるのもいいけど、ぶっちゃけそれはいつでもできる。

そうなると不確定要素が多い『闇の書』の方を先に片付けてしまうのが利口なやり方というやつだろう。

なにかの間違いで桐乃に被害が及んだ場合、地球が無事でいられるかは保証しかねるからな。シスコンなめんな

それに最近関西弁成分が足りないと思っていたところだ。ちょうどいいし『八神 はやて』に会いにいてみよう

『ひらがなではやて、変な名前やろ』のあの娘だ。彼女は足が不自由だったはずだ、ここはベテランホームヘルパー楓の出番で間違いないだろう

待ってろよはやて、僕が食事のお世話から下のお世話まで面倒みてやるからな！

side はやて

なんやろ、変なフラグがたったような気がするんは気のせいやろか？

まあ、ろくに友達の一人もおらへん私に何かがあるとは思えんけど・・・。そんなネガティブなかんがえを振り払って朝ご飯を作る作業に戻る

また、今日もいつもと同じように一人分の朝ご飯を作って、図書館から借りてきた本を読んで、昼ご飯を作って。食べて。図書館に出かけて……。そんな繰り返しが始まるんやと思ってた。

ピンポーン

このインターホンの音が、私の生活をそして心を大きく変える始まりの音だとは思ひもなかったんや

第12話 世界のエロは今この僕に集まっている。それが・・・エロレクイエム

続きが読みたくなる終わりがたを模索してみた。

ただ中途半端なところで切っただけのような気がするが気にしない
ww

次回はきちんとはやてと出会います。今回はおまけ的な更新なので
きちんと予定通りの日にも更新するので心配しないでください。ま
だ一文字も書いてませんがww

では次回をお楽しみに。

第13話 やあ、僕は野原、フリーのホームヘルパーさ! (前書き)

富竹フラッシュ W W

お話は八神家訪問から始まります。では、第13話をお楽しみください。

第13話 やあ、僕は野原、フリーのホームヘルパーさ！

side 楓

なかなか大きなお宅だな。これは掃除のやりがいがありそうだ。

八神の表札の付いた家を見上げながら僕はそんなことを思っていた。
ホームヘルパーの血が騒ぐぜ。エッチな本の隠し場所も見つけちゃうぞww

では、ポチッとな

ピンポーン

インターホンを押してから少し待つと中から応答が返ってきた

「はい、どちら様でしょうか？」

「フリーでホームヘルパーやってる野原ですけど」

「えっと、子供に見えるんやけど・・・」

インターホンのあるところを見ると小型カメラが付属している。くっぬかったわ

「子供・・・そういう人もいるかもしれません」

「はぁ・・・」

「でも介護にかける心はプロにも負けない自信があります」

「すごいんやね」

「美少女とお風呂に入りに来ました!」

家の中からドンガラガッシャーンとコントのような見事なずっこけ音が響いてきた。大丈夫かはやて、関西人としては正解だが車椅子でずっこけちゃだめだろ

「・・・いたた、びっくりしたわ!」

「僕の方もびっくりしたんだけど、まさに今ホームヘルパーの助けが必要なんじゃない?」

「そうかもしれへんけど、玄関には鍵かかったるし」

それなら問題ないな、魔法を使えばいいのだから。僕以外がこの家
に出入りも干渉も出来ないように常識を操ってから転移する。視界
が一瞬で切り替わり目の前には倒れた車椅子と目を丸くして床に座
り込んでこちらをみている茶髪の女の子がいる。そして空中に魔力
光を残しながら僕はフワッと床に足をおろす

「・・・なんやのそれ？」

「僕は野原 楓。ホームヘルパーはたまにしかやってないんだ。い
つもは小学校に通って孤高の美少年とか目指してる普通の男の子。」

そういつて倒れている車椅子を起こしてから床に座り込む女の子に
手を差し出しながら笑いかける

「君の疑問に答えるなら僕には魔法使いという一面もある、そんな
ところかな」

「魔法・・・使い？」

そして魔法使いと夜天の書の主は出会ったのだった。

まずは、お部屋のお掃除からいってみようかな。はやての部屋はどこかいなく

「ちょ、ちょっと待ってーな。今驚愕の事実が明らかになったところ。なんで何事もなかったかのようにどこかにいこうとしとんをや！」

「いや、だって魔法使いなんて探せばいくらでもいるしそんな驚くようなことでもないでしょ」

「いつのまに日本はそんな人外魔境みたいになったんや。普通いないやろ魔法使いなんか、ファンタジーやろ絵本の世界やろ」

「落ち着け、とりあえずこっちは名乗ったんだしそっちの名前は？」

「あつ、そやったびっくりし過ぎて忘れとったわ。私の名前は『八神 はやて』 ひらがな三文字ではやていいいます」

「ひらがなではやてか変な名前だな」

「失礼やでかえで君！自分で言ったことはあるけど他の人に言われたんは初めてや。かえで君かて平仮名三文字やん」

「いや、僕には楓という漢字があってだな・・・」

「よろしくや、かえで君」

「・・・」

「平仮名三文字でお揃いやね」

「まあ、いいか。よろしく、ひらがな三文字のはやて」

なんか嬉しそうなんで訂正するのをあきらめました。なのは的には名前で呼び合ったら友達らしいので僕とはやても友達ということでもいいのかな。まだあつて五分も経ってないけど

わざわざ僕とお揃いにしなくてもなのはとかすずかとかいるのに。
親もちゃんと漢字でつけてやればいいのにな有佐ありさとか亞李茶ありさとか蟻あ
砂りさとかあるだろうに、僕は勘弁願いたい

「まずはお風呂のお湯張りかな」

「人ん家でお風呂入るん？」

「はやてと一緒にな」

「さっきの本気やったんかい！」

「え、なにそれ？自分が美少女ってこと、自画自賛ですか」

「なんで私がスベったみたいになっとなるんや。理不尽や・・・」

「ははっ、どうだはやて。ちょっとは気分が明るくなったか」

「へ？」

「暗い顔してたぞ。私は世界一不幸な美少女やゝって感じ」

「そんな顔しとったかな」

はやては自分の顔を両手で挟んで確かめるような動作をする

「まあ、美少女のところは僕もそう思うけどね。不幸な美少女を救ってフラグをたてるのが僕の魔法使いとしての使命だと思ってる」

「なんかかえで君って変わり者やね」

「失敬な、最近をよく委員長に『ハレンチな！』っていわれるくらいだ」

うちのクラス委員長『古手川 唯』によく言われるのだ。

「その割によく僕のセクハラに巻き込まれるラッキーガールだけだね」

「変わり者というより変態さんやろ、かえで君って」

「いやいや、確かに周りの人は僕をそう呼ぶことが多々ある」

「あるんやね」

「だが、僕ほど美少女に優しい男はいないと自負しているよ。委員長だって『ハレンチな！』っていつてるけど実は『ハレンチ行為ナイス！』の略だと思うんだ」

「それはきつと勘違いや、その委員長さんがどんな人か知らんけどそれくらい会ったことない私でもわかるで」

「そうかな。はやてもうちの学校に来ればわかるよ」

「ありがとな、かえで君。でも、見ての通り私の足が治ってからやね。」

「治しちゃえばいいじゃん」

「そうなんやけどね。会ったばかりのかえで君に言うことやないけどずっと原因もわからへんのや」

「ふくん、原因は『闇の書』かな？」

「はい？」

「この世界の医者にはわからないかも知れないけど魔法使いの僕には結構簡単にわかるよ。その足の麻痺の原因は闇の書……。はやて、鎖の付いた分厚い本とか見覚えは？」

「たしかに、物心ついた頃からそんな本がずっと私の部屋にあるけど」

「それだね。はやてと学校行きたいし僕がさっさと原因の本を治して、その後足も治しちゃうよ」

「本当に、この足治せるんか？私が学校に行けて。かえで君とか友達たくさんつくって。もう……。寂しい思いしないでええの？一人で寂しい思いしないでええの？」

車椅子に座ったはやてが僕を涙目で見上げて僕の服を掴んでくる。僕が肯定の意味をこめて頷くと顔を僕のお腹に押し付けながら泣き出した。我慢の限界だったのだろう

「治った後はやてといっしょにお風呂入れるなら。約束するよ……」

「うう・・・泣いてる女の子になんて条件だしとんねん。でも、ええよ。かえで君なら」

「ついでに手作りのご飯も頼む」

「ついでとは失礼やな、料理だけは自信あるんや。びつくりすると思うよ」

「それで、お風呂、ご飯と来たらさ。あと何が欲しいかわかるかな？」

帰ってきた旦那さんを迎えるときの言葉といえよ。お決まりだろう、お風呂にするご飯にする。それとも・・・

「・・・私」

「うん、はやても欲しいな僕は」

しゃがんではやての両手に僕の手をのせてから、笑顔ではやての顔を見上げる

「欲張りさんやねかえで君」

「そんな僕は嫌いかな？」

「ええと思うよ。ちょうど私もかえで君が欲しい思ってたところや・・・」

そういうながらはやては車椅子の上で前屈みになり僕の首に腕をまわして全体重をこちらに預けてきた。まるで私をあげるといつてるかのように。そのままはやてに後ろに押し倒される

「好きや・・・かえで君。ちゅーしよ？」

「僕も好きだよ。はやて・・・」

顔を赤くしてこちらに全体重を預けているはやて。お腹も胸も足も全てが密着しあっている、あと今近づいきっている唇が重なれば全身ではやてを感じることになる。顔が徐々に近づくにつれはやての胸の鼓動が激しくなっていく。そして、はやてが目をつぶった

「ん、ちゅっ」

「ん」

柔らかい感触が唇に触れてから数秒してはなれ顔の位置をずらし重なりあったままお互い頬をくっつけて落ち着く

「キスって・・・こんなにええもんやったんや」

耳元でそうつぶやくはやて。耳がくすぐったい

「はやての足を治したらまたキスしたいな」

「お祝いのキスやね」

バリアフリーが完備されていたのではやての部屋には難なく着けた。

「これや」

差し出されたのは黄金に輝く十字架が表紙にあしらわれている一冊の分厚い本。まだ起動前なので鎖で本が開かないようになっている

「間違いない。夜天から闇への改悪ね、何を考えてるんだか」

「なんとかなるんか？」

「まあね。実にあっけなく終わると思うよ」

僕の常識を操る力があればなんなく治せるものだ。この力はただ人の認識を操るだけの代物ではない。世界の法則をも操り死者の蘇生さえ可能にする絶対の力。僕がやろうと思えば不可能などない

渡された闇の書を目の前に置き僕は操る、常識をひいては世界自体を

「僕が右手で触れたものは僕の思い通りに書き換わる。それが常識でありこの世界のルールだ。僕の許可なしに今後書き換えられることを許さない」

宣言して僕は闇の書に触れる。書き換えるにあたってデータが僕の頭に流れこんでくる。まずは厄介な転生機能を取り除く、主ははやだけで十分だ。そして問題の闇の部分をあつさりと容赦なく除去する。アルハザードの知識と照らし合わせてよくできる部分を書き換えては、ちよつと考えてまた書き換える

治ったのを確認して右手を闇の書だったものから離す。書き換えは五分もかからずに余裕でした。チートって怖いねww

「治ったんか？」

「うん、治ったよ。はやての足が麻痺してる原因を治したからもう足の方も治せるよ」

「ほんとに！かえで君おねがいや」

「了解。ほら、足を触れば感覚がわかるでしょ」

「ほんとや・・・今までいくら触っても全く何も感じなかったのに。かえで君がいやらしく足を撫でてるのがわかる！」

「いやらしくって……。まあ、いいか。とにかくはやてお風呂いこうぜ、そこで治療するから」

「え、ここで治すんやないの？」

「僕のモチベーション的にお風呂でやりたいなと」

「じゃあないなく、惚れた弱みや連れてってや」

足が治る兆しが見えたのが嬉しいのかお姫様抱っこで連れて行くようお願いされました。いいよ、お嬢さん。お姫様抱っこは得意技だ。

お風呂がきちん沸いているのを確認してから僕は脱衣場でさっさと服を脱ぐ。はやては床に座りながらこっちをジッと眺めていた。

「着替え眺めて楽しいか」

「私には見る権利があるんや」

意味わからんww

だが僕にだってみる権利があることを忘れないで頂きたい

はやてに近づき服に手をかける。まずは半袖の白いパーカーを脱がす。下には白いスポーツブラが現れた。恥ずかしがるはやてを笑顔で眺める全裸の僕。変態だな……。だからどうしたww

とりあえず優しくゆっくりとスポーツブラを脱がしていくというか下をずらしていく。乳首が見えそうなところで少しストップ。ふんふんと眺める

「なにしてるんや！」

「ああ、もう少し」

男らしいというかなんというか、はやてはスポーツブラをスポーンと取り去ってしまった……。見えそうで見えないのをもう少し楽しみたかったのにモロ出しにしちゃうなんて……。問題ないじゃん

ようやく気づいた僕は赤いスカートを脱がしにかかる。足はまだ麻痺しているので動かすことが出来ないから僕の活躍の場が増えることだろう。とりあえずスカートの中に頭を突っ込んでと

「はい、間違いや！」

頭をはたかれて追い出される。はやては自分で横にある留め具を外して脱いってしまった。だがその間に靴下は脱がさせてもらったぞ。すると、はやては最後の一枚に手を伸ばす。くそっ、最後の一枚は僕にやらせてくれ！

残った真っ白な木綿のパンツに僕も手を伸ばす。

「はやて、これを脱がすのは僕にやらせてくれ。足を治すのに必要な気がするんだ、心構え的な意味で」

とりあえずはやてが自分で脱がないようにパンツを上につ張り股間に食い込ませる。エロいにも程がある

「ちよっ！なにすんねん。食い込んどるってすごいことになったから手を離して」

「離したら脱ぐでしょ脱いじゃうでしょ？」

「脱がないから、とにかくかえで君に脱がせてもらおうからもう食い込ませんといて」

ふう、なんとかなったな。とりあえず僕が手を離すとはやては急いで食い込みを直した。・・・じくとその様子を眺める。

お互い落ち着いたところで脱がしタイム再開。はやてをみてから了解をとる。パンツに手をかけてスルスルとゆっくり脱がしていく。そろりそろりと脱がしていき割れ目の始まりにさしかかる。後ろはお尻が半分以上露出してしまっているはずだ。もはや一ミリ単位で動かしているといってもいいようなじっくりっぷり。そしてあらわになった全貌！これは凄いぞ。写真にとって部屋に飾りたい位だ。見事なお割れ目様であるありがたやありがたや。思わず目の前のそれを舌で舐めてしまったのは仕方のなかったことなんだ。本能が押さえられなかった感じである。やっぱり今回もダメだったよあいつ（本能）は人の話を聞かないからな

「責任とってや。絶対」

「もちろんだ、はやて」

裸で顔を真っ赤にしてお願いされたらお願いされるしかないでしようよ。

裸のはやてを抱えてお風呂場に入る。とりあえず足を治す為にお風呂の縁に腰掛けさせて僕は準備をする

僕はその目の前に座り集中する。足の間からチラチラと覗くものや胸の先が気になるがそれはやる気に直結する。僕は常識を書き換える

「僕の両手は全治を司る手。この手で触ればあらゆる病、痛み、怪我は完治する。例外はない。」

僕の手に確かな力が宿る。はやての両足に片方ずつ添えて触れる。僕の手に確かに活力を取り戻した感覚が伝わってくる。

「はやて、足を動かしてみてくれ」

僕をじっと眺めていたはやては恐る恐るといった感じに足を動かす。足が持ち上がったかと思うと足の指も動かす。完全に治ったようだ

「・・・かえで君。私もしかしたら諦めてたのかもしれない。いつか、いつかと思いつながら。もう一生このままなんやと思っとった」

伏せていた顔をあげるとそこには確かに満面の笑顔があった。顔は涙でぐちゃぐちゃだけど間違いない心からの笑顔が

「寂しくてでもなにもできなくて。毎日が孤独で押しつぶされそう

やった。辛かったんよ本当に料理だって誰かに食べて欲しかった。寝るときは誰かにお休みって。起きたらおはようって。いってほしかった。もうひとり嫌や！」

自分の足で立ち上がるはやて。それは今までの自分への決別なのか

「学校にだって行くんや！たくさん友達つくってみせる！未来の旦那さんだって出来たんや他が出来ない道理なんてないはずや！」

強く、強く、僕を抱きしめるはやて。こんな時に股間と股間が触れ合うのが気になってしまうのは僕が坊やだからだろうか

「絶対にはなさへんからな。かえで君」

「心配しなくても僕が離さないよ。はやて」

いつの時代も限界はここまでだと。自分はここまでだと決めつけたらその人に今以上の幸せはこないのかもしれない。求める数に限りがあるなんて誰が決めたのか。僕はいつまでも貪欲でありたい、誰のためでもない自分の幸せのために・・・

とりあえずそんな感じではやてにもハーレムを認めてもらいたいな
と僕は思った。

第13話 やあ、僕は野原、フリーのホームヘルパーさ！（後書き）

次回でA・S終了予定。無印はどうしたww

そして作者は思いました。攻略したい女の子がいるなら連れてきちゃえばいいのだと。T O L O V Eるの古手川 唯をちよろっと出しちゃいました。学校のお話で少し出せれば作者は満足です。これはそのための布石ww

次回更新は遅くなるかもしれませんがお許しください。pixivにあるような美少女の絵を描けるように練習してきます。それが終わればまたこの作品の更新をするので。

お金は無駄にあるので、まずはペンタブを買いに行こうかなww

では、最後に次回予告的ななか

『はやての誕生日を待たずして起動した夜天の書。現れたヴォルケンリッター達、しかし何かがおかしい……。なんと治療と同時に主人公が自分好みに夜天の書を改造してしまったのだ！これはエロの予感がするぜww』

予定ではこんな感じ。では次回をお楽しみに

第14話 変態め・・・！（前書き）

先週の週間ユニークアクセスが10000を超えたww

これはヤバイwwまあ、来週になればいつも通りに戻ります
が。

これからも皆さんにはコソッとお気に入り登録。コソコソ感想を書
いてもらえると嬉しいです。あんまり多くの人に読まれると批判と
か怖いww

批判が怖くてこんな内容の話書けねーよって感じですがww

では、第14話をお楽しみください。

第14話 変態め・・・！

side はやて

突然現れたときは驚いたけど、今は驚く程自分の心の大部分をしめている私と同じ年の男の子。

同じことを繰り返すだけの灰色の毎日に鮮やかで暖かい確かな色を与えてくれた明るい男の子。

誰にも治すことの出来なかった私の足をあっさりと治してしまった魔法使いの男の子

『誰もが無理だと諦めたことを為す力が魔法なんだ。だから僕こそ魔法使いだ』誇らしげに胸を張って男の子はそう言った。

私は思った。確かにあなたは魔法使いだと。魔法使いであり、私にとっての王子様。

シンデレラは12時の鐘で魔法がとけてしまった。じゃあ、もし魔法使いが王子様だったらどうなっただろうか。それは誰にもわからない……。でも、もしなんて仮定の言葉はいらない。確かに私は魔法にかけられてあなたを愛しているのだから。

題名『はやての日記』

著者 かえで

・・・私はとてつもなく恥ずかしい文章を読まされた。なんやこれ？

二人分の昼ご飯を作って自分の部屋に居るかえで君を呼びに来たら、机の上で腕をまくらにして寝息をたてておった。そしてかえで君の手元にある一枚のルーズリーフを見ると何故か『はやての日記』という題名がつけられた不思議な文章が綴られていたんや。

「なに書いとんねん」

ペシッとかえで君の頭をはたいて起こす。なんて恥ずかしいことを書いてるんや。読んでるこっちが赤面してもうたわ

「ん、いい匂い。ご飯出来たの？」

そういつてムクリと顔を起こして眠そうに目を擦りながらこちらを見るかえで君。そんな可愛らしい無防備なところを見せられたら文句をいう気もなくなってもうた。本当に卑怯や、とりあえずこの恥ずかしい文章は預かつとくことにするわ

「そうや。未来の嫁さんが昼ご飯作ったんよ。はよ行くで」

「・・・うん。わかったよはやて」

そういつて私の後ろに素直について来た。今日の昼ご飯は私のオリジナルカレーやからな。どんな反応するんか楽しみや

「カレーじゃねえか。しかもルーから自作だと・・・嘘だっ!!」

なんかかえで君が変な言動をし始めたけどもうなれたもんや。

「じゃあ、両手をあわせて」

「いただきます」

誰かと一緒にいただきますを言ったのなんて久しぶりや。いつからかいただきますさえ言わなくなっ。ささいなことかもしれないけどそんなことで涙が出そうな程嬉しくなってしまう。もう私は一人やないんやな

「うめゝ、ヤバっはやての味がするぜ。隠し味に珍味はやて汁を入れたな料理長。わかってやがる」

「誰が珍味や！」

まったく。でも、本当にこんなに楽しい食事は初めてや。楽しい会話が何より笑顔があった。美味しいという言葉に過剰に反応してしまい自分の頬が緩むのがわかる

「もぐもぐ……。そういえば守護騎士達はどうする？」

突然かえで君が言った。守護騎士、なんやそれ？

「守護騎士ってなに？」

「ああ、言って無かったっけ。今はやては夜天の書の主という立場なんだ。そしてその夜天の書にはその主を守るための4人の守護騎士がプログラムされてる。そうだね、今のはやてには二つ選択肢があるかな」

「ふたつにひとつやな」

「一つ目は夜天の書を起動せずに放置。これは守護騎士を出さないことになるね。で、二つ目は夜天の書を起動して主として守護騎士を従える。扱いは従者としてでもいいし家族として扱っても構わない。」

「家族・・・」

「ついでにふたつめを選ぶとおまけで魔法が使えるようになります。」

「ずいぶん簡単に魔法は使えるんやな」

「まあ、僕ほど万能な魔法は使えないだろうけど空飛んだりビーム撃つくらいならできるよ」

「十分すごいんやけど。それより守護騎士やったね。ずっと本の中にいるなんて可哀想やから出してあげて欲しいんよ」

「わかった。はやてならそっちを選ぶと思ってたよ。守護騎士達は今まで余りいい扱いを受けてきてないんだ。どんな酷いことを命令されてもひたすら主の為にね。だから、はやては家族として接してあげれば最初は戸惑うかもしれないけどいい関係が築けると思うんだ」

「最初からそのつもりや。この家は一人で暮らすには大きすぎやし、かえで君のことを信じとる。きっと悪いこ達やないはずや」

「うん、いずれ僕もその家族の輪にいれてくれよな。はやて」

・・・さらっと笑顔でなんてこと言うんや。それってようはプロポーズってやつやろ。アカン、心臓がバクバクいっとる。

「え、ええよ。他の家族に認められたらやけどな」

そんな自分らしくない照れ隠しまで。本当に恥ずかしいわ

「任せろ。僕らしいやり方でお話するからな。シグナムのおっぱいは丹念に説得する必要があるそうだ」

「シグナム？」

「おっと失敬。それは会ってからの楽しみということ。すぐにも会わせてあげられるけど、どうせならご馳走作って出迎えないか。そっちの方が楽しそうだろ」

「うん、賛成。ちょうど治った足で外を歩き回りたいと思ってたんだよ。ご馳走の買物が出てらにデートいかへん？」

「なん・・・だと。美少女からのデートのお誘い！イヤエーイー！これでリア充の仲間入りいー！キター（・∀・）いー！うおっ！？はやて、なにしやがる、んっ。むう」

余りにうるさいから押さえつけてキスで口をふさいでやったわ。私のサードキスの味はカレー味やった。セカンドキスはお風呂でお互い裸で抱きしめあってたときやったな。あの時のことは今思い出しでも赤面ものや

「リアルはやて汁頂きました！」

「うっさい。はよ食べて出かけるで」

「カレーうめ〜」

・・・聞いとらんし。ホントどうしようもない男の子に惚れてしまったもんや。うまいうまい言って私の料理を食べてくれるのを見るとこんな人と一緒に将来なら幸せになれそうやな。なんて考えてまうんやからなく。知れば知る程好きになっていく。他の人から見たら欠点に見えるようなところも愛おしく思えてしまう。恋は病とはよく言ったものや。

「好きやで、かえで君・・・」

思わず呟いてしまった。その言葉にかえで君は食べる動作を止めてこちらを見てくる。聞こえたのかな？

「もう一人のおっばいを忘れてた」

ん？聞き間違いかな

「夜天の書には管制人格があつて。それがおっばいの大きな美女なんだ」

「おっばい？」

「今まで闇の書の管制人格として闇の書なんて呼ばれてる美女なんだ。来い夜天の書」

そうかえで君が言うのと手元に夜天の書が現れた。それをさっき治し

た時と同じように手を触れさせる

「すまん、僕らしくない失態だ。管制人格よ。今から君に新たな名を送る。強く支える者、幸運の追い風。祝福のメール。『リインフォース』。もう闇の書なんて呼ばせない」

・・・よくわからへんけど出番をとられたような気がするんは気のせいやろか。いいシーンみたいやし口には出さへんけど。夜天の書もなんか嬉しそうに点滅しとるし。

「よし、はやての手料理も食べたし。夜天の書の準備も出来たし。デートに行こうかはやて」

そう言ってこっちに手を差し出すかえで君。私はその手をとって立ち上がった。今日は私の全快記念日で好きな男の子との初デート記念日で新しい家族ができる記念日になるんやな。

目まぐるしく変わる環境に夢なのではないかと小さな不安を覚える。でも、手を繋いだ先にいるかえで君を見るとこっちを見て優しく笑っていた。胸がドキッと跳ねた、その衝撃で小さな不安なんて吹っ

飛んでしまった。確かにここにいる、私はかえで君の手を強く握り直し笑い返す。

不安なんて馬鹿らしい。隣にかえで君がいて、こうして寄り添っていられるという幸せ。これが万が一夢だったとしても『誰もが無理だと諦めたことを為す力が魔法』なんやろ魔法使いさん。その時は夢の中からでも会いに来てもらうで私の愛する王子様

そして私は自分の足で歩き。かえで君の手を引いて玄関の扉を開ける

「「いってきます」」

空は今の私の心のように雲一つなく晴れ渡っていた。今日は絶好のデート日和や！

第14話 変態め・・・！（後書き）

あれ、ヴォルケンリッターは？俺のロヴィータがいらないんだけど？
という方。うん、今回の話では登場してないんだww

この作品ではあとがきの次回予告は余り信用しないほうがいいです。
一応先送りするだけなんですけどね。次回こそは登場させてみせる
ww

先日このままではいかんとA'sのアニメの9話から最終話まで見
ました。（1話から8話は見てない）いい話過ぎるでしょww

ヤバイよはやてマジ可愛くていい娘過ぎる。ロッセとアリアがマジ
無いわ。猫耳美女とか当然攻略でしょwwとか思ってたのに一気に
株が大暴落しました。作者的にはノー攻略の方向で

最近、サブタイトルとか考えるの楽しいです。今回はアニメのヴ
イータのセリフが元になってます。次回はなのはのセリフを元にし
て今回のサブタイトルと会話になるようにします。

アニメのそのシーンはこんな感じ

涙目ヴィータ「悪魔め・・・！」

炎をバックにしたなのは「悪魔で・・・いいよ。悪魔らしいやり方
で話を聞いてもらうから。」

この作品だと

涙目ヴィータ「変態め・・・！」↑14話のサブタイ

なのはの真似をする楓」↑15話のサブタイ

てな感じですかね

っーかあとがきなげえ
WW

そんなこんなで、みなさん次回をお楽しみに。

第15話 変態で・・・いいよ。変態らしいやり方で話を聞いてもらうから。

今回はやっとヴォルケンリッター達登場、今までで一番長いです。

では、第15話をお楽しみください。

※用語

『クイックアヌスブレイカー』とは『スターライトアヌスブレイカー』の簡易版。溜めが短いのが利点。

第15話 変態で・・・いいよ。変態らしいやり方で話を聞いてもらうから。

side 楓

いやー楽しいデートでしたな。今夜は大人数だから沢山材料を買い込んできたんだけど商店街の人達に足が治ったお祝いだと沢山おまけを貰えたんだよね。車椅子の少女は商店街の有名人だったんだ、商店街はいい人ばかりだった

ただ色々イベントもあったけどね。まずは、家を出てすぐに仮面を着けた二人組の男に襲われたのだ。

取りあえず適当に一年間は決して覚めることのない眠りにつかせてから背中に『闇の書は治療しといたんで引退する前に他のめんどくさい手回しはよろしく♪』という張り紙を貼ってグレアムのおっさんのところに送った。猫耳美女の姿で来たら多少は手加減したのに。アホな猫達だ

その後ははやてと手を繋いで買い物を楽しんだ。それが終わり家に帰ろうとしたら、買い物中のノエルさんに会った。相変わらずメイド姿がよく似合う。

『そちらの方はどちら様でしょう。私は存じておりませんが』

と言って問い詰めてきたので、取りあえずおっぱい揉んで驚かせた後に走って逃げたんだ。

すると何故かメガネをかけた小学生に追いかけることになった。『セクハラだ、バーローww』とかいいながらスケボーに乗って追いかけてきたかと思ったら突然お腹からサッカーボールを出してこっちに蹴ってきた。僕としても商店街のと真ん中でサッカーを始めるという危険行為を許せないなので、その悪ガキに魔法で天誅を下してやった。なんかむっちゃ吹っ飛んでたけど非殺傷設定だ問題ない。吹っ飛ぶ時の叫び声が『らーーん』だったのが意味不明だったな。蘭ってだれよww

『街中でサッカーはいけないぜ坊主』

そうカッコつけたら。近くに居た女子高生が空手で襲いかかってきたので『クイックアヌブレイカー』で黙らせた。僕としてはなかなかの美人なお姉さんだったのでデバイスにお尻の座標を登録していた。これでこの空手女子高生のお尻を何時でもいじれるぜww

とりあえずその女子高生は路地裏に連れてって暴力はいけないうと
言い聞かせながら、四つん這いにさせた後にパンツを下ろしてお尻
ペンペンしたりお尻の穴を指でズボズボして説教しといた。

『相手が僕みたいな紳士だったからよかったものの、世の中には変
態な奴も沢山いるからな。これからは自分の体を大事にしろよ』と
言ってその場を去ろうとしたら。後ろからご主人様待ってとか、も
っと私のお尻をイジメて下さいとか言ってたけど知らん。

もう登場する予定もないんだ一人で慰めてなさい

そんなこんなで中々波乱万丈なデートだったが楽しかった。

はやては小学生にスケボーで追いかけてる時に目を回して気絶
してしまったので。暇つぶしにらしくなく女子高生に説教とかしち
やっただ。家に着いて目を覚ましたはやてにはまずノエルさんに
セクハラしたことを怒られた。いやいや彼女は僕にセクハラされる
ことを至高の喜びとする変態メイドなのだが

「聞いとるんか」

「もちろん、とりあえず座って落ち着こうぜ」

「そうやな」

「ふう、よっこらせッ○ス」

「反省しとらんやろ！」

何故に！？座っただけだよ。お互い商店街で買ってきたジュースを飲んで落ち着く

「さあ、一緒に歓迎会の準備しようぜ」

「誤魔化されへんからな。準備終わったらもう一度お話やで」

「おk」

はやては一人暮らしで培った家事能力でテキパキ美味しそうな料理を作っていた。

僕は場を和ませる為にはやてのお尻を時々撫でたりして怒られながら一緒に料理を作って机の上に並べていった。

「かえで君が料理できるなんて意外やったわ」

仕上げのサラダを作るために野菜を切りながら話しかけてくる

「できる男の嗜みってやつだね。一緒に料理とか新婚さんみたいだろ。でさ、こんなふうにはやてが料理作ってる後ろから僕が抱きしめたりしてさ」

後ろからはやてのお腹に両手を回して抱きつき、あごを肩に乗せる。ついでにバレないように股間をはやてのお尻の谷間に埋める。柔らかくて将来の楽しみなお尻だ

「・・・そうやね。もう少しでサラダできるからそれまで離しちゃアカンよ？」

恥ずかしそうに頬を染めながらそう言ったはやてに僕は抱きしめる力を強めることで返事をした。目に見えて野菜を切る速さが遅くなったのを見てニヤニヤが止まらないのでした。

「完成や！」

「おお、流石僕の嫁。美味そうなご馳走だ。よし、料理が冷めない内に守護騎士達を出してあげよう」

夜天の書を手に取り起動させる。すると、夜天の書は光り出して僕の手を離れ空中に浮かび上がる。それに反応するようにはやての胸

から光が溢れ出した。う、嘘だろ!?

「それはまさか!?! 貴様が銀河美少年かー!?!」

叫んでみたけど絶対ちげえww

「ちょっ!?! こんなん聞いとらんよ!」

突然胸が光りだしたことで僕の意味不明なセリフに突っ込めない程焦るはやて。夜天の書の起動にはやてのリンカーコアが反応しただけだから落ち着けww

浮かび上がった夜天の書の前に魔法陣が現れて今までで一番の光が目の前を埋め尽くす。その光が引いて目に飛び込んで来たのは床に片膝を付いてこちらに臣下の礼をとっている4人の守護騎士だった

「夜天の書の起動を確認しました」

「我ら主を守る守護騎士にございます」

「やt（r y）」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

一人分セリフが聞き取れ無かったが問題ないだろう。男は基本アウトオブ眼中なんで、男で筋肉で獣耳ってマジ誰得だしww

そしてセリフが終わってから、最後に現れたのは銀髪の女性。空中に浮いていた夜天の書を手に取り守護騎士と同様に片膝を付き頭を下げる

「まず魔導書の闇から我々を救って頂いたことに感謝を。そして私に新しい名前を与えて頂きました。永遠の闇に捕らわれていた私を・・・すくっ・・・て」

顔を伏せているリインフォースから床に雫がこぼれ落ちていく。僕は泣いている彼女の頭を胸に抱き込み優しく撫でる

「君たちは救われるべくして救われた。ただ僕に救うことのできる力があつたそれだけだよ」

「・・・こんなに暖かい感情を感じるのは初めてです。私には感情など無いのだと思っていました。でも、こんなにも私は今まで辛かったのだと。そして今がこんなに嬉しく感じる事が出来るのだと初めて知りました。」

「これから私たちは家族や。みんなに今までどんな辛いことがあつたか私には想像もつかへん。でも、これからは辛いことはみんなが背負いあつて助け合う、喜びはみんなで分かち合つて何倍もの嬉しさに変えるんや。きつとどんなことだってみんなと居れば楽しくなれるそんな関係になりたいんよ。だから、まずは自己紹介からや。私は夜天の書の主『八神 はやて』います。ほんでこっちが『野原 かえで』君、みんなの恩人であり私の恩人でもある、変態な魔法使いさんや」

初対面で変態と紹介された。ヒドすぎるWWでも嫌いじゃないおWW

守護騎士達はお互い目を見合わせた後に名乗り始める

「私の名は『烈火の将』シグナムといいます。主はやて、そして楓殿」

顔を上げた時にぷるんとおっぱいが揺れる。デケエ・・・原作より一周りはでかい。まあ、僕が治す時に大きくしたんだけどね。黒いタンクトップみたいなのがパツンパツンになってるし、流石ヴォルケンリッターのリーダーなだけはある、体のエロさもトップレベルだWW

「あたしは『鉄槌の騎士』ヴィータだ」

続いてつり目で赤毛のロリっ娘が自己紹介する。これからずっと成長することのない一部の人たちに大人気の娘だ。エターナルロリータの称号をもつ彼女の胸も体とのバランスがとれる範囲内で少しだけ胸を大きくしておいた。感謝してくれよな

「私は『湖の騎士』シャルです」

優しそうなお姉さん系だ。でも、湖の騎士って何？昔湖にでも住んでたんですかねww

「盾の守護（ry）」

ふーん、そう。

守護騎士達の自己紹介が終わりリインフォースが自己紹介を始めた。

「夜天の書の官制人格『リインフォース』です。私の身も力も全ては主と楓様の為に使わせて頂きます」

マジかとりあえずおっぱいを使わせて貰えないだろうか。

「使うなんて言っちゃアカンよ。これから私達とリインフォース達は家族になるんやお願いすることはあっても命令なんてせえへんよ。何か困ったことがあったら私達を頼ってな」

なんかおっぱい揉ませて欲しいって言い出しにくい雰囲気になってきたな。でもお願いするのは家族でもありみたいだしいけるだろうか

「じゃあ、おっぱ」

そう言いかけて口を嚙む。はやてが睨みながら僕の肩を驚掴む、口は笑ってるのに目が笑ってない。

「かえでく〜ん？」

「お、おっぱっぴ〜、な〜んちゃって。はは・・・」

乾いた笑いが零れる。今はまだお願いするタイミングでは無かったようだ。また今度お願いしてみよう

「でな、みんなの為にご馳走用意したんよ。ささやかやけど歓迎会や。好物とかわからへんから沢山作ったんやけど、一緒に食べよ？」

「戸惑うかもしれないけど、これが僕たちの気持ちだ。どうか受け入れてもらえないかな。これとかマジ自信作なんだけど」

自信作の唐揚げを指差す。鶏肉をよくタレにつけておっぱいを揉むような気持ちで揉みまくって作ったんだ美味しくないはずがない。愛が詰まってるんだからな

「・・・食べる」

ヴィータのその言葉を始まりにみんながお礼や食べるむねの言葉を言って席に座っていく。いやゝ喜んでくれて嬉しいね

だがみんなまだ真っ黒な最低限な服を着ているだけなのはいただけないな。チルノの中にある大量のバリアジャケットから僕のチョイスで服を着せてあげよう

まずは、シグナムだが黒のバニー姿に着せ替える。胸の谷間が凄いくちになってるな。足も網タイツ装備で目を楽しませる要素が満載だ。頭についたうさぎの耳とのギャップがいいね。涼宮ハルヒのコスプレってことでよろしくww

次のヴィータには体操服とブルマにする、胸には『うゝいた』と平仮名で名札がでかでかと張り付けてある。足には黒と白の縞々ニースを装備でかなり理想に近づいた

シャマルはナース服一択で。怪我を治すのは看護師の仕事なのだ

リインフォースは藍色のチャイナ服である。ちらちら見える太ももが大変よろしいね

ザフィーラは背中に『亀』とあるオレンジ色の胴着を着せる。そのうち、かめはめ波を教えてやろうww

「それが日本の歓迎会の正装だから。みんな凄く似合ってるよ。はやてもそう思うでしょ？」

「かえで君の趣味全開の気がするけど一部のパーティーでは大受けかもしれないな。みんな、よく似合ってるよ」

今はあまり地球の常識に疎いから照れる程度の反応で済んでるけど。そのうちぶっ飛ばされそうな格好だな。今のうちに楽しんでおこう、みんなが席につき準備が整う

そんなこれからいただきますのタイミングでインターホンが鳴る。どうやら訪問者のようだが誰だろうか。これでグレアムのおっさんとかだったらKYの称号をあげてから殴り飛ばすんだがWW

「はーい、みんなちよつと待っててな」

はやてが訪問者を確かめにインターホンのカメラを確かめる。

「はい、八神ですけど。どちら様でしょうか」

『そちらに居る楓の妻です。』

ちよっ誰だwwいや、声からしてアリサだろうけど誰が妻だ。そんな冗談言うようなキャラじゃないだろ。ああ、なんかみんなの視線がビシビシ刺さる

「きっと人違いやと思いますけど、それはどちらのかえでさんのことやろか」

『変態よ』

「了解や」

何かが通じ合ったようだ。変態って、おいww

はやてが出迎えに行って訪問者達を後ろに引き連れてきた。一人や二人じゃなくぞろぞろと入ってくる。アリサになのはにすずかにノエルさんに忍さん。とりあえず忍さんは転移ですずかの家に送り返しといた。何か叫んでいたようだけど恭也さんにお任せコースで。

「かえで君、説明」

はやてに有無をいわさない顔でお願いされました。

とりあえず僕はハーレム星で生まれた王子であること。王家の家訓が『青春を謳歌しようぜ!』であることを話す。ハーレムは僕の王族としての血筋に刻まれた呪いなのだ。大昔に悪い魔法使いにかけられたのがハーレムを作らなければ死に至る呪い。体を震わせてうつむいている美少女陣。こんな僕のことと悲しんでくれるのかい？

・・・フルボッコにされました

少女達にボコボコにされた後にノエルさんの膝枕で横になる僕。優しく頭を撫でてくれる様は愛に溢れていてメロメロになりそうだ。鼻息が荒いことを除けばだが。きっとここもノエルさんが僕を追跡してみんなに連絡したのだろうと思われる。ファリンさんは家で留守番しているらしく残念だ。

「だいたいの事情はわかったわ。つまり、かえで君は美少女大好きなハーレム野郎って訳やな。それでアリサちゃん達は納得してるん？」

アリサ達と話し合い色々僕について聞き出したようだ

「まあね、私達みんな一度は通った道よ。確かに常識で考えたらハーレムなんてありえない話だけど、楓を常識で考えようっていうのが無理なはなしでしょ？」

「楓くん以上の男の子も楓くん以外の男の子と愛し合うのも私には想像つかないかな。」

「ノエルさんノエルさん。私もかつくに膝枕したいの」

「わかりました。あと三十分程で替わりますね」

「え」

みんないい表情をするようになったな。ここまで愛されたらそれに応えるのが男の役目だ。そしてなのはとノエルさんは空気よもうか。僕はなのはのスカートの中を眺めながらそう思った

「なんかアリサちゃん達とは仲良くなれそうな気がするわ」

「そうね、でも楓と一緒にだと苦労するわよ」

「顔が笑ってるでアリサちゃん。好きな人の為の苦勞なら喜んでできるんやから問題ないやろ？」

「私達みんなを大好きなんて言う変わった男の子だけど、それでもはやてちゃんは好きなのかな」

「変わってるのもひっくるめてかえで君が好きやからなく。さすがちゃんはちゃうの？」

「大好きだよ」

「はいはい、すぐかもあんまりノロケないの。じゃああらためてよろしくね、お互い同じ人を好きになった同士仲良くしましょ」

「よろしくね、はやてちゃん」

「よろしくなの、はやてちゃん」

「うん、よろしくや。アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん」

本当にいい友達になれそうだなによりだ。これは僕の日ごろの行いがいいからに違いない。

「楓殿、そちらの少女からリンカーコアの反応がするのだが管理局の魔導師ではないのですか？」

シグナムの言葉で納得する。なるほど、シグナム達がピリピリしてると思ったらそういうことか。

「安心してくれ、なのはは管理局じゃないよ。それと後で言おうと思っていたんだけどもう君たちが管理局に追われることはないよ」

「楓ちゃん、それはどういうことですか？」

楓ちゃんって、僕が男だってわかってますかシャルさんww

「僕の力で夜天の書が僕たち以外にはロストログアと認識できないようにしたんだ。管理局からみたら少し高性能なデバイスくらいにしか認識できないはずだ。はやてもシグナム達もリインフォースもこれをきっかけに新しい自分を始めて幸せになって欲しい。僕は全力で助けになるよ」

「そんなこと出来るわけが」

「それが出来るんがかえで君なんやでシャル。なんたって誰にも治せなかった私の足も治したんやからな。」

「私もカエデ様を信じます。永遠に続くと思っていた闇の絶望の中から私を救い出していただき光を示して下さいました。他の誰が信じなくとも私は絶対に信じています」

リインフォースは力強い言葉で僕を信じると宣言した。

「好きな人の信頼は絶対に裏切らないよ。今はまだ信じなくてもいい。でも困ったことがあったら頼ってね。じゃあ冷めないうちに料理を食べよう。多めに作ったからアリサ達の分もあるよ」

「へー、はやては私達が混ざってもいいの？」

「勿論や、今日は歓迎会やからな。賑やかな方がいいに決まっとる」

「じゃあ僕はヴィータを膝に乗せる場所希望で！」

そういつて体操服姿で椅子に座っていたヴィータを持ち上げて自分の膝の上に座らせる

「子供扱いするんじゃないえ！」

「バカ言うな、ヴィータを子供扱いなんてするわけないだろ。ちゃ

んと性の対象として見てる!」

「な、なら許してやるよ」

照れるヴィータに和む。そんな僕らを見てどん引きする周りの視線が心地よい。というか僕9歳なんだけど、外見の釣り合いはとれてるはずだから引かれる要素が全くわからんな。

「じゃ、じゃあ家長である私から言わせてもらいます。今日初めて顔を合わせた人ばかりやけどこの出会いを大切にしたいと私は思うとる。これから家族や友達になる人達全員に感謝の言葉を贈りたいと思います。私と出会ってくれて本当にありがとう。今日は間違はなく今までで最高の日や、これからもみんなと最高に楽しい日々を送れることを願って。かんぱい!」

「「「乾杯!」」」」

お互いグラスをくっつけて音を鳴らしあう。美味しい食べ物で話も進みみんな打ち解けていく。僕もヴィータとのスキンシップで今夜は一緒に寝る約束をしたくらいだからな

「そういえばシグナムさん達の服装はどうしたんですか？」

そこは突っ込んじゃらめえええ！みんな気を使って何も言わないようにしてたのにやりやがったな天然娘なのは！

「いや、これは楓殿から歓迎会ように頂いたのだ」

「異議あり！」

人差し指を突きつけて叫ぶ。僕のコマンドは今『つきつける』状態だ

「なにか？」

「今の発言はこの証拠品と矛盾すると思うんですがどうでしょう」

ザフィーラの生まれつきの獣耳を指してつきつける

「確かに今の証拠は驚愕の事実ですがシグナムさんの格好とは関係ないと思われますが、どう思われますか裁判長」

アリサめ今日はやけにのりがいいじゃないか

「ペナルティーや、かえで君は少し黙っているように」

くっ、つきつける証拠品を間違えてしまったようだ。次はシグナムのおっぱいを『ゆさぶる』コマンドでいくべきか

「正装だと聞いて恥ずかしいのを我慢していましたが違うのですか
楓殿」

シグナムが羞恥心で震えてる。確かにこの中で一番着たくないのは

どれかと聞かれたらシグナムのバニー服だと答えるけどな。

「僕はバニー姿のシグナムが好きだ！」

「なあ！？」

膝の上のヴィータを優しくどこかしてバニー姿のシグナムに抱きつき
上目づかいで見つめる。

「いつもの凛々しいシグナムもいいけど。たまには今みたいに可愛いシグナムもみたいな」

「お戯れを。私が可愛いなどと」

僕の顔を両側からすっぽりと包み込んでいるおっぱいを手で掴んで
モミモミと動かす

「好きな人の色んな姿を見たいのはおかしいかな？これから僕は色んなシグナムを見ていきたいとおもうよ」

「私のことを好きと言ってくれるのですか。この剣を振ることしか能のない女を・・・」

「まだ出会ったばかりだけど僕はシグナムが好きだな」

実は夜天の書のプログラムを弄った時に守護騎士は僕に体を触られながら言われたことを好意的に受け取るという設定を付け足したのだが効いてるんだろうか。

「ありがとうございます。主はやてを救って頂いたこと、私達がプログラムだと知ってなお優しくに接してくれる楓殿を私もお慕いしていますよ」

そういつて僕の頭を胸に抱き込み優しく撫でる表情は嬉しそうに緩んでいた。

「・・・妬^{ねた}ましい」

ノエルさんが嫉妬してるけどね。またあとで構ってあげるからあんまり睨まないように。

僕は向きを変えて後頭部をシグナムの谷間に埋めて膝の上に座る。右を見ても左を見てもおっぱい。今僕は核兵器レベルのおっぱいに包まれているのだ

「シグナム、あーん」

頬でシグナムのおっぱいに触れながら僕が作った唐揚げを箸で挟んで口元に持って行く

「い、いただきますね。楓殿。はむっ、モグモグ・・・美味しいです」

「でしょ？嬉しいなく、みんなの為に頑張って作ったんだよ。包容力がある女性って魅力的だね。今晚一緒に寝てくれたらもっと好きになるなきっと」

「楓殿が望むならお供させて頂きます」

「あたしとの約束忘れてないだろうな。かえで」

「もちろんヴィータも居てくれないと寂しいよ」

「ならいい」

そっぽを向いた後に食べるのに戻るヴィータ

「それは私も同伴してよろしいですか」

シグナムとヴィータの二人と一緒に寝る約束をしたところでリインフォースが参加を希望。もちろんよろしいに決まってるじゃないか。

「リインフォースみたいな美人さんなら大歓迎だよ。」

これで三人。これは楽しくなりそうだ

「呆然と見とったけどとんでもない速さでシグナム達と仲良くなっ
とるな」

「それが楓よ」

「私もかっくんと寝たいけど明日学校あるからな」

「残念だけど今日は帰らないとね。なのはちゃん」

「そういえば、はやてはいつから学校行くつもりなんだ。一応今まで世話になってた病院の先生とかに診てもらおう必要はあると思うけど。足自体は治ってるから問題ないでしょ」

「そうやな。出来ればかえで君達と一緒にがええな。グレアムおじさんにも相談せんとアカンからいつになるか」

「僕がグレアムおじさんに話を通しておくよ。制服とかも明日か明後日には届くようにして。うん、来週には一緒に通えるように準備を整えよう」

「本当に同い年か疑いたくなる行動力やな」

よし、先が見えてきたところで夜も遅いしそろそろアリサ達は解散かな。

これから僕は本日二度目のお風呂タイムにシグナム達とベッドでお楽しみとイベント盛りだくさんだからな。

一晩中シグナムの胸を揉みながら好きだと言い続ければ朝おきたらシグナムの僕に対する好感度が天元突破していること間違いなしだろう。時には熟睡しているヴィータの胸にいたずらしたり。リインフォースの唇を食ったり、今夜は眠れない夜になりそうだな。

・・・シャルって美人なんだけどこれといって特筆すべきことがないというか、影が薄いというか。正直すまないとしか言いようがない。ザフィーラは男だし

「理不尽よ」

「・・・ぬう」

・・・さて、シグナム達とお風呂行こつと。はやても一緒に行こうぜ

第15話 変態で・・・いいよ。変態らしいやり方で話を聞いてもらうから。

長い……。書いても書いても終わらない恐怖を味わいました。とりあえずこれでA・S完結ということでしょう。まだ、夜天の書を書き換えた設定はいくつかありましたがそれはまた今後の話で散りばめていきます。

今回はいつもの三倍近い文章量でした。まじ疲れた……。なので次回は既に書き終わっている一話完結の番外編を投稿して次に無印を完結に向かわせるといった感じで行く予定です。そうすれば余裕が出来てやっていないエロゲを消化できるんでww

では、次回をお楽しみに。番外編は恋姫の世界で主人公の楓が好き勝手するお話です。読まなくても本編を読む上で問題ないんですけどねww

閑話1 これは恋姫ですか？（恋姫編）（前書き）

初の番外編。この話は一話完結なので続きません。番外編と言っても実際に主人公が体験したお話です。リリカル意外興味ないね！という方は読み飛ばしても続きを読める内容なので問題ないです。

途中で主人公の性格に違和感を感じるかもしれませんが戦場でテンション高いからということでもよろしく願いますww

では、番外編『これは恋姫ですか？』をお楽しみ下さい。

閑話1 これは恋姫ですか？（恋姫編）

劉備と共に正義のためにいきるのか――――

曹操と共に覇道を歩むのか――――

孫策と共に乱世を駆け抜けるのか――――

それとも全く違う新しい道を進むのか――――

貴方自身が選びその目に少女たちの生き様を焼き付けろ！

さあ――。今より新しき物語の幕が上がる――。

side 楓

僕は今神様からもらった世界移動の力で三国志の時代に来ている。ただただの三国志の世界ではない。登場人物が全員18歳以上（笑）のエロゲであり有名な武将がみんな美女や美少女という恋姫の世界に来ているのだ。

以前に何度か訪れていてそのたびに人外じみた戦闘をしているので『不殺の戦神』という二つ名もついた。厨二な僕としてはどんこいだww

どこに行っても戦争ばかりだから暴れる場所には事欠かない。生身の人間を合法的に殴れるのでストレスが溜まったときとか技の訓練をしたときに大変助かる。今は丁度反董卓連合のところだ。僕は反董卓連合の軍勢を確認してから以前一度助けた月ちゃん（董卓）のもとに転移する

「ジャッジメントですの!」

テレポートだぜww

転移した先には落ち込んだ顔をした月ちゃんがいた。空気読めてない登場しちゃったと少し反省。それにしてもいつもそばにいる詠ちゃんがいらないな

「楓さん！」

「久しぶりだね月ちゃん。いつもそばにいる詠ちゃんが見当たらないけど？」

「詠ちゃんは今兵に作戦を伝えるにいつてるんです。それにしてもなんでこんな時に、早くここから離れて下さい。ここにいたら戦いに巻き込まれちゃいます」

血相を変えて必死に僕に訴える月ちゃん

「こんな時だからこそだよ。助太刀に来たんだ。僕にも月ちゃんを守らせて欲しいんだ」

「そんなの駄目です。前に賊から助けてくれた時とは規模が違います。恩人の楓さんが私の為に傷つくなんて間違ってます」

帰ってくれと僕を追い出そうと体を必死に押そうとしてくるが如何せん力が足りない。こんなにか弱い女の子の首を何十万の敵が狙っている。それはどれだけ辛いことなのか怖いことなのか・・・僕は必死に追い出そうとする月ちゃんを抱き寄せた。

こんなにも小さなからだでどれだけの気持ちを押し殺しているのか想像もつかない。誰よりも他人のことを思いやることのできる月ちゃん。自分の為に傷つく兵達に何も思わない筈がない

「辛いならそう言えればいい。苦しいならそう言えればいい。僕は死なないよ絶対に、だって僕は月ちゃんが大好きだから」

「楓・・・さん」

「可愛いくちは恥ずかしいがりやで、そして誰よりも優しい。そんな月ちゃんを守らせて欲しい。僕を理不尽な暴力に苦しむ女の子を見捨てるような最低野郎にしないでくれ」

「そんなの屁理屈です！好きなんです！初めて楓さんに会った時からずっと！何度も夢に見ました！その度にもっと好きになりました！暇さえあれば楓さんのこと考えて！失いたくないんです、なんでわかってくれないんですか！！」

突然の告白。それと同時にとめどなく涙が月ちゃんの頬を伝う。こんなに必死に大きな声を出しているのは初めて見た

「わかるよ。わかるからこそ月ちゃんを失いたくない僕の気持ちもわかってほしい。絶対に死なない、傷ひとつ負わないと約束する」

「・・・約束です。楓さんが死んだら私も後を追いますからね」

「それは怖いな。なんとしても生き残らないと」

「そうです。これは約束を破らない為の先払いです。・・・んっ」

僕の唇が月ちゃんの唇で塞がれる。それは数秒にも満たない触れるだけのキス。嬉しいけどこれだけじゃちよっと物足りないうだ。

「ふふっ、続きは帰ってきてからです。その時は私を楓さんの好きにしてくださいよ?」

・・・悪いなみんな。僕の初体験は異世界で済ませることになりそうだ。

「すぐ帰ってくる」

「待ってます」

楓が姿を消すのを確認した後に月はひとりでその場にへたり込んだ。

「へう、恥ずかしかったよ。でも、私の方がお姉さんなんだからしっかりしないと。待ってます・・・って、ちょっと大胆だったかな」

顔を真っ赤にして愛する人に思いを馳せる。そこにはさっきまでの暗い顔は無く未来を見据える明るい顔があった

僕は転移でさっき反董卓連合軍を眺めた場所に戻ってきた。目の前

では？水関に向けて挑発とかしてるところだね。『おまえの母ちゃんです！』とかガキかお前らww

全く董卓である月ちゃんは本当にいい娘なのにこの人達は良心が痛まないのだろうか

さてと、別に僕は戦争を眺めに来たわけではない。月ちゃんの為に沢山の相手を殴り飛ばしに来たのだ。そして月ちゃんの劣勢、男なら当然弱者について女の子を守るものでしょうよ

常識を操り自分に不殺の呪いをかける。これでどんなに急所を本気で攻撃をしたとしても相手は死なない。9歳で人殺しにはなりたくないんでね

じゃあ行きますか。巻き込まれたくない人は逃げて下さいな。僕は待機していた崖から飛び降りる。

ビルの上階分くらいあるから一般人なら死んでるね。でも、僕はチートなんで難なく着地する。そして？水関を背にして一人で十万を超える軍勢に対峙する。

「遠からん者は音に聞け、近からん者は目にも見よ！我こそが『不殺の戦神』。嘘に踊らされた愚か者共よ董卓の善政で栄えた洛陽に戦火を持ち込むというのなら我が相手になろう。人の身で戦の神とまで言われた力その目に焼き付けよ！！我は武を振るう災害なり！人の身では抗えぬことを知れ！巻き込まれたくないものはただ逃げろ。あるいは災害から逃げられるかもしれぬぞ」

己の内にある気を高めていく。大きく深呼吸して体をベストな状態に持って行く。将の命令でただ一人に何百という兵が殺到する。それほどに戦神は脅威なのだと身をもって知っているのだろう。だが甘い

一番先頭にいる兵の頭を掴み目にもとまぬ速さで地面に叩きつける。音速を超える速さで叩きつけられれば人は軽く死に至る。しかし、死なない。どんなにやっても死ねない。ゆえにこれは『呪い』。それは人の身では不可能な所業、だから僕は『不殺の戦神』。

舞い上がった土埃を腕を振り下ろし吹き飛ばす。回り全てが敵、実に結構だ。僕は自然体でその敵地を闊歩する、ゆっくりと止められるものならこの歩みを止めてみると言わんばかりに不敵に笑いながら

「さて、ゆるゆるといざ参ろうか！」

拳を奮い何十という兵士たちが吹っ飛んでいく。武術の型を確かめながらひたすら周りの敵たちに拳を蹴りを撃ち込んでいく。近くにいた敵の顔に拳を叩き込むと血を吹いて転がる。それを見て口の端を持ち上げる。まだまだ居るだろ？早く来いよ。月ちゃんが僕の帰りを待っているんだ。その邪魔をするお前たちには技の練習台兼ストレス解消につきあってもらおうか

「我が名は関羽！これ以上我らの兵をやらせはせんぞ『不殺の戦神』よ！」

「あらら、美女登場だね。関羽さん、もう少しやらせてくれよ誰も殺しはしない。子供の過激なお遊びだと思ってつきあってくれ」

僕まだ9歳ですよ。そんな危ないもん向けないでよね。泣いちゃうよww

「ふざけたことを」

関羽が武器を構えてこちらに切りかかってくる。それを手のひらで受け止める

「ふざけてないよ。僕はただ暴れただけだ。どっちに付けば気持ちよく暴られるか考えて僕は董卓についた。言っただろ僕は災害だと、被害にあいたくないなら逃げろ。人の身で立ち向かうのは無謀意外のなにものでもない」

「そんな断固とした意志のない力に負けられぬ」

関羽が一度飛び退いて体勢を整えようとするが残念、僕が武器を掴んでいるよ。

「残念、君たちこそ偽りの目的で戦争なんてしないで欲しいな。董卓は悪政なんてしてない、洛陽を心から思う優しい娘だ。だから僕は暴れるんだ、理不尽には理不尽な力で対抗させてもらうよ。今は眠れそして次に目を覚ました時自分の目で真実を見定めろ。関羽、お前は真っ直ぐなとても素晴らしい意志を持った女性だ。今度あった時は胸を揉ませてくれよな」

イタズラっぽくそう言って、関羽の意識を奪う。彼女を抱きかかえて劉備の陣営に向かう。途中で襲いかかってくる兵達を叩き伏せながら到着する。目の前には大変素晴らしいおっぱいをした劉備がいた

「関羽を届けにきた。受け取ってくれ」

「はっ、はい！あなたが不殺の戦神さんですか？」

「まあね、その名のとおり戦闘不能にするだけで人を殺さないようにしてる変わり者だ」

「こんな子供が・・・」

「そうだね、嫌な時代だ。あっちこっちで戦いばかり、子供は血だらけの世界で育っていく。親は戦争で死に、殺した相手を憎み。その繰り返しだ。だから僕は貫くんだけ己に課した『不殺』の掟を」

「あの、私のところに来ませんか。私はみんなが笑って暮らせる世界を作りたいんです。あなたの力があればきつともっと早く果たせると思っています」

「・・・いつか。あなたに、劉備さんに仕える日が来るかもしれない。でもそれは今じゃない。僕はこの謂われない戦いを停めたいんです。董卓はとっても良い娘だ、洛陽のみんなが彼女を慕っている。最初から戦う理由なんて無かったんです。そして、この戦いを停めるにはその為に戦わなきゃいけない。だから僕が戦います、誰一人死ぬことのない戦い。それが平和への近道だと思うから」

「戦神さん、名前を教えてくださいませんか。私は姓は劉、名は備、字は玄德。真名は『桃香』です。」

「真名を貰えるとは光栄です。僕の名前は野原 楓。真名はないので楓と呼んでください。桃香さん」

「楓くんだね。いつか私たちのところに来てくれると嬉しいな」

「そうですね。いつかそんな日が来たなら、あなたの夢見る平和な

世界の障害になるものは僕が全部風払いましょう。このおっぱいにかけて」

「ふえ？ん、あっあう。ひゃん！？」

そういつて桃香さんの大きな胸を服の上から揉んで離す時にキュッと乳首を摘んでから離す。

「桃香様！」

近くにいたはわわ軍師が叫ぶ。すまねえな、あまりにもいい胸だったんで我慢できなかったww

「じゃあね、桃香さん！いいおっぱいでしたよ。そのおっぱいになら仕えてもいいです。」

走って立ち去る楓の背中を呆然と見送る劉備とその周りの人たち

「初めて男の人に胸揉まれちゃったよ。これって責任とってもらえるのかな朱里ちゃん」

「ど、どうなんでしょう」

「いや、責任とってもらおう。さっきの『不殺』を貫くって言うって姿、とってもかっこよかったもん。きつと・・・これが好きって気持ち。私の隣で平和になっていく国と一緒にみるんだ」

「でも、相手はあの『不殺の戦神』とはいえ子供ですよ？」

「いいの、私が決めたんだから！そんなこと言ったら朱里ちゃんだって子供じゃん」

「あゝ、人が気にしていることを！たとえば桃香様でも許しませんよ」

そんな感じで騒がしく言い合いの続く劉備陣営であった。

飛び出した僕はテンションを上げながら敵を倒していく。恐らく合計で一万人はいったかな、これが無双のゲームならそろそろ止めとけて数字だろう

だがまだやらないといけないことがあるのだ。それは関雲長にちなんだカンチヨウ無双だ。本人が聞いたらぶちぎれそうだなww

カンチヨウするなら美女や美少女ばかりの武将達はおあつらえ向きの相手だ。僕は静かに心を静め両手を合わせ人差し指を立てて構える。

まずは褐色肌のよく似合う孫策のお尻の穴に突き立てる。崩れ落ちる孫策、呉の王討ち取ったり！ついでに孫権のお尻も頂いてく。姉妹そろっていいお尻しやがって。

孫策を筆頭に何十の武将達の後ろの穴を貫いていく。曹操にカンチヨウしたときはマジでやばかった。絶対に悶絶するはずの一撃を耐えてこちらを呪い殺すような視線で睨んできたのだ。恐怖のあまり

必殺のカンチヨウを十回位突き刺してしまった。地面に這いつくばりながら体を痙攣させる曹操を見て安心する。さすが霸王だ冷や汗ものだぜ。そして新たな標的に走り出す

襲い掛かってくる敵兵を殴り飛ばしていると少し離れた場所に白い現代風の制服をきた優男がいた。リア充の香りがぷんぷんするぜ。巷で天の御遣いとかいわれてる奴に違いない

「リア充なんてそんなふざけた幻想をぶち壊す!!」

「なんでこの時代の人がそんな言葉をつうばあああああ」

手加減無しの一撃を顔面に叩き込む。死にはしないが二度と人前に立てない顔にしてくれるわ。オラオラオラ!

「や・・・べえ・・・」

「ゴムゴムのピストル!」

「グワァアアア！」

「八卦六十四掌」

「チャクラが練れない!？」

「その心臓、貰い受ける！」

「心臓が・・・」

「飛天御剣流奥義。あまかけるりゆうのひらめき天翔龍閃！」

「体が引き寄せられる!？」

「人体錬成！」

「持ってたかたああ！」

「まだ俺のバトルフェイスは終了してないぜ」

「ひょっ!？」

「おら! ゆめのけむりだせ!!」

「やめたげてよお！」

「——教えてやる。これがモノを殺すっていうことだ」

「俺の体が十七分割に!？」

「眼鏡の再構築を忘れた・・・」

「長門サイコー！あと便座カバー」

「レールガン
超電磁砲」

「お姉様！！」

「とどめの二重の極み！」

「アッー！！」

その男は『不殺の戦神』がもつとも死に近づけた男として名を残した

その後、戦いは『不殺の戦神』の活躍で董卓軍の勝利に終わった。そして、歴史書にこう記されている。

『かつて戦乱の時代、決して人を殺めない絶対的な力を持った武人がいた。その武人は二十万の兵を向こうに回したった一人で勝利を収めた。人は彼を『不殺の戦神』と呼んで戦いと平和の象徴として崇めた。古今東西を見渡しても彼ほど異色の英雄は存在しないだろう。彼はその後二度と戦場に現れることは無かったそう。しかし、董卓に会う為に何度も洛陽を訪れるのを目撃されており彼の強さを知っている。洛陽では英雄として人気を集めた。彼に惚れ込んだ劉備は生涯彼だけを愛し未婚を貫いたという。数え切れない戦いにおいて不殺を貫き続けた彼の本当の名を知るのは劉備と董卓の関係者だけだと言われている。その名がその者達の口から他の人に語られることは無かった。そして、曹操は己の怨敵として戦神を生涯恨み続けた。どれだけの時が経とうとも彼以上の英雄は現れないだろう。かく言う私も彼の英雄譚を愛する一人なのだ。そして、どうでもいい話だが『天の御遣い』といわれていた者とは思えぬ姿形をしており不気味に思い近づく者は皆無であったそう。』

閑話1 これは恋姫ですか？（恋姫編）（後書き）

天の御遣いには主人公のネタ技の練習台になってもらいました。この作品で楓意外にハーレムは作らせませんww

新しく恋姫の作品を書くとなると大変なのでこのように番外編として書いて良かったです。一話だけなのでハーレムは作れませんでしたが大変満足しましたww

できれば恋ちゃんもだしたかったなと思いましたがあの曹操を悶絶させたのでよしとします。

次回は無印の話を書くか。学校のクラスに新キャラ出しまくって楽しむか迷っております。実は魔理沙も霊夢も大好きなんだよねww

では次回をお楽しみに。

第16話 私たちに大きなことはできません。小さなことを大きな愛にするだけ

今回のサブタイトルはマザー・テレサの名言です。よく知らないですけどこの名言だけでも尊敬に値する人物だと思います。

それはともかく今回はなののお話。少しなのはがエッチですWW
たとえ批判されても『変態を貫く勇氣』を胸に頑張っていこうと思いますWW

では、第16話をお楽しみください。

第16話 私たちに大きなことはできません。小さなことを大きな愛でするだけ

side なのは

人に迷惑をかけないように、人に悪く思われないように。自分の気持ちをはた隠しにして、本当の自分を出すのが怖くて。本心を悟られないように表情を取り繕っていた。

そんな私が初めて心から欲しいと願ったのは一人の男の子。

男の子はクラスの人気者。体育も勉強も抜群の成績、凄く整った顔立ちでなにより明るくてみんなに好かれて頼りにされている。それは私の目指す姿に最も近かった。どうやったら彼のようになれるのかいつも眺めていた。

やること全てが周りの人の目を惹きつける、間違いなく私もその一人だ。一挙一動に注目してしまう不思議な魅力に溢れているのだ。知れば知る程自分がいかに足りないか自覚してしまい落ち込む。彼のようにするのは無理なのだとか心が折れそうになる。

そんな時にクラス対抗のリレーをすると先生から告げられて目の前

が真っ暗になった。運動の苦手な私は間違はなく足手まといになって迷惑をかけてしまう。『お前のせいで負けた』そんな言葉を想像して血の気が引く。

それは、リレーが始まって同じだった。緊張で押しつぶられそう
で気持ち悪い。何より憧れの男の子と同じチーム。私のせいでアン
カーの彼に迷惑をかけたら・・・

心の準備の出来てない私にバトンが渡る。全身がバラバラに動いて
いるかのようにどう走っているのかもわからない。息が上がり後ろ
から抜かされるかもしれないという恐怖に追い詰められる。

そんな状態の私が転んでしまったのは当然だったのかもしれない。
でも、その時だけは転びたくなかった。転んでヒリヒリする膝や手
より迷惑をかけて見捨てられることがなにより私の心に痛みを訴え
る。

恐怖や痛みのせいで目から涙を零しながら一步一步進む。周りはい
んな諦めたような同情するようなそんな視線に溢れていた。『ごめ
んなさい』とひたすら謝る。やっぱり私は駄目なんだ。あの男の子
みたいには一生なれないんだ。私は涙で歪む視界で目の前にいるバ
トンを待つ憧れの男の子を見る。その瞬間、私の心は驚愕にされ

た。

諦めたわけでもない転んだ私に同情するわけでもない。不敵に笑って私に向かって手を差しのばしていた。謝る私に馬鹿と言い、恐怖で震える私に一位を約束した。

知らなかった。私は遠くから眺めていただけで知ったつもりになっていたけど違った。

あなたは・・・。

野原君は・・・。

こんなにも頼りになってカッコ良くて、何より全てを委ねてしまいたくなる安心感。私の心を蝕んでいた恐怖は野原君に見つめられた瞬間に吹き飛んでいた。

もっとあなたのことを知りたかった。その目で見ている景色を知り

たかった。

野原君が私を抱えて走り出す。周りの景色を置き去りにしていく、私一人では絶対に見ることができないものだ。今私はあなたと同じものを見ているのかな？顔を上げると楽しそうに私を見つめる野原君がいた。自然と自分の頬が弛むのがわかる。

約束通り一位でゴールして、私は男の子に話しかけられる。迷惑をかけることを何よりも恐れる私を言い当てられた。他の人に言われたなら頑なに否定しただろう。でも、野原君が相手だとあるがままの自分を受け入れられた。

助け合うことの大切さ、そんな当然のことを私は知らなかったんだ。誰かの役にたつことだけを考えて人に助けてもらうことを拒否していたらいい関係なんて築けるはずがないのに。

ありのままの自分を受け入れてくれたという嬉しさと野原君という支えを得た安心感から今までとは違う涙が零れ大きな声で鳴咽をあげる。それは新しい私が生まれた産声だったのかもしれない。野原くんの腕の中はどんな場所よりも安心できた。

そして私の野原君への憧れの気持ちが好きという気持ちに変わる。

だから私は思う。なによりもあなたが欲しいと。

私はあの日から本当の自分を始めることができたんだと思う。出会いが人を変えてくれた。本当にいい出会いを私はできたんだ。

そのかつくんは今私のベッドで眠ってる。手作りのシュークリームが食べたいと家に押しかけてきたと思ったらベッドでぐっすりなんて本当に欲望に正直なんだから。

何度も練習して最近ではお母さんにお店で出せると太鼓判を貰ったシュークリームを机の上に置いてかつくんの寝顔を眺めて優しく頬を触る

「わたしのシュークリームを食べて貰いたいののはかっくんだけなんだよ？」

寝ているかっくんからは当然返事が返ってこない。なんだか物足りないな

「ふぁゝ、眠くなっちゃたなゝ。ベッドは一つしかないからこれは仕方がないことなの」

一人で言い訳を言いながら布団の中のかっくんを起こさないようにそっと潜り込む。私はかっくんに覆い被さるようにうつ伏せになる。息を吸うといつもと違う匂いがしてドキドキする。これがかっくんの匂い、癖になりそうなの。かっくんの胸に匂いをつけるように頭を擦り付ける。変態さんが移っちゃったのかな

アリサちゃんの家で読んだエッチな本を思い出す。すずかちゃん家のお風呂で見たけど男の子はここを触られると気持ちいいんだよね。

「なのは・・・」

「んにゃっ!？」

びっくりして起きたかを確認める。どうやら寝言だったみたいで静かに寝息をたてていた。寝言で私の名前を呼んでくれるなんて嬉しいな・・・。

私は布団の中でスカートを捲り上げて下着越しに割れ目をおっくん
の股間に擦り付ける。こうすればお互い気持ちよくなれるんだよね

「んっ、なんかアソコがふわふわしてきたの・・・」

おっくんの体が硬くなってきてピクピクしてる。私も身体の芯がポカ
ポカしてきて幸せな感覚が沸き上がってくる。夢中になって腰を動
かしていたらいつの間にか背中が腕が回されているのに気づいた。

そろそろ布団から頭を出すとニヤリとしたかつくんと目が合う。・
・いつから起きてたんだろ

「変態にゃのは」（にゃにゃ）

「わたしは、かつくんみたいに変態じゃないもん」

今だって私を抱き寄せてより股間を押し付けてきてるんだもん。知ってるよこれって『す〇た』っていうんだよね。確かに気持ちいいかもしれない。かつくんも私で気持ちよくなってくれるのかな。

「心配するな。なのはが変態なら僕も変態になってやるからな」

「逆なの。変態さんなかつくんにわたしがエッチにされちゃっただけだもん」

「じゃあ、責任として僕がエッチなのはをお嫁さんに貰わないと

ね」

「むゝ、わたしだってかっくん以外なんてありえないもん」

かっくんの首に腕を回す。何回やっても見つめ合う度にドキドキしてしまう。自然と私の顔が近づき唇を合わせる。それが合図だったかのようにかっくんの指が私の割れ目を優しく撫でさする。

指が動く度に体が反応して震える。本当に優しく触ってくれてジワジワと何かがこみ上げてくる。こんなにもあなたが愛しい。もう二度と離したくない。そんな気持ちを込めて大きな快感と共に目をつぶりギュツとしがみつく。かっくんはそんな私の頭を優しく撫でてくれた

「可愛すぎだよ、なのは。どんな奴でも今のなのは見たらイチコロ間違いなしだな」

「・・・わたしのこんな姿をみていいのは、かっくんだけ。大好きなかっくんだから見せたんだよ。」

「エッチなのはは僕しか見れないのか。じゃあそのなのはにシュークリームを食べさせて欲しいな」

「いいけど、クリームとか垂れちゃうよ？」

「そこはほら、口移しで食べさせてくれればシュークリームも食べて甘いキスもできて一石二鳥だよ」

「ええ」

簡単に言ってるけどそれは凄いことなの。シュークリームだけじゃなく私の唾液も混ぜっちゃうし。かつくんの中に私の唾液が……・うん、いいかも。かつくんの前では自分を抑えつける必要なんてないもん。

「じゃ、じゃあいくよ」

自分で作ったシュークリームを一口だけ口に含み甘い生クリームを口内で味わいながら仰向けに寝転がっているかっくんに覆い被さり唇同士を密着させる。

舌を使ってシュークリームを送り込む。クチャクチャとお互いの唇が音を奏でながら感触を味を楽しむ。頭がポーツとしてきて本能のままに舌を絡めあいまるでかっくんと私が一つになってしまったかのような一体感に包まれる。気持ちいい・・・これなら毎日したいかも

ガチャッ

「なのはゝ母さんが夕飯できたから呼んできてって・・・・・・・・お邪魔しました」

バタンッ

お姉ちゃんに見られちゃった。まあ、いっか。私たちの関係も知ってるし応援してくれるって言ってたもんね

『小学生の妹に負ける私って……。あはは、この行き場のない気持ちどうしようか。これは恭ちゃんにぶつけるしかないよね。うふふふふ腐腐』

『ん？美由希どうした。なのはの部屋の前で立ち止まって』

『恭ちゃん覚悟ーー！』

『うおっ！？突然なんだよ！』

『問答無用！』

『全くわからん！』

なんか廊下から不気味な声とか叫び声が聞こえてくるけどきつと気のせいなの。私は二口目を口に含んで再び口を重ねる。幸せに身を委ねながら甘いキスを少しでも長く味わうのでした。

side
楓

もうシュークリームの味もなくなってきたんだがなのは口を離す気配がない。さっきからなのは舌が僕の口内を動き回っている。目を閉じてひたすら僕を求める姿はとても愛らしい。

「かつくん・・・」

「エロすぎだったの。積極的なのもいいけどいつもの甘え上手なのはどこいったんだか」

「にゃー、どっちも私だもん。あつ、そうだレイジングハートに写真とか保存できるんだよね」

「できちゃうね」

「じゃあさじゃあさ、二人の写真撮ろうよ！レイジングハートお願い」

《了解しました。マスター》

はしゃぎながら僕に抱きつくなのは。そして、空中を浮遊してベストショットを狙うレイジングハート

「レイジングハート！」

《激写！》

息のあった2人(?)によって僕の頬になのはがキスする姿を激写された

「えへへ、じゃあ次は私のほっぺにお願いね。かっくん」

「僕のお楽しみ用になのはのほっぺに股間を押し付けている写真を頼む」キリッ

「台無しだよ」

《変態ですね》

「まあ、それはまた今度お願いするとして。今はなのはの要望通り
ってことで」

「あっ・・・」

《ベストショットいただき!》

レイジングハートには意表をつかれたのはと僕がイタズラ顔でほっぺにキスする姿が記録されたのだった。

「お返しだ」

ニヤリと笑う

「・・・もお、駄目なんだからそんなの。嬉しくて、好き過ぎておかしくなっちゃうもん」

そういつて僕の方に頭を預けてくるなのは。

「明日さ、僕学校休むからよろしくな」

「うん・・・、って学校来ないの！？なんでなんで体調わるいの？」

「明日は死人を生き返らせたり、親子を仲直りさせたり色々予定があるんだよね」

「そうなんだ。それって女の子がらみ？」

「まあ、家族を救う為だからね。女の子だからとか関係なく僕も本気でやるよ」

「女の子がらみなんだ。どんな娘だろうな、友達になれるかな？」

「恥ずかしがりやだけどいい娘だよ。僕らと同年だし、なのとはと同じ魔法少女なんだ」

「そうなんだ。また賑やかになるね」

「はやてと一緒に転校できるように早めに解決しておきたいんだ。だから明日はお休みってことで」

「わかったの。かつくん学校休むの初めてだからみんなびっくりするだろうな」

「ふっふっふ、これを機会に僕のありがたみを噛み締めて欲しいものだ。『あなたが居なくなって初めてこの気持ちに気づいたの』的な展開を希望する」

「わたしは寂しいよ」

袖を掴んで上目遣いすんな。あからさまなアピールだが可愛いから許す。

なんとなく、なのはのツインテールにしているリボンをとって髪を

下ろしてみる。なんかお風呂上がりみたいでいいね

手の中にある白い二本のリボンを見つめて思い浮かんだ言葉は『なまえをよんで』。無印完結は近い

「どうしたの？」

「いや、リボンを舐めたらなのは味するのかなって」

「なんでリボンなの！？わたしを舐めてよ！」

何言っちゃってんのこの娘。まあ、舐めさせてもらうけども W W

僕の物語に悲劇のヒロインはいらない。

美少女が悲しい死を遂げたなら人の死さえも覆してみせよう。

美少女が悲しみ涙を流すなら誰よりもはやく駆けつけて涙を拭ってみせよう。

綺麗なお姉さんの使い魔がご主人様を助ける為に傷つくなら僕が盾となり守ってみせよう。

美女が無力を嘆き助けを求めるなら僕の全てをかけて手をさしのべよう。

アリシアもフェイトもアルフもプレシアもみんな救ってみせる。全員魅力的な女性達だからね。僕も本気でいこうと思うんだ。

「そこは舐めちゃだめ」

「ここはなのはのおしつこの味がするね」

「ふえくん、やっぱり変態さんなの」

まあ、それは明日の話で今は目の前にあることを楽しむのが最優先だ

第16話 私たちに大きなことはできません。小さなことを大きな愛でするだけ

ちよつと過激になのは成分補充完了。これで心置きなく無印を完結させられます。

小学一年生の時のリレーはなのにとってはすすかにとってもアリサにとっても大事なイベントとなっております。アリサの視点もそのうち書きたいですねww

では、次回はフェイトとアルフと一緒に時の庭園に乗り込みます。それしか決まっていますww

では、次回をお楽しみに。

第17話 もし私が神だったら、私は青春を人生の終わりにおいただろう。

すいません。1ヶ月以上間が開いちゃいましたが更新です。

皆さんは地震の被害とか大丈夫でしたか。自分は『TOLLOVEる
ダークネス1巻』が手に入らない以外は特に変わりないです。き
っと買い占めの波がコミックにまで影響したのかなと思ってます。
テレビでも買い占めは止めましようとうと放送してますしね。それとも
被災地に援助されたのか……。被災地の人が少しでも漫画を読ん
で元気になるなら買えなくてもいいなと思ってます。

・・・でも欲しいなww

とにかく今回は1ヶ月分とはいかなくても文字数が一万文字を越え
てるので読み応えはあるかなと思います。

では、第17話をお楽しみください。

第17話 もし私が神だったら、 私は青春を人生の終わりにおいただろう。

side 楓

フェイトとアルフにリニスを会わせてあげました。感動の再開をしているのを尻目に一人で時の庭園に転移する。仲間に黙ってラスボスに挑むとか主人公っぽいぜww

流石に主人公といえども他人の家に忍び込んでおいて堂々とするつもりはない。こそこそとほふく前進で進む

色々な機械で囲まれた実験室のようなところを訓練された傭兵のようにつくばりながら進んでいると黄色い光に照らされた大きなシリンダーの中に膝を抱えた裸の女の子がいた。アリシア発見である

目をつぶり意識は勿論ない。というか死んでると思うんだが体は生前的ままの綺麗な状態を保っており透けるような白い肌を晒している

「nice裸」

僕は目を奪われていた。美しい彫像を眺めた時のような美がそこにあった。昔から芸術と女性の裸には切っても切り離せない程密接な関係にあるのだ。有名な芸術家達は誰しもその美に見せられ後世に絵や彫像として残している

さながら今の僕はその芸術品を品評する美に魅せられた鑑賞者といったところか。細部まで精巧に美しく。下からや正面から満遍なく鑑賞する。

成長前の膨らんでいない胸にパイパンに恥ずかしい窄まり。安らかに閉じられた目も柔らかかそうなほったも。見れば見るほど

よくできた人体模型だ

ここには随分腕のいい人形師がいるようだな。僕は気づいていないのだ。あくまでも人体模型を眺める。女の子を模した芸術品を眺める。きつと十分後くらいにアリシアの体だって気づくかもしれないけども。相手の許可なく女の子の裸をジロジロ見るのはいけないこと。只知道らなかったんだからしかたないよねww

ほお、凄いこだわりだな。思わず色んな角度から魅入ってしまう。
注意する人がいないのでしゃがんで下からのぞき込んだりしてみる。
なるほど、女の子の体ってこうなってるんだね

いつも思ってたんだ。なんで学校にある人体模型はあんな容姿であんな体系なのかと。あれが美少女とかniceバディーな美女ならこちらも本気で授業に取り組めるというのに

それによって小さいころから人体に興味をもった少年たちが将来にどれほど社会で活躍できたかは想像に難しくない。実に残念なことだ

そして僕は少年誌であれだけ心を揺さぶられる漫画。『T O L O V E る ダークネス』を描く矢吹先生を尊敬してやまないのだ。規制とかマジ許さん。エロを規制するから今の日本は小作りに消極的になり少子化という大問題に繋がったに違いない。

エロ怖い↓小作り怖い

・ この流れを作った日本は衰退するのは目に見えていたというのに・

まあ、色々語ったが。いつだってエロがあるから人は生まれる。エロを失った人類に未来はない。それが言いたかったただけなんだ

そして目の前の裸の女の子はエロいゆえに美しい。しばらく僕はその女の子を眺めているのだった

外が騒がしくなってきたのに気付く僕は裸体鑑賞を止めて実験室から出て行く。歩いていると遅れてくる筈だったフェイトがプレシアさんに鞭打ちにされていた。

やっちゃった・・・。アリシアの裸に夢中になりすぎてなにもできてないうちにフェイト達が来てしまっていたようだ。これでは先に来た意味がないじゃないか。リニスとアルフはバインドで拘束されてしまっているようだ、もう少しがんばってくれよプレシアさん無傷じゃんWW

フェイトの苦痛の声を聞いて僕は思った。くそっ！！止めろよ！鞭打ちするなら僕が代わってやるから。フェイトを鞭打ちするとかないんという羨ましいことを。もしくは僕を代わりに鞭打ちしてくりゃれ

僕もなんとか参加出来ないかと思い魔法を発動する。

目の前に現れた旅の鏡のゲート。魔法によって繋がる先はフェイトのお尻。変則的だがこれで参加させて貰うでしょう

僕はプレシアさんがフェイトに鞭を打ちつけるタイミングに合わせて指を突き刺す。

「ひゃあっ!?!」

今まで苦痛の声だけを上げていたフェイトが素っ頓狂な声をあげる

「どうしたのかしら？」

「い・・・いえ。なんでもないです」

そんなやりとりをしながら再びフェイトに鞭を振り下ろすプレシアさん。何という外道熟女

何度もプレシアさんが鞭打ちするので僕も負けずに何度もフェイトのお尻を時にはやさしく時には激しく弄り倒す。

鞭打ちに夢中になっているプレシアさんは鞭を振るたびに恍惚とした表情になっていくフェイトには気づかないのだった

「待て!!」

「誰よあなた」

「・・・カ・・・エデ。・・・やっぱり」

やっぱり？よくわからんが助けに来たぞフェイト！！

こちらをトロンとした目で見た後に力尽きるようにうつ伏せになる
フェイト。頬を染めて呼吸が荒い、いわゆる発情状態に違いない。

ここはあの台詞を言うしかないな

「間に合った・・・。数え切れない世界で後悔した。いつも、気付くときには手遅れだった。・・・僕が、ずっとずっと、一番伝えなかった言葉を言うよ。フェイトちゃん、君を助けに来た・・・！！」

赤さかああああ！！ひぐらしの名シーンk t k r

「もう一度聞いわ、誰よあなた」

ですよねえ
W W

——ここからダイジェスト突入・・・

『その人形はわたしのアリシアとは何もかも違う。アリシアは私にやさしかった、もっと笑ってくれた。せっかくアリシアの記憶を与えたのにそのできそこないは似てるのは容姿だけ。アリシアの失敗作よ』

『フェイトをアリシアの代わりと考えること自体おかしいんだよ。仮に記憶も容姿も行動も魔力資質も全部同じ人間ができたら満足だったのか？大事にとってあるアリシアの体は用済みで捨てると？そんなわけないだろ。代わりがきかないから大事な娘なんだろうが。自分がまいた種だろ、娘の一人や二人増えたくらいでガタガタぬかすな！！』

『子供のあなたになにがわかるというの！！』

『なんで子供でもわかることがわからないんだよ！！』

『私は忘却の都アルハザードに行きアリシアを、過去を取り戻すのよ』

『それは無理だ』

『なんですって』

『アルハザードは確かに失われた技術やロストログアで溢れているが。人を生き返らせる技術などない』

『何を根拠に』

『僕は何度もアルハザードを訪れている。そんなに行きたいなら後でいくらでも連れてってやるよ。アリシアを生き返らせた後にな』

『・・・冗談でも笑えないわよ。アルハザードに行ったことがあってその技術も無いと言っておきながら。あんたがアリシアを生き返らせるですって』

『口先だけで出来ないことだらけの魔導士と一緒にしないでくれ。僕は不可能を可能にする真正正銘の魔法使いだ!』

『信じられないわね』

『大体自分の娘を裸で生体ポットの中に放置ってどういうことだ。隅々まで裸を見せて貰ったよ。これは責任として将来嫁に貰うしかないじゃないか!』

『私のアリシアを汚れた目で見ないでロリコン!』

『ざけんな僕はまだ子供なんだよ。性教育も受けてない無垢な美少年だ。』

『ロリコンはみんなそう言うのよ』

『言わねえよ！この楓様に任せろ。今生き返らせてやるからな。僕のアリシア』

『私のアリシアよ！あんたなんかアリシアを任せられないわ！』

『なら無理やり生き返らせてやる！白雪姫的に僕のキスで目覚めるんだ！』

『させるかああああ！』

『どりゃああああ！アリシアのファーストキスは僕のもんだー！』

ワーワー、キャーキャー、ちゅーー。いやあああ。ベキバキ

『・・・あれ、ママア？』

『アリ・・・シア。本当に』

『老けた？』

『・・・』

『・・・つぶぷ。すまん、どうぞ続けてくれよ。おばさん』

『ちょっと待っててね、アリシア。・・・あんたは余程死にたいよ
うね』

『あれ〜？格好いいお兄さんだれ？』

『僕はアリシアちゃんを救いに来た王子様だよ。ほら裸じゃ寒いだろ。僕の上着を羽織るといい』（きらん☆）

『・・・っぽ。ありがとう格好いいお兄さん』

『アリシアを誑かすなー！』

『わかってるってプレシアさんも長い年月研究に費やした為に老けてしまった。だけど、魔法使いの僕の手にかかればあらず不思議二十代の頃に大変身』

『いつものママだ〜。凄いね私の王子様は』

『だろ？』

『感謝はしないわよ。あんたが勝手にやっただけなんだから』

『ツンデレ乙ww』

『うるさい！・・・ってあら。体が軽い』

『プレシアさんも随分無理して体がボロボロだったから若返らせるついでに治しといたぜ。後半年も保たない体ってアリシアを生き返らせた後どうするつもりだったんだよ。もともとから僕に嫁がせるつもりだったのか？』

『だからあんたにだけは任せられないってば。それにしても私の体ってそこまでガタがきてたのね。どれだけ周りが見えてなかったのかよくわかるわ』

『そりゃそうだ。こんなに可愛くて母親想いのフェイトにあればだけ暴言を吐く位だからな』

『母さん・・・』

『フェイト、ごめんなさいね。許してなんて言えない立場なのはわかっているわ。それだけのことを私はしてきたのだから』

『そんなことないよ。自分がクローンだって知った時はショックだったけど。私は確かにここに居て、母さんがいたから私が生まれることができた。私の母親は母さんだけだよ』

『フェイト・・・』

『フェイトが許しても僕が許さんがな』

『黙りなさい部外者』

『ちよっ、恩人にする対応じゃないやろそれWW』

『黙ってなよ楓。やっとフェイトが母親と仲直りしてるんだからさあ』

『流石に空気読みましようかマスター』

『アルフとリニスに取り押さえられている様子はさながら逆レイプを連想させるな。構わん続けたまえ』

『いいのかい？ 獣の性欲は半端ないよ。フェイトを笑顔にしてくれた分は感謝しようじゃないか』

『マスターが望むなら是非ありません』

『よっしゃ。じゃあ、親子の語らいが終わったら呼びに来てくれ。空気の読める僕は別室でアルフとリニスと戯れているからな。』

———獸美女達と戯れ中・・・

いやゝ、苦勞しましたよ。ようやく無印が完結しましたね。内容を纏めるとしたら10話分位あったかな。

凄く嬉しそうにプレシアさんの傍にいるフェイトを見て本当に良かった。家族とは本当に困ったときに見返りを求めないで助け合える関係なのだと思う。

とりあえずプレシアの病気を治療するついでに実年齢の半分位の容姿にしたのは大正解だったな。優しいなプレシアさんはとても魅力的だった。本人も大変喜んでいたいことだらけだ

そういう僕も、聞くも涙語るも涙の経験を経験したことで一回り成長できたことだろう。いずれ語る時が来たなら語りたいと思う。

だけど今はこの家族の団欒みたいな雰囲気混ぜて貰おつと。おい、僕も混ぜておくれよ

プレシアさんに二人っきりで話がしたいと誘われました。連れてこられたのはプレシアさんの私室。なんというか大胆なお方だww

「それにしてもあんたの名前、野原 楓だっけ？野原君とか呼ぶのは気持ち悪いから楓って呼ぶけど、いったい何者なのよ。はつきり言って私の病気は最先端の技術でも治せない不治の病だった。それを苦勞無く治したのも異常だけど死者の蘇生は次元が違うわ。忘却の都アルハザードという御伽噺に縋らなければならぬ程にね」

御伽噺だと理解しながらも縋らなければならなかったのか。自棄になっただんかね

「まあ、管理局風に言うならレアスキルを持っているんです。異常な程に強力なものをね。他人にばらさないことが条件だけど聞きます？」

「研究者として気になるわね。条件を飲むわ教えてもらえるかしら」

余裕をもった美女っていいね。プレシアさんは本来の性格に戻ったようにだ

「了解。僕はこの力を『常識を操る程度の能力』と呼んでいます」

「常識を操る程度って随分曖昧ね。」

「そうですね。でも、はっきりいって僕に出来ないことは殆どないと思ってもらって構わないと思いますよ。」

「随分大きくてたわね。確かに死者蘇生ができるのだから言うだけのことはあるのだろうけど」

「例えば周りの人に偽りの常識を与えることができる。規模を大きくすれば管理局を僕の奴隷にすることだってできます」

「確かにとんでもない力だけどそれだけでは死者の蘇生は無理よ」

「その通り。じゃあ、『死んだ人は生き返らない』という常識があるとする。」

「まさか」

「そう、僕の力は常識を操る力なんだ。そこに常識が存在するならいくらでも覆すことができる。生き返らないという常識があるなら生き返るという常識に変えてしまうだけだ。」

「・・・とんでもないわね。それが事実だとしたら確かに可能よ。」

「常識を創ることも常識を否定することもできるってこと。さっきは自分に対して『キスした相手を生き返らせる』という常識を創ったんだ。」

「キスする必要はあったのかしら」

「僕は心が震える依頼しか受けないのさ」

シティーハンターは僕の心のバイブルです。新宿のタネ馬と呼ばれた男の格好良さは異常

「つまり必要なかったのね」

「うん」

「・・・はあ、なんなのよあんたは。私は感謝してるのよ。アリシアを生き返らせるという一番の目的も果たせし、フェイトときちんと家族になれるきっかけもくれた。なのに、その恩人のあんたがふざけた奴なんだもの」

「別に感謝して欲しくて助けたんじゃないし。美少女達のピンチと聞いて助けるついでにあわよくば惚れてくれないかなと思ったくらいだ」

「それよ。下心が丸出しなのが問題なのよ。ヘラヘラしないで少しは真面目な顔してみなさい。もてるわよ」

「・・・その程度なら良かったんですけどね。じゃあ少し真面目な顔しますよ」

「ええ」

「・・・好きだ」 (´・ω・｀) キリッ

「ちよっ!?!」

僕はいつものにやけ顔を止めて目や口をキリッとして真面目な顔をする。すると、プレシアさんはまるで生娘が片想いの相手に告白されたかのように顔を一瞬で真っ赤に染め目を逸らす

「こんな感じですが」

「ヤバいわね」

「はい。ぶっちゃけ僕が常に真面目な顔して生活してたら毎日百人単位でストーカーされる自信があります。」

「つまりいつものにやけ顔はわざとなのね」

「そうです。今もなんとかプレシアさんの裸を想像してにやにやしています、いつまで保つか」

「・・・魔法で吹き飛ばしたいとこだけどよく考えたらフェイトと

同じ9歳なのよね。警戒するのも馬鹿らしいわ」

「プレシアさんの未亡人おっばい・・・モミモミと」

自然な感じでプレシアさんのおっぱいを揉む

「でも、限度があるわよ!!」

「魔法は僕に効かないでござる。常識でござる」

そう宣言するとプレシアさんから放たれた魔法が僕の目の前で霧散する

「くううう、反則よそんなレアスキル！」

「まあ、そんなに気になるなら常識を操って僕が一時的に女になりましょうか？容姿的に美少女になること間違いなしだし。近づいて

くるイケメン達を再起不能になるまで痛めつけるのも楽しそうだし。百合にも興味あるし」

「もう何でもいいわよ！とにかく楓には感謝してるわ。・・・ありがとう」

「いってことよ。そういえば目的は達成したけど研究者としてまだアルハザードに興味あったりします？」

「そうね、確かに興味はあるわ。でも、今は家族でのんびりしたい気分なのよ」

優しい顔をするプレシアさん

「それがいいと思いますよ。僕としてはフェイトに近いうちに僕と同じ地球の学校に通って欲しいんですけど。」

「思えばフェイトにもアリシアにも友達をつくれる機会を与えられ

なかったのは母親として失格かもしれないわね。」

「前のプレシアさんは知りませんが。今のプレシアは母性に溢れていて僕は好きですよ」

「ありがとう。フェイトとアリシアと友達になってくれるかしら？」

「友達どころか恋人だって夫だって父親だって兄にだってなりますよ」

「何かおかしいの混ざってなかった？」

「気のせいですよ。とにかく困ったことがあれば頼って下さい。全力で助けになります」

「その言葉信じるわよ。で、いつ頃から入学させようかしら」

意外に乗り気やね。

「僕に任せて貰えれば来週には入学させてみます」

「流石の手際ね。実は授業参観とか憧れてたのよねえ……うふふ
っ」

母性に目覚めたプレシアさんを見て僕は無性にあるものが飲みたく
なってきた

「プレシアママ……おっぱい飲みたい」

「おととい来なさい」

「じゃあ、おとといに行ってきますね」

「・・・だいたいもう出ないわよ。アリシア産んでから何年経って
ると思ってるの？」

「こんな時こそ僕の力で再び母乳を出せるように常識を操って」

「殺すわよ」

「冗談ですよ冗談。でも、フェイトもアリシアもまだ子供ですから
甘えさせてあげてくださいね。リニスもアルフも、そしてプレシア
さんも。やっと揃った家族です、仲良くしない手はないでしょ？」

「もちろんよ」

「ついでに僕も近い内に家族の一員になる予定ですので」

「それは了承できかねるわね」

「いいじゃないですか。仲間外れ反対です。おっぱいも揉みたいです」

「・・・欲望が漏れ出してるわよ」

「頭も体も子供の僕に煩惱などありませんよ」

「本当かしら、アルハザードの技術で子供の体になる薬でも飲んだんじゃないの？」

「やめてくださいよプレシアさん。真面目な顔をしない為にそういう態度をとりますがあくまで演技ですから。たとえプレシアさんの入浴中にニヤニヤした僕が突入して来たとしても演技ですから」

「しつこいわね・・・。わかったわよ。それにしても、アルハザードは本当にあったのね」

「あつたんですよ。それで考えたんですけど、アルハザードに行けるのって僕と僕の家族だけなんですよね。だから、これから僕はアルハザードの王子を名乗ろう思います。管理局が来て何か文句言ってきたら、『僕はアルハザードの王子だぞ愚民が!』みたいな感じでいきたいんですけどどう思います?」

僕は今考えついたものをデバイスのチルノに送りバリアジャケットとして『アルハザード王の王冠』を登録。それを即座に装備する。

布の部分は高級感溢れる赤い布で金属部分は純金と純銀を上手く使い分けられている。至る所に上品にダイヤがあしらわれていて正面にはよく磨かれたルビーが鎮座している。

その王冠を頭に乗せている僕をプレシアさんは呆然と眺めながら言った

「凄いわね……。知識の無い私でも素晴らしいできなのはわかるわ」

「そうでしょうとも。即席にしては良くできました。しかも『

僕がこの王冠を着けている間は誰もが僕の命令に喜んで従い。僕に不利になることができない。』そう常識を操りましたからこれ程、王に相応しい王冠も無いと思います。」

「変態王子の独裁が始まるのね」

「そんな言い方ないじゃないですか。罰として僕にパンツ見せてくださいよ」

「喜んで!!」

プレシアさんは満面の笑顔でスカートをガバツと託しあげて黒いシルクの下着を僕に晒す。若返ったプレシアさんは色気溢れる美女なので大変眼福でした

「ぷふっ……。そのポーズのままその場で腰を上下に振って欲しいな」

side プレシア

「はあっ……、はあっ……。」

らしくなく大声を出したことで乱れた呼吸を整えながら近くにある椅子に座る

「幸せ……か。その為に研究に打ち込んで、他の全てを切り捨てる覚悟でやってきたはずなのに」

自分の努力が実って実現したものではない。実現させたのはどこからともなく突然やってきた十にも満たない男の子。

自分の手でアリシアを助けることが出来なかったことは不甲斐なく思う。でもそれ以上に今ある幸せな現実には胸が一杯になる

「アリシア……。フェイト……。」

突然舞い込んで来た幸せに自分の心がついてきてなかったのか今更になって辛かった過去が思い起こされる。何度も自殺を考えた。

でも、アリシアを生き返らせることができるのは自分しか居ないんだと、決して誉められた母親では無かったけれどアリシアのたった一人の母親である自分が娘を投げ出す訳にはいかない。それだけが心の指針としてあり続けたのだ

「・・・楓」

そして長い月日が流れて確かにたどり着いた幸せ。癪けどやっぱり感謝するあいては楓なのだろう

落ち着いて考えることが出来るようになって心が幸せで満ちていき涙が溢れ出す。

「うっ・・・。くうう」

静かに嗚咽をあげる。娘達や楓達にこんな恥ずかしい姿を見られずに良かったと思う。思えば楓が場を引っ掻き回したお陰で人前で泣かずに済んだようにも感じる。

「ふふっ、気のせいよね・・・」

でも悪い気はしなかった。いつもニヤニヤしてるしエロガキで正義の味方なんかとは程遠い存在だ。でも、綺麗事ばかり並べて何もしない正義の味方よりは何倍もましだろう

「それにしてもフェイトは完全にベタ惚れだし。アリシアも惹かれ気味。リニスは楓至上主義だしアルフはフェイトの恩人ってことでやっぱり嫌いじゃないと」

考えてみると自分の大切な家族達がかなり楓に傾向気味のようだ。かくいう私も嫌いではない

恩人というのもあるが裏表のない性格は好感がもてるし容姿は全く

問題ない。相手は子供だが十年も経てばとても魅力的な青年になることだろう。

いや・・・、五年後位から視野に入れてもいいかもしれないわね。研究一筋でアリシアが生まれてからご無沙汰だったし年下っていうのも新鮮で楽しみだわ

私は現状を整理してこれから先のことを考える。家族でのんびりして。落ち着いたら楓も誘って旅行なんかもいいかしらね。アリシアもフェイトも喜ぶといいのだけど

「まあ、それもこれもみんなと話し合わないことには始まらないわよね。今は何よりも大切な家族達がいるのだから。」

まだ母親としては経験不足かもしれないけれど、行動しなきゃなにも始まらない。そう思い私は愛する家族たちの声のする部屋に向かう

部屋の中から聞こえてくる明るい声に頬を緩めながら耳を澄ましてみる

『ええ！！だめだよフェイト。お尻の穴は汚いんだから』

『でもねアリシア、カエデに触られるとお腹の奥がキュンってなつて幸せな気持ちになるんだ。これっておかしいのかなカエデ？』

『大人になればみんな知ってることなんだけどね。それはフェイトが僕を好きならとても自然な反応なんだよ。『尻愛』といって知り合いの語源になった言葉があるんだ。愛し合うなら尻まで愛せという昔からあるありがたい言葉でね。僕がフェイトのお尻を触るのは僕がフェイトを本気で愛している証明みたいなものなんだ。そしてそれを受け入れてくれたフェイトとは相性抜群で相思相愛ってことさ』

『えへへ。相思相愛なんだね』

『楓お兄ちゃんは物知りですごいね！私のお尻でも尻愛できるかな？』

『うーん。相性もあるから触ってみたいとわからないよ。ちょっとお兄さんに見せてもらん』

・・・・ふふふ。とりあえずあの変態小僧を消さないといけないよね。私の娘たちにあんな下品な嘘をつくななんてね。余程命がいらな
いとみえるわ

私は怒りに任せて次元跳躍魔法を使い楓に魔法を放つ。すると何故か自分から魔法の方に飛び込んでいきその身に魔法を受ける楓

魔法が消えた後にいたのは無傷で娘たちを背中に守るように両手を
広げ立ち尽くす楓。その姿は攻撃した側から見てもかっこよかった。
ましてや背中に守られた者達にどう見えたかは想像に難しくない

『ふっ・・・、君たちを守れて良かった。どうか覚えていて欲しい。
愛する君たちの為に命をかけて散った愚かな一人の男がいたことを・
・・・・』

無傷の楓がやけに演技臭い長い台詞をいってその場に崩れ落ちた。

『カエデ!!』

『楓お兄ちゃん!!』

涙目で体にすがりつく二人を優しく抱き寄せる楓

『僕の手で二人を幸せにしてあげたかったけどもう駄目みたいだ。
愛してるよ・・・どうか幸せになってくれ』

『無理だよ。だって私の幸せはカエデがいないと叶わないもん!』

『そうだよ! だからいなくなっちゃだめだよ楓お兄ちゃん!』

『愛する二人が看取ってくれる。こんな嬉しいことはない・・・神様にかん・・・しゃ・・・だな・・・ガクッ』

『イヤアアアア』

『ダメエエエエ』

「・・・・・・・・っふん」

「痛っ!？」

私は無言で部屋に入り、いつまでも死んだふりをしているアホを蹴り起こす。可愛い私の娘たちを泣かせるなんてどういふつもりかしらね

「随分楽しそうね。私も混ぜてもらえるかしら？」

「む、無理です。年齢制限に引っ掛かります」

「まあ、そう言わずに。こっちにいらっしやい」

楓の首根っこを掴み廊下に引きずり出す。

「さうて、困ったエログキにはどうお仕置きしてあげようかしら？」

「そうですね……。『僕はお風呂でプレシアさんのおっぱいで体を洗われたら反省します』常識ですよね！」

「そうね。それ位しないとあなたは反省しないでしょうね」

「ひゃっほーい！お風呂だぁぁぁあ！」

そう叫びながら走り出す楓。お仕置きされるのにあの喜びよう。とんでもない変態だわ・・・

side out

そのころアルフは

「私のマスターは？」

「超カッコいい」

「頭を撫でてもらったら？」

「ゴートゥーヘブン」

「その通りです!! ああ、ご主人様のニオイを嗅ぐだけで私は、私
はああああ!」

「リニス・・・どうしちゃったんだい？」

リニスに楓の素晴らしさを教え込まれていた。

第17話　もし私が神だったら、　私は青春を人生の終わりにおいただろう。

最近サブタイトルと本文の関係がわからない作者です。わけがわからないよww

次回は二人の転校生。おや？デバイスの様子が・・・

そんな感じに予定しています。あくまで予定ですけどね。

それにしてもフェイト可愛いな。今までフィギュアとか興味なかったんですが手を出しそうな気がします。値段は9800円七分の一サイズ・・・高いのかなこれ？Amazonって今機能してるんだろうか。部屋にそういうの置くの初めてなんで親とか姉の反応が全く予想できない。wktkが止まりませんww

次回週一は無理かもしれませんが早めに更新したいと思います。

では今回も読んでくれてありがとウサギ。

ポポポポーン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2292p/>

まずはリリカルでハーレムだったり。

2011年6月12日08時15分発行